

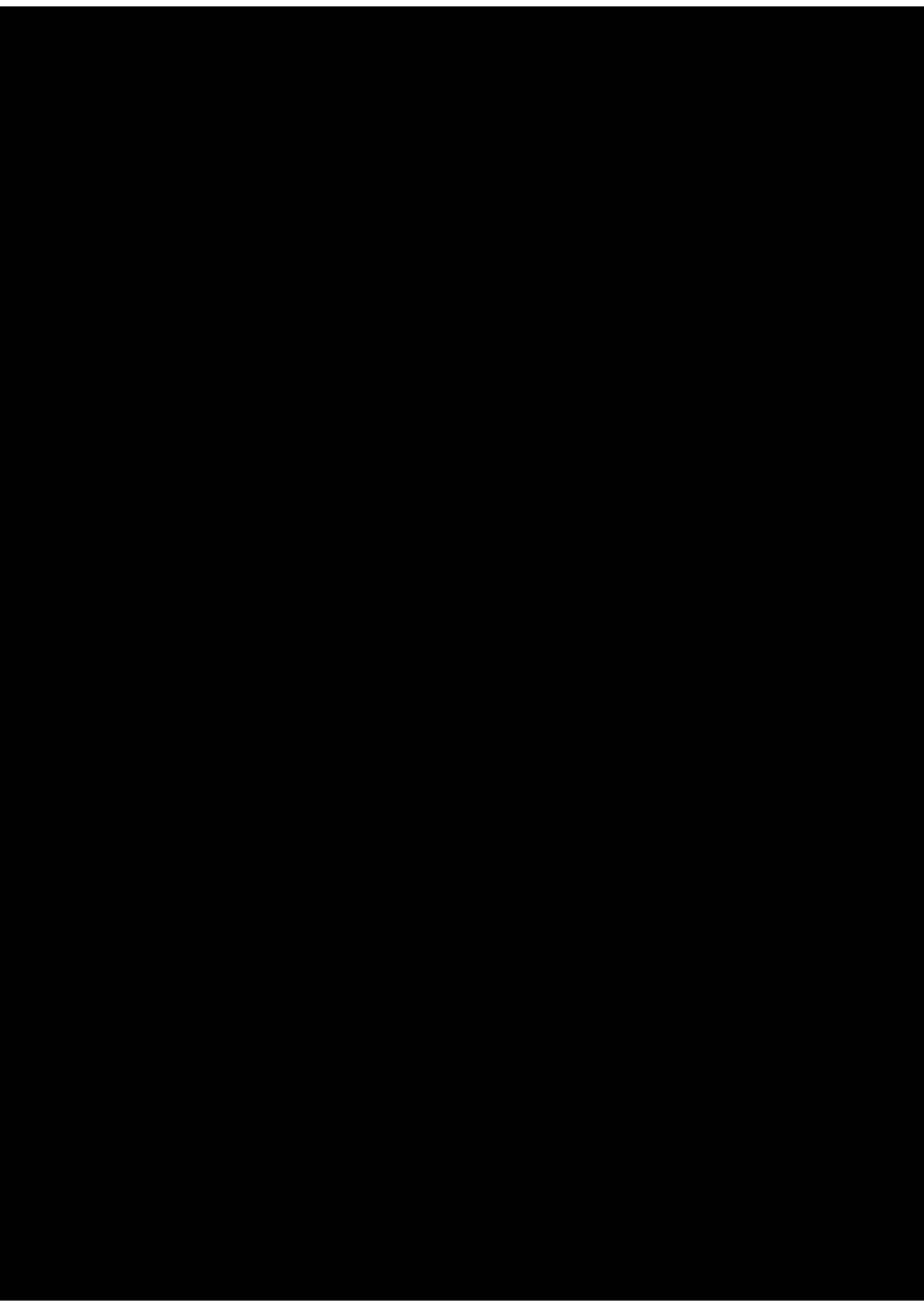


文学女子に

食べられる

4

文学女子に食べられる 4



先輩…



ひそひそ…



はぁ

はぁ

はぁ

ん

ん

ん

ん

ん





5

5

... 5

先輩



くちゅ

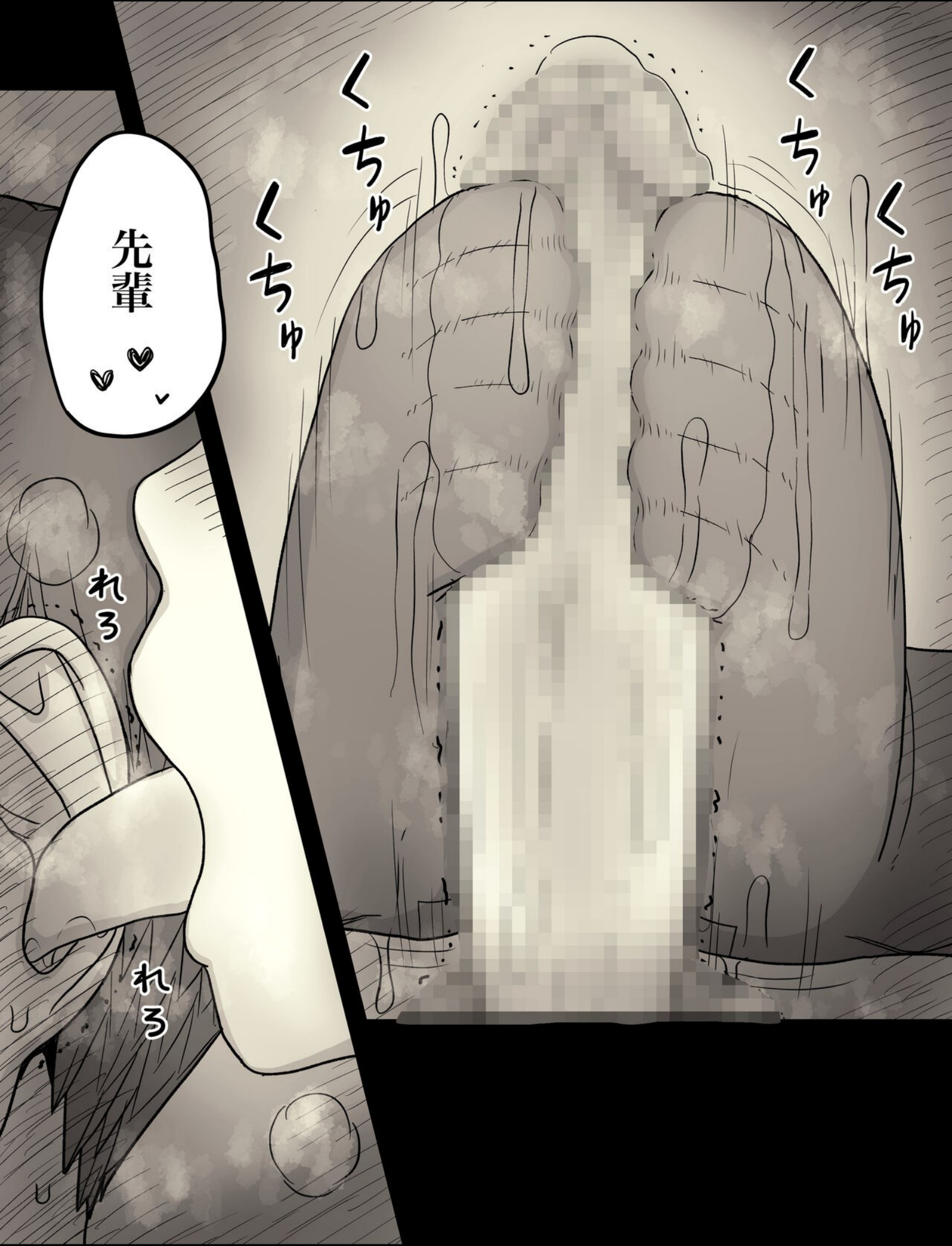
くちゅ

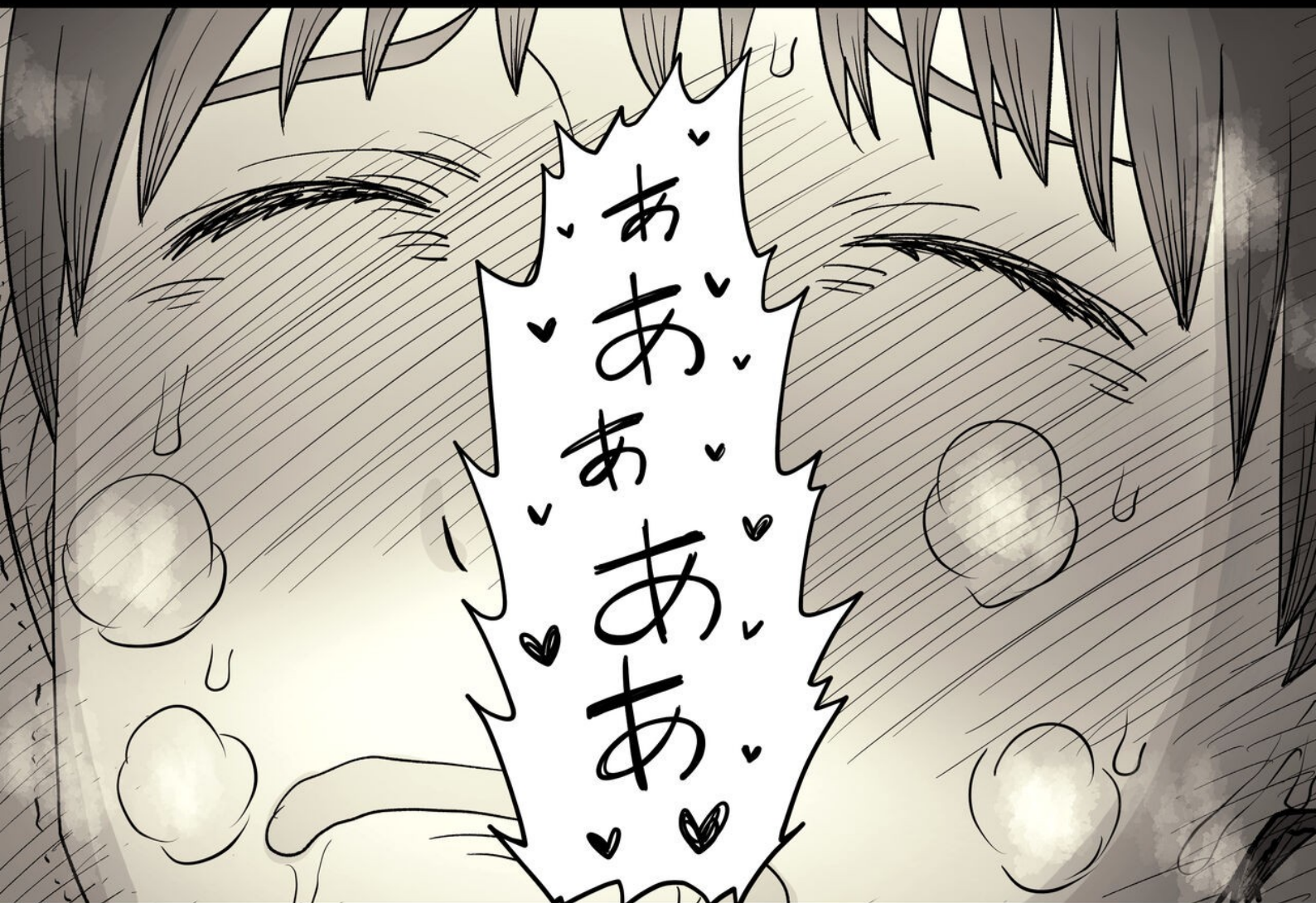
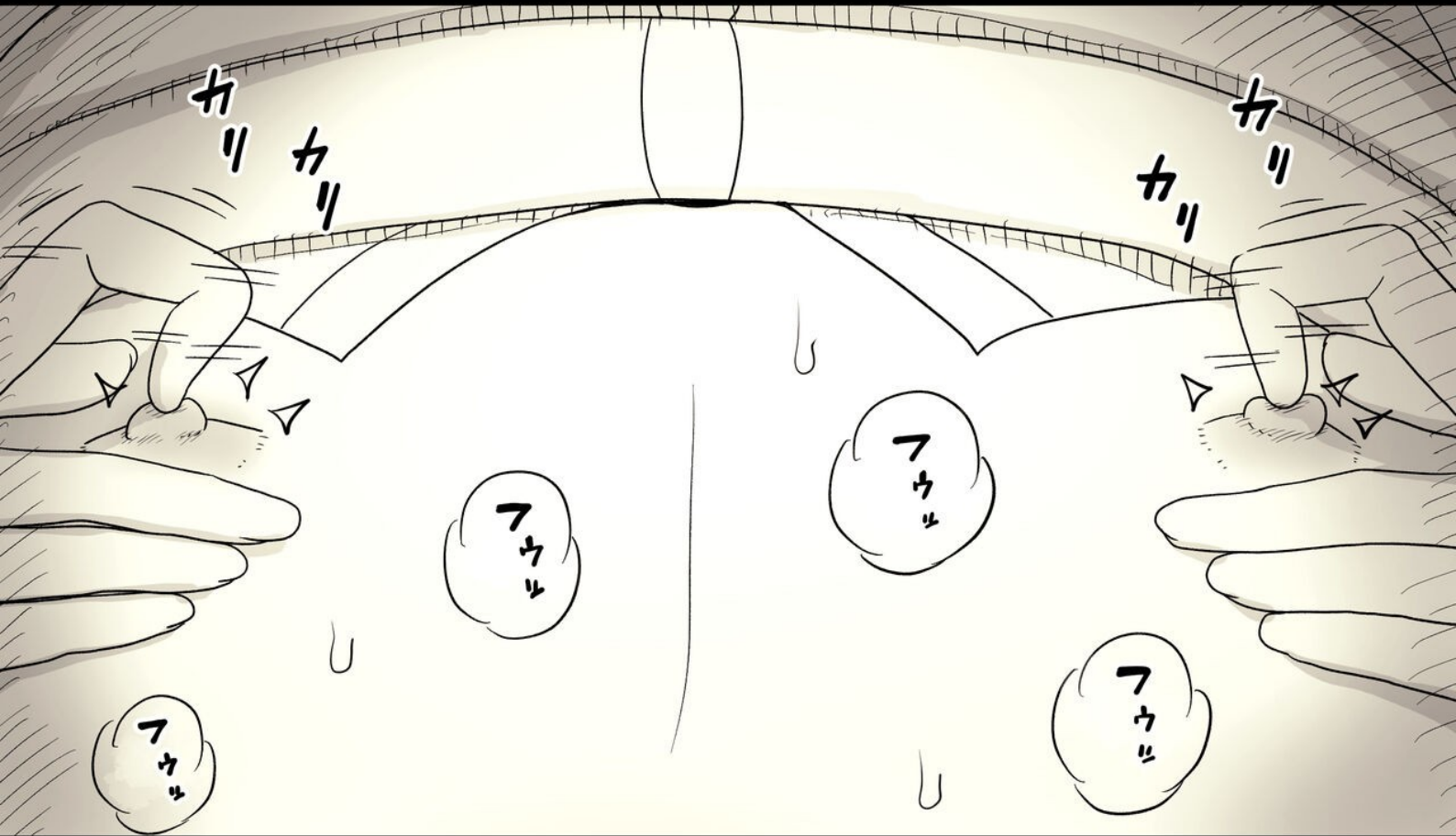
くちゅ

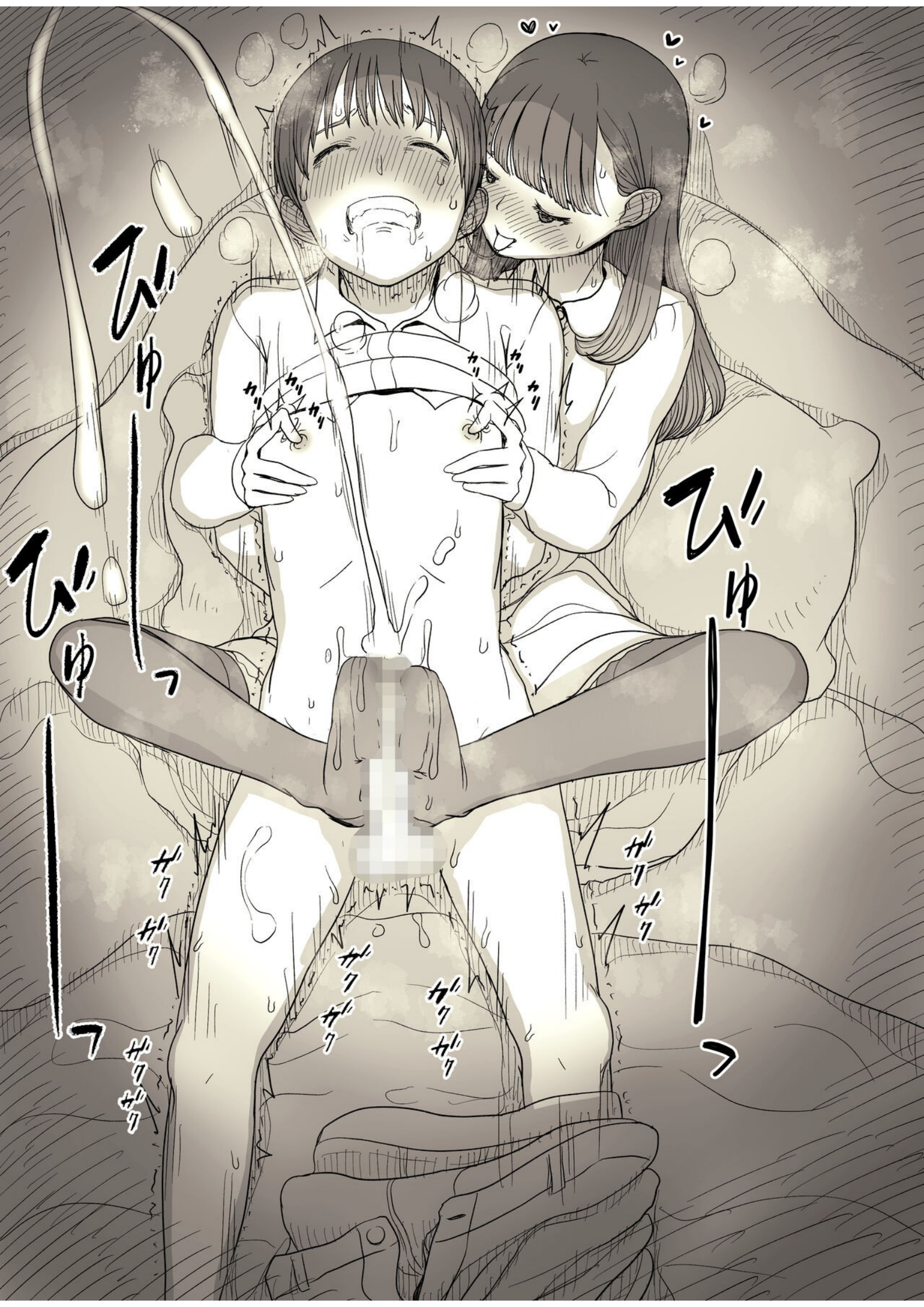
くちゅ

れろ

れろ



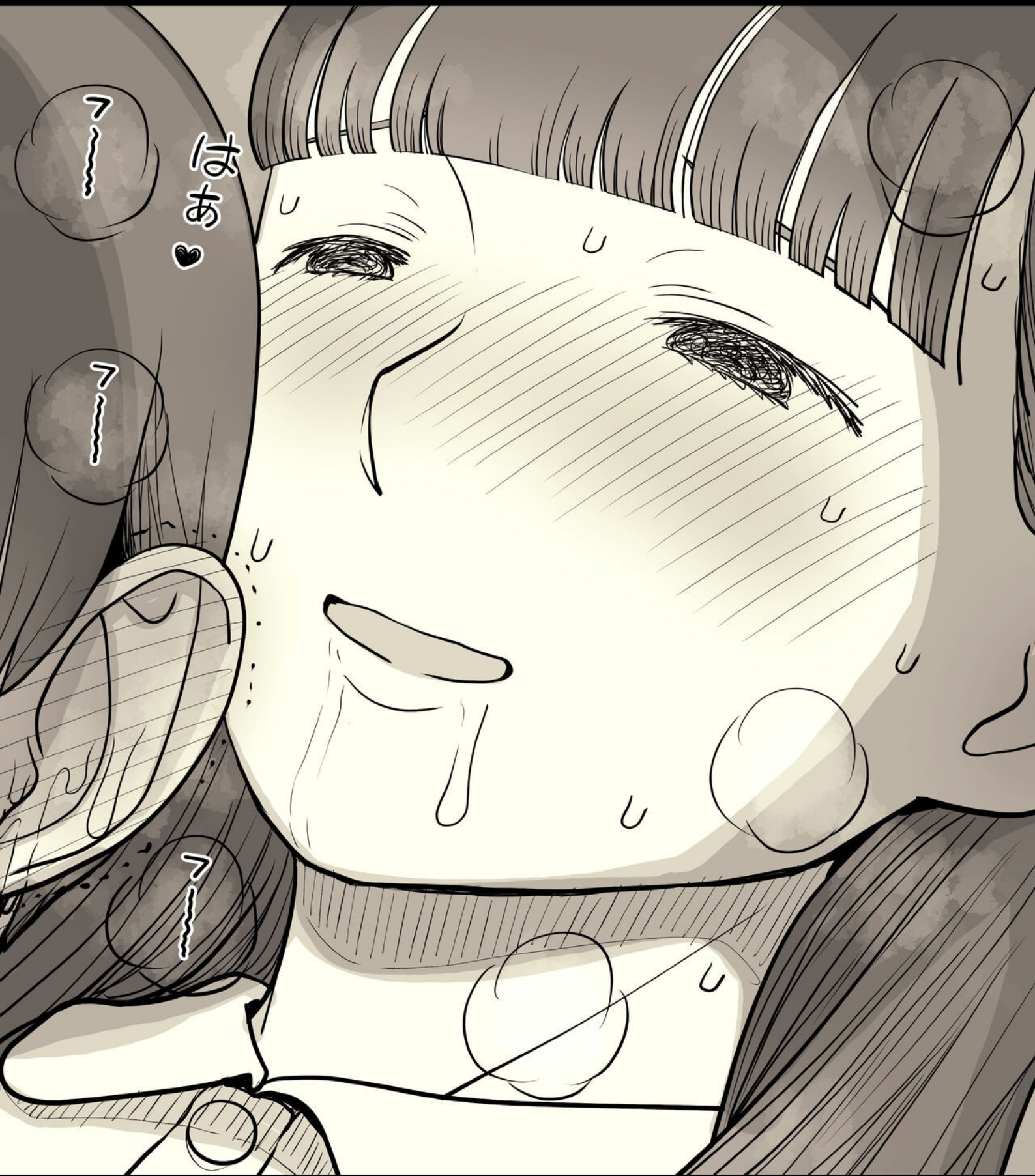


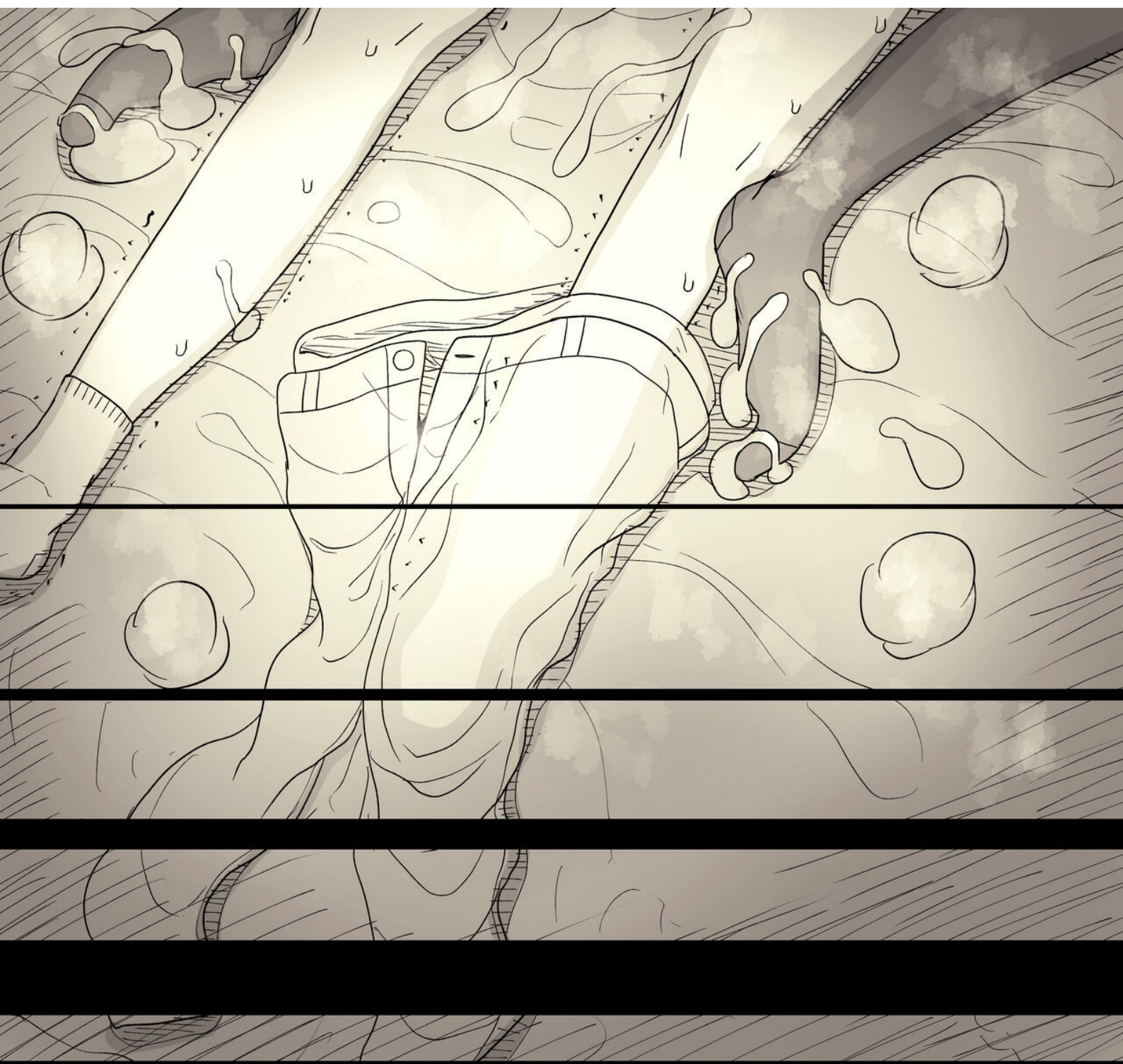





Fi











今日もまた
いつもの寂れた文学サークル室で
夜遅くまで残って
読書が続いている僕達三人。



彼女に身も心も食べられ、
二人だけの秘密の関係が
始まってから約半年。

未だに周りに隠れながら、
週に一度だけ、彼女の家に通い、
僕達の「愛の時間」は続いている。

外での彼女は
相変わらず無表情で、

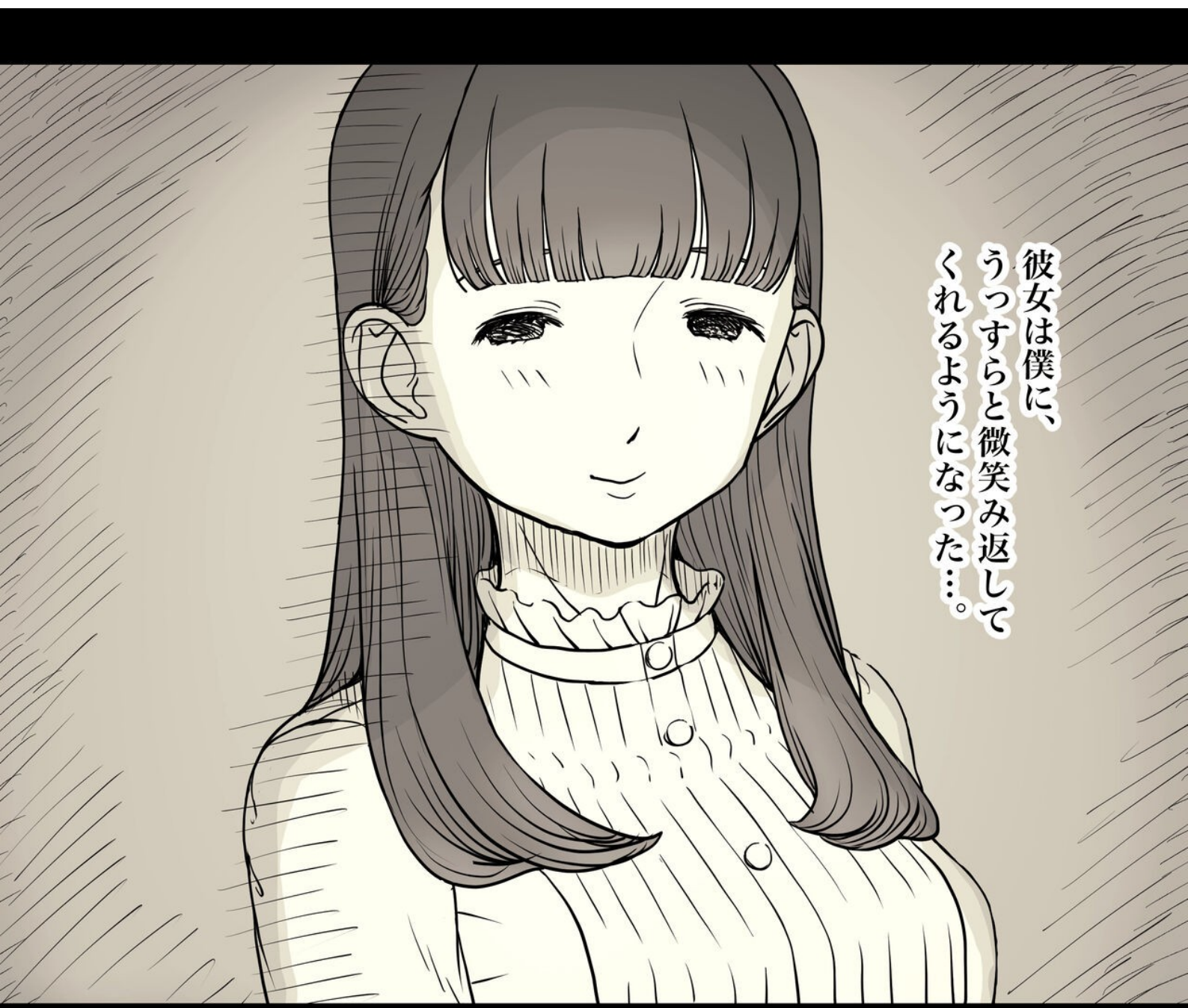
不思議な得体の知れなさを
感じるような態度の
ままだったが、



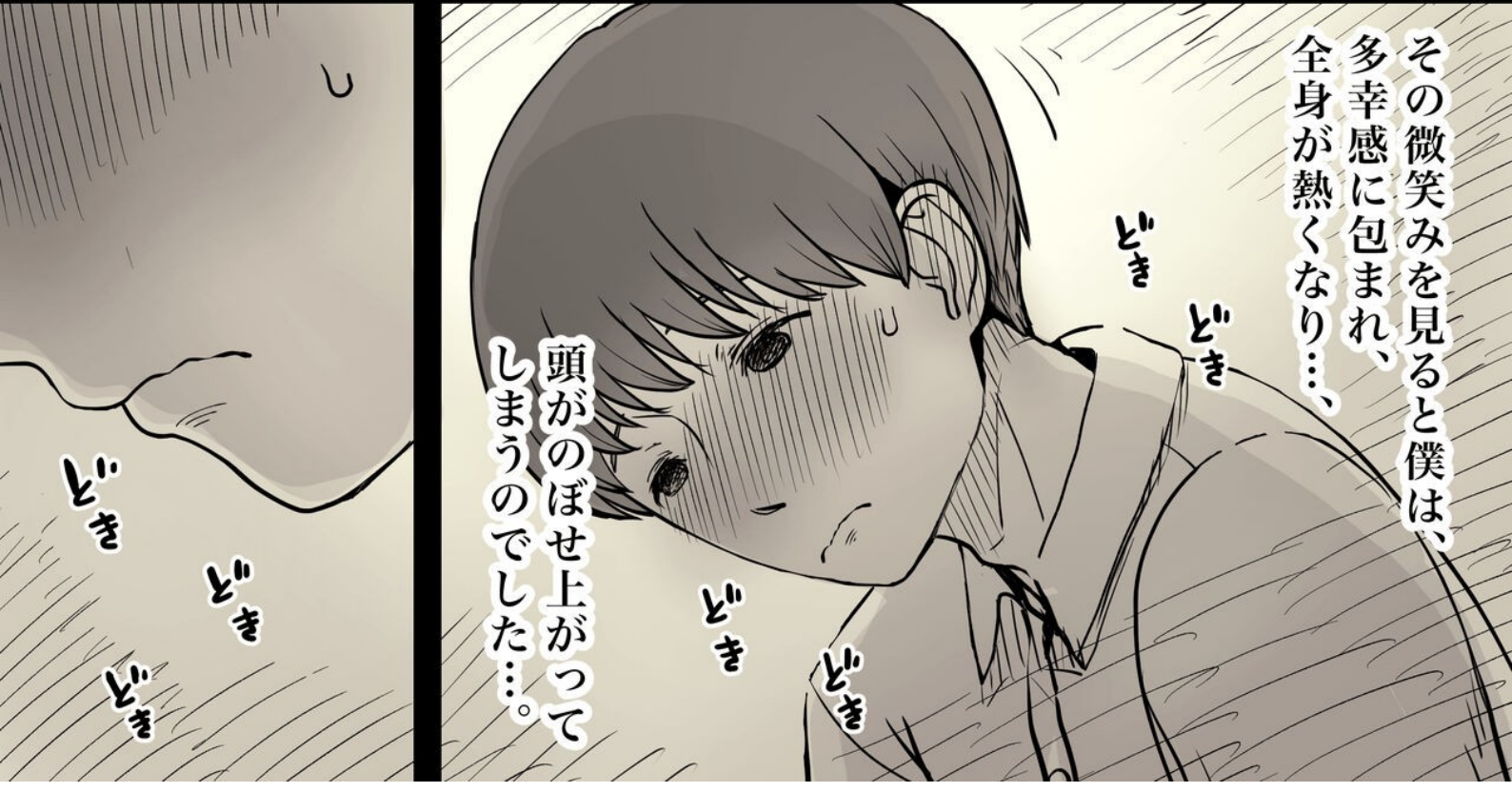
周囲から人が消え
三人きりになっている時、

彼女に目を向けると、





彼女は僕に、
うつすらと微笑み返して
くれるようになった…。



その微笑みを見ると僕は、
多幸感に包まれ、
全身が熱くなり…。

頭がのぼせ上がって
しまうのでした…。

どき

どき

どき

どき

どき

どき

どき

すっかり心の底から繋がりを感じている僕達二人…。
僕はそう信じ切っている…。
彼女もきつと同じ気持ちなのだ…。

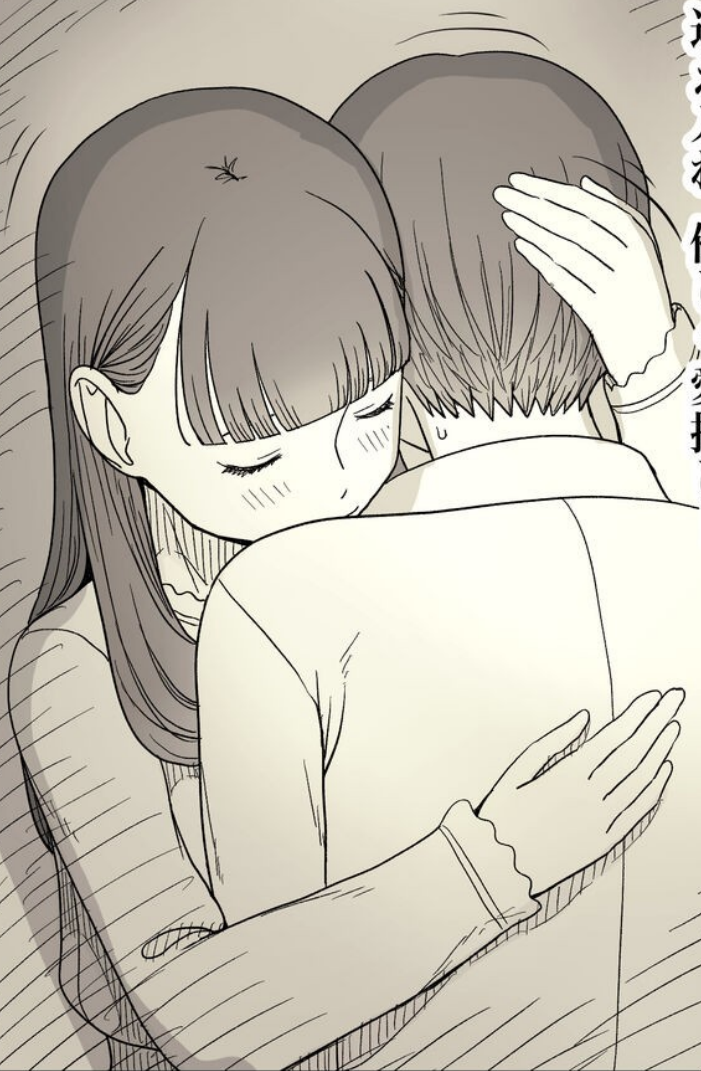
多幸感に包まれながら、
今日もまた、彼女との魅惑的で
愛に満たされた日常が続いていくのでした…。

土曜日の夜、
週に一度の二人だけの特別な日。

いつものように
彼女の部屋に行くと、



玄関入るとすぐ、
彼女はいつものように、
ゆっくりとした仕草で僕を抱きしめ、
迎え入れ、優しく愛撫し…



彼女に今まで

「あんな事」までされてしまった僕は…

こんなにも愛情たつぷりの開発をされ、
彼女色に染まりきってしまった僕は…

これ以上、

一体どんな事をされてしまうんだろう…

どんな風に

開発されていってしまうのだろう…

今日は一体どんな事を…

彼女はその

か細くて可愛らしい声で
僕に囁くように話し始めました。

今日は…

目隠しはしないで
しましよう…
♡

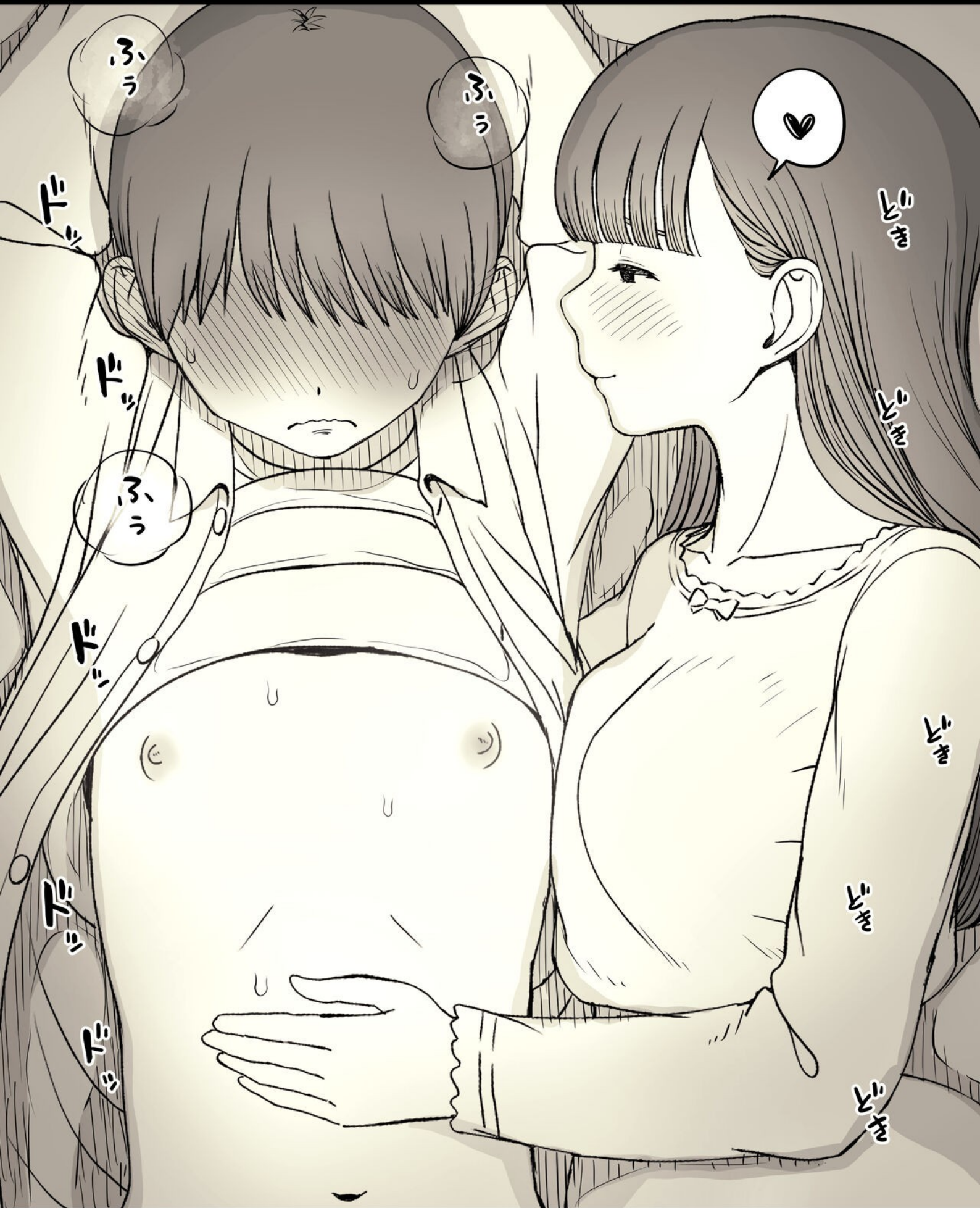


彼女は、僕の手を拘束し…
ベッドに寝かせて、
ゆっくりとした手付きで服をはだけさせ、

そして、僕の横にぴったりと張り付き、
甘ったるい吐息を出しながら、愛おしそうに
僕の素肌を撫で回してきました…。

彼女の手付きは、いつも優しく繊細で、
愛情がこもっているように感じられ…、
それに反応して僕の身体は過剰なほど過敏になり、
頭の中まで火照り切ってしまうのでした…。

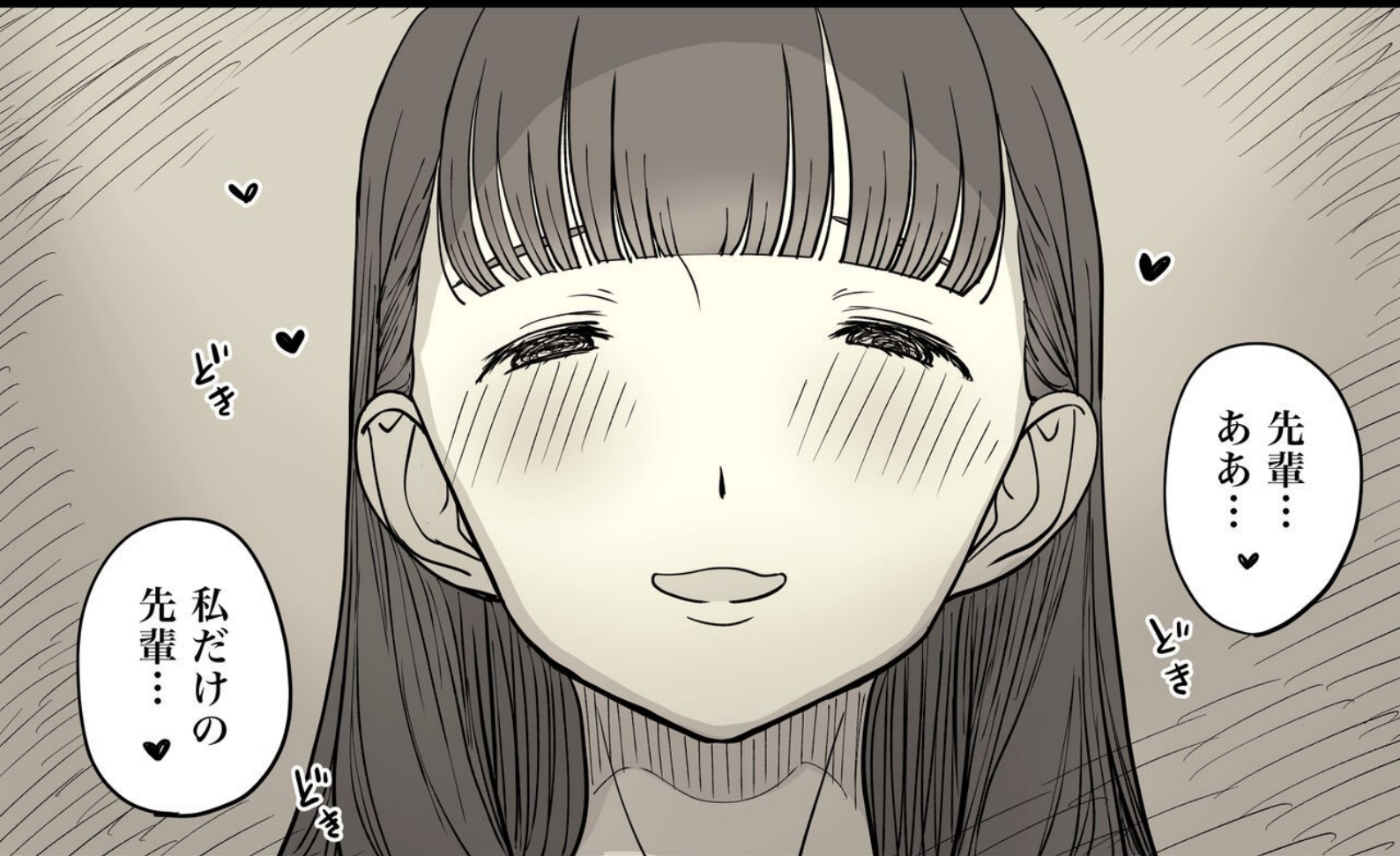






可愛い...

先輩...



私だけの
先輩...

先輩...
ああ...



先輩、

今日は

しっかり
見てて…

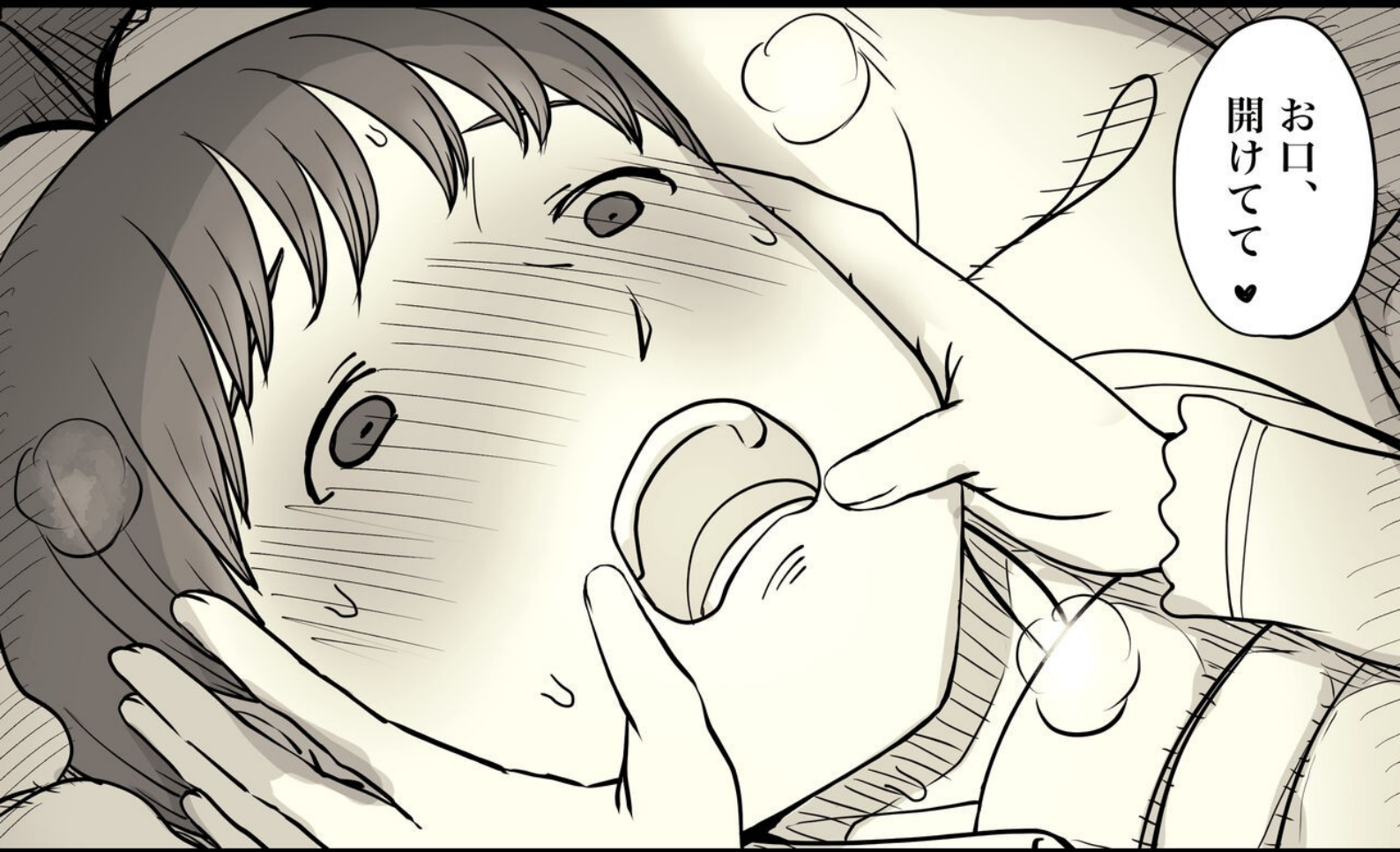
私の
すること、

しっかり
全部見てて♡

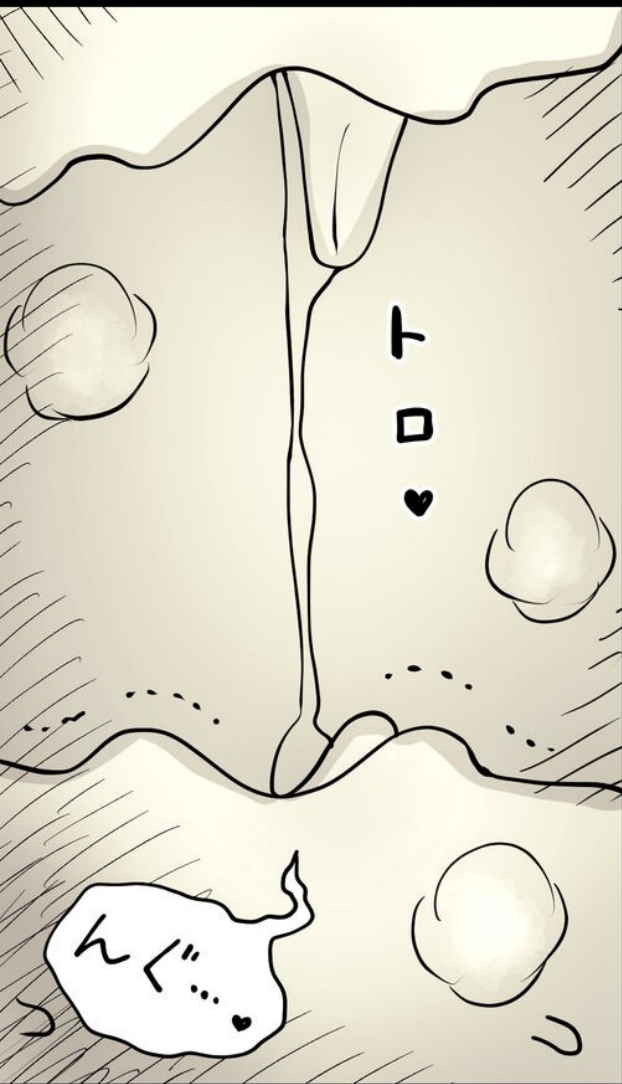
ねえ、
先輩？

私の体液、

今日も欲しい
ですよね…？

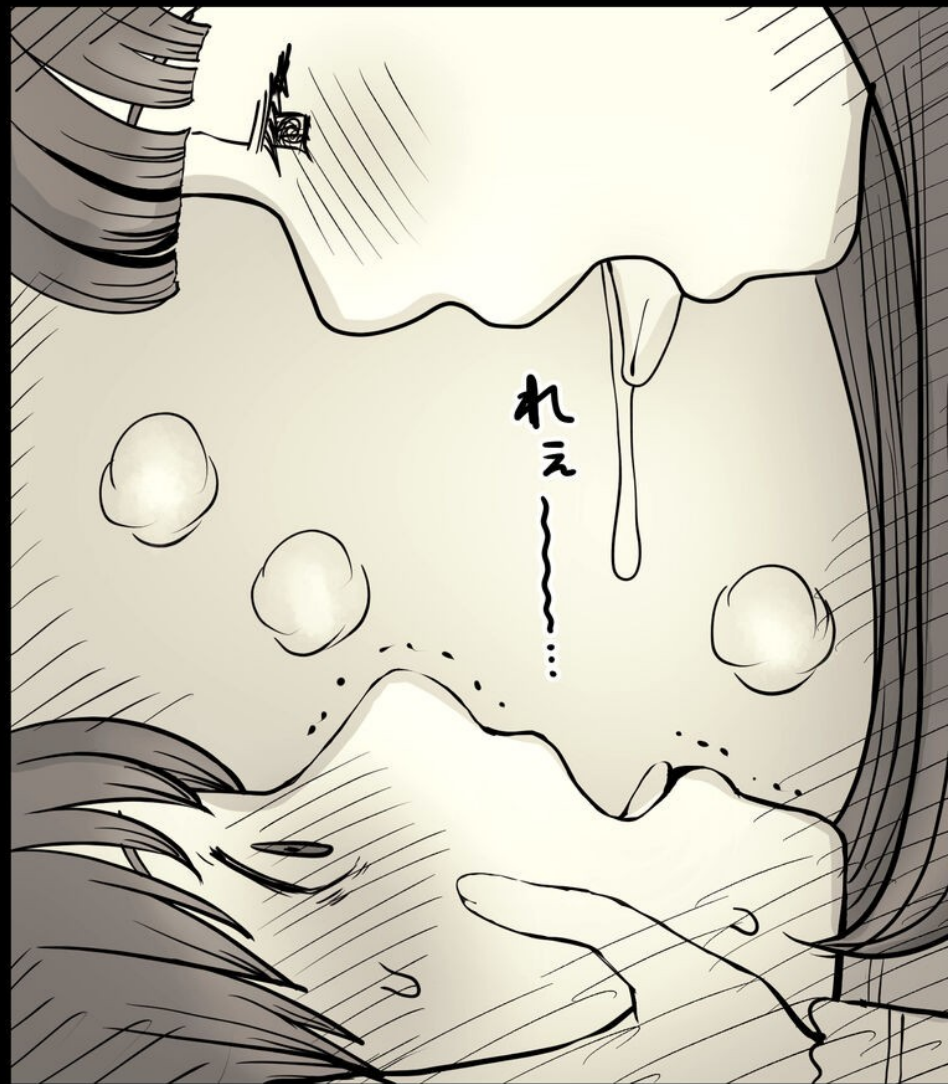


お口、
開けてて♡

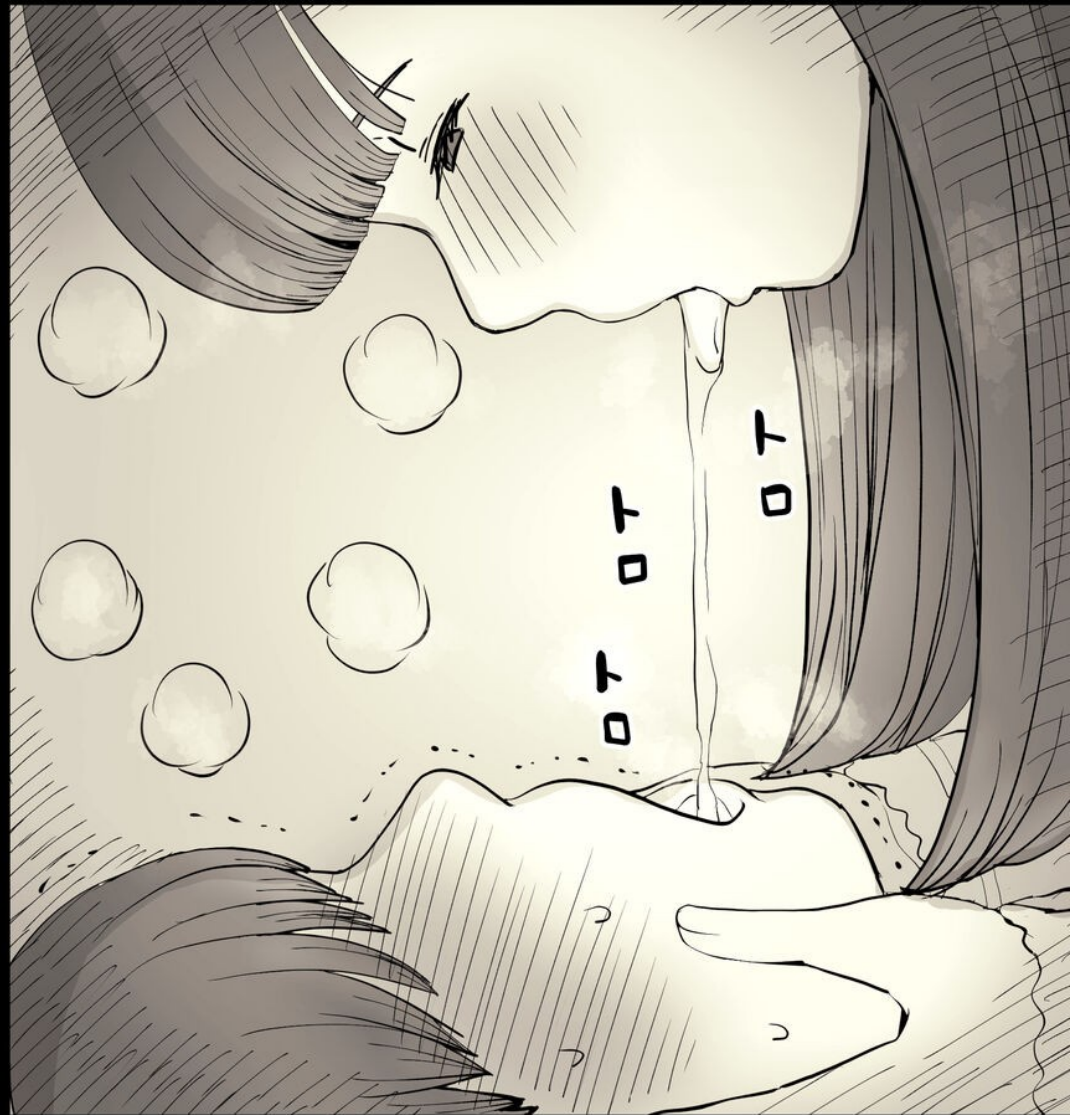
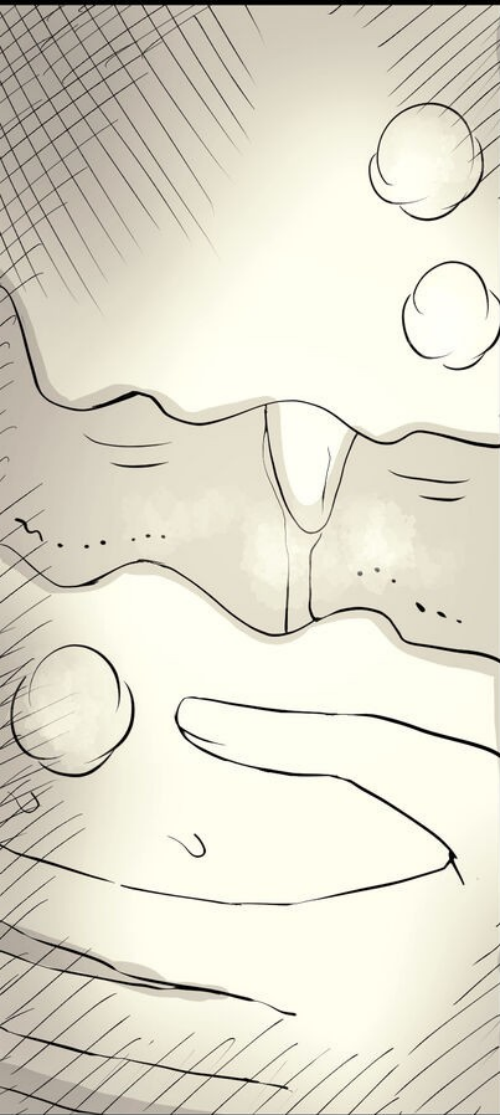


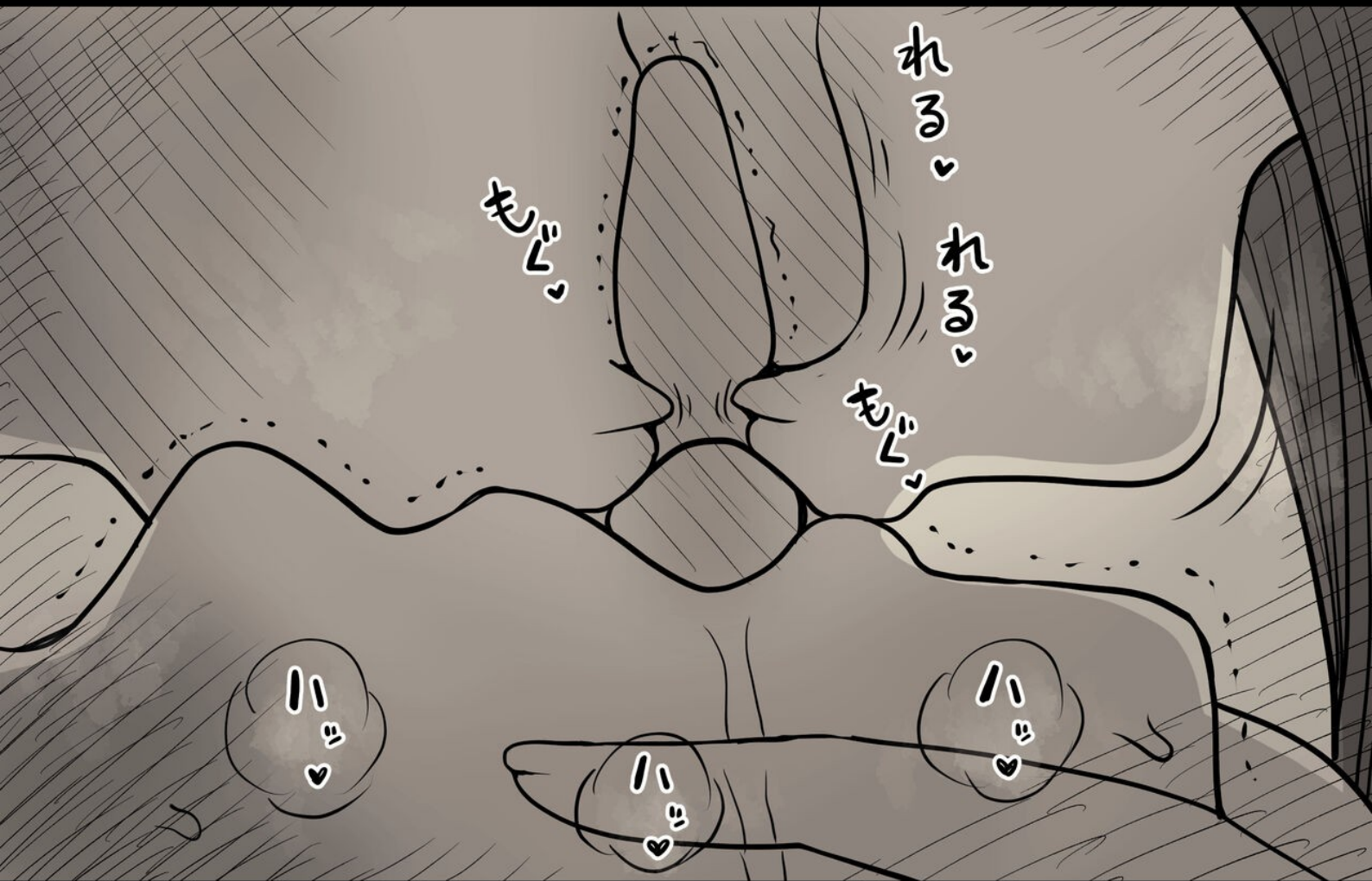
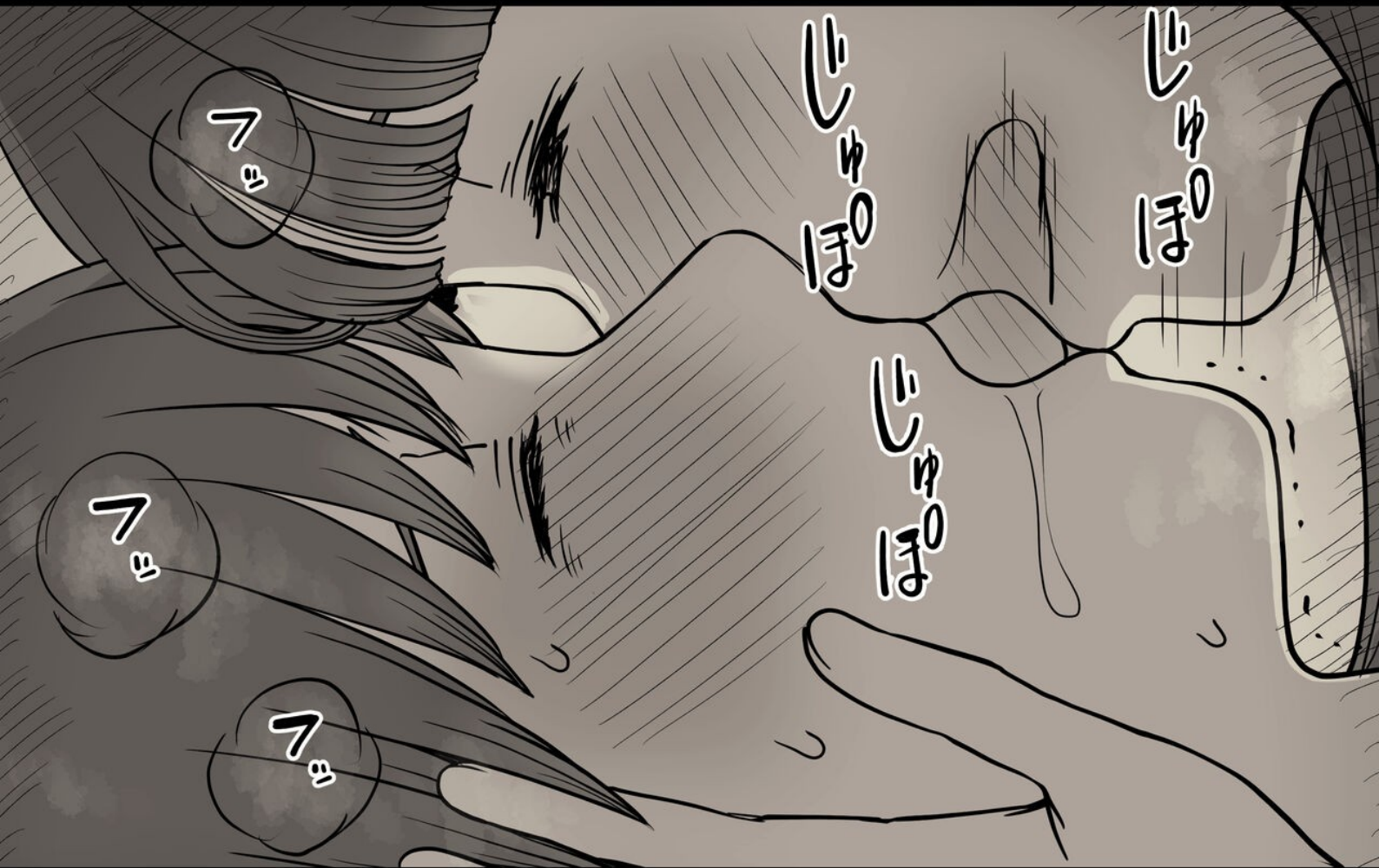
♡ロト

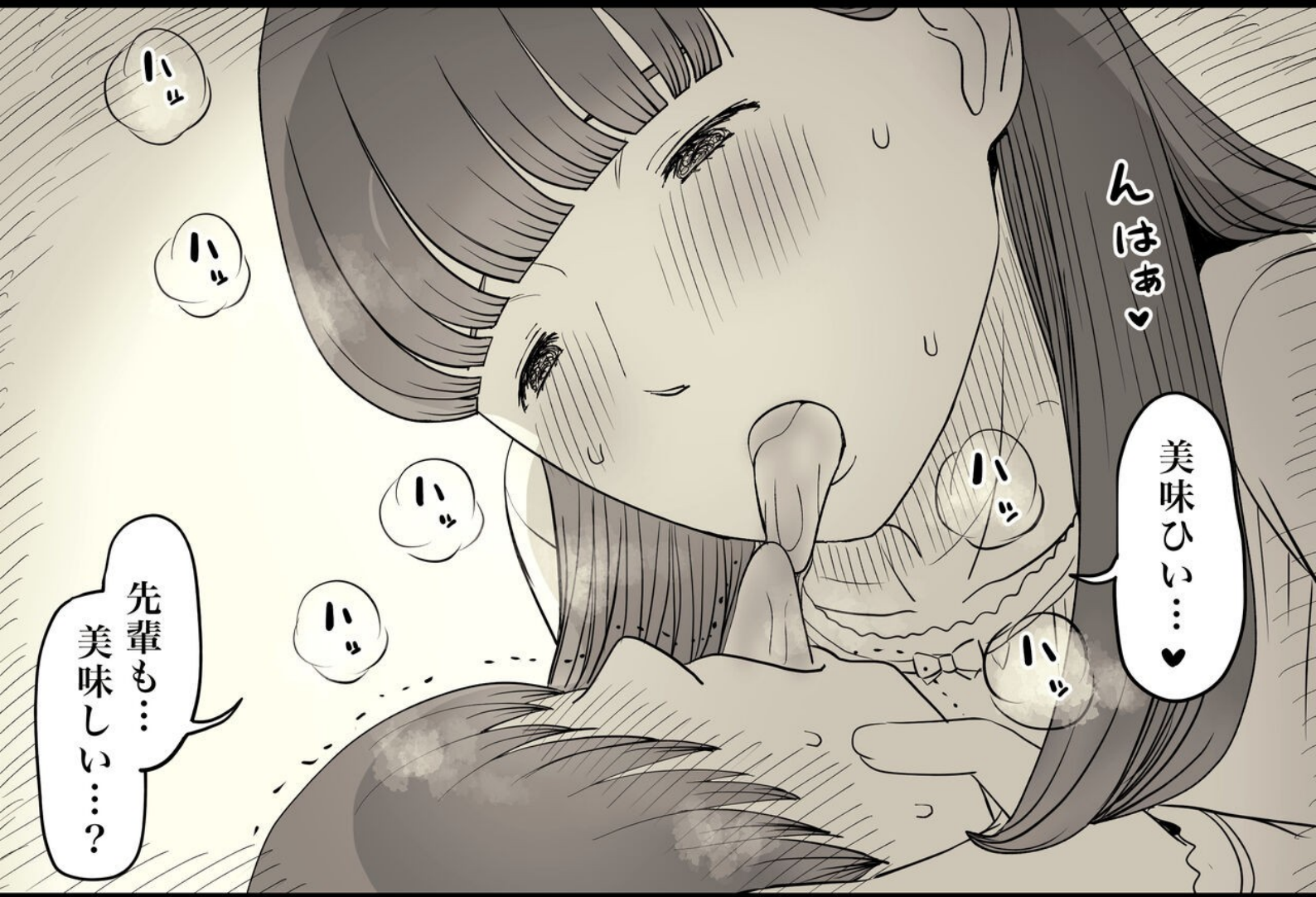
ん〜♡



れえ〜...



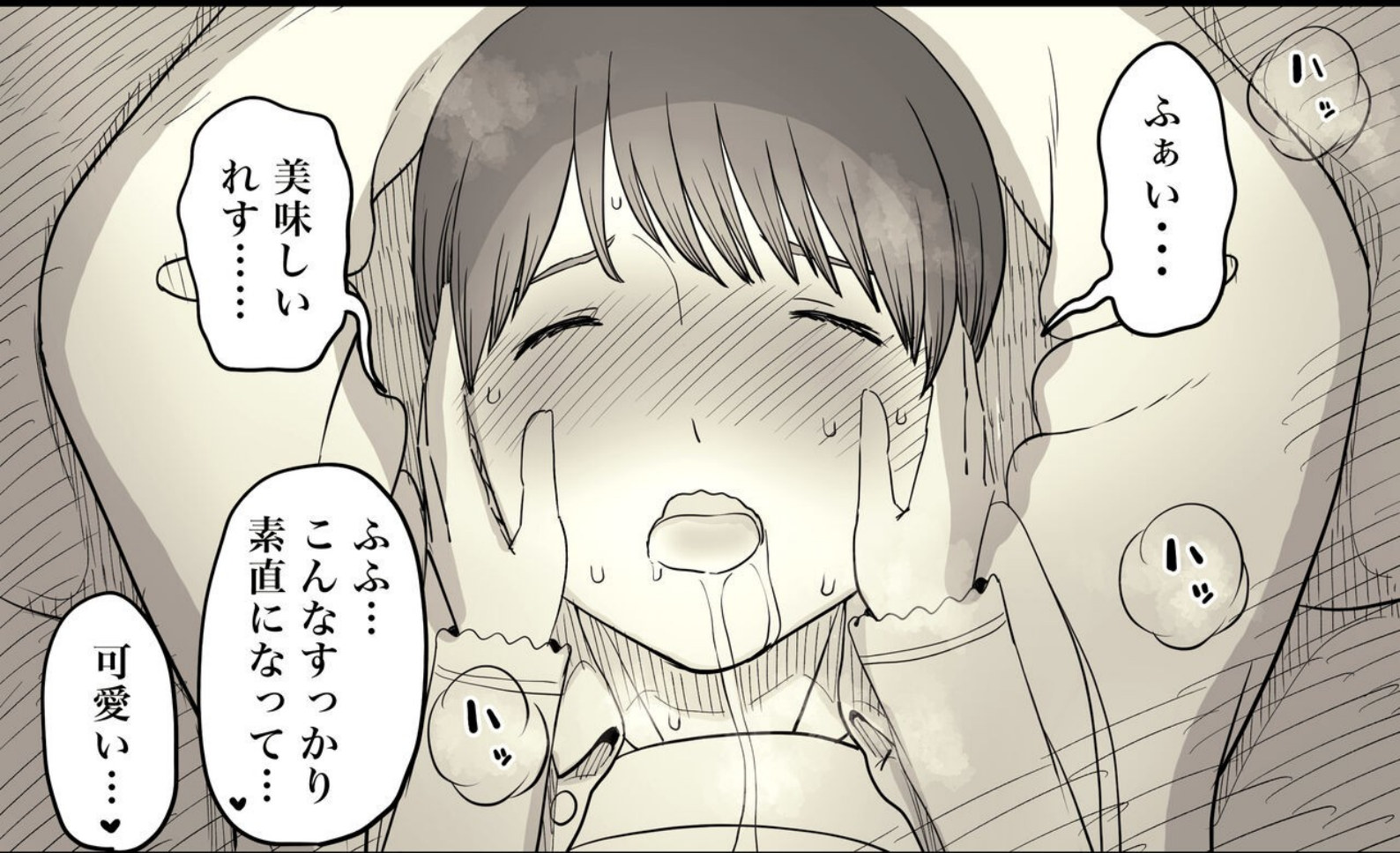




んはあ♡

美味ひい...♡

先輩も...
美味しい...?

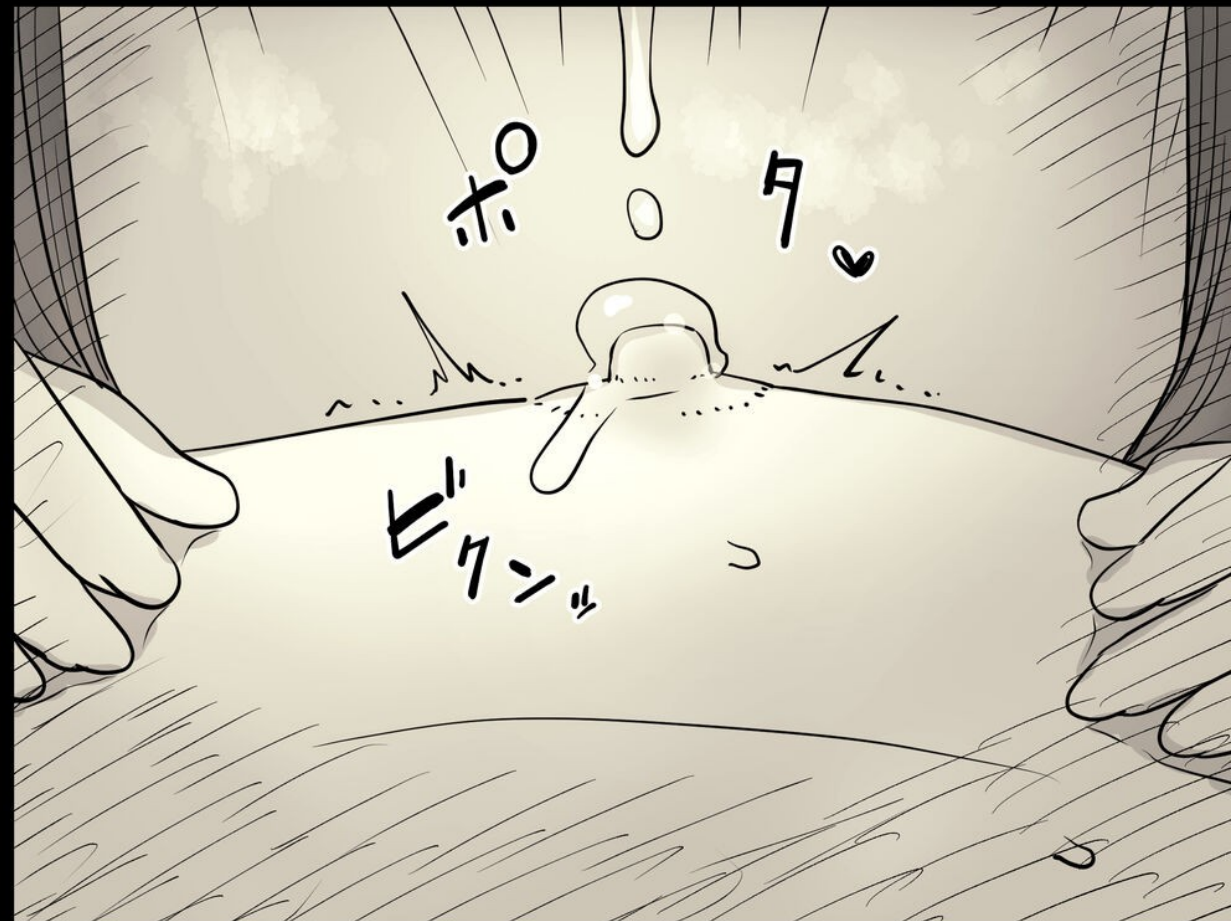
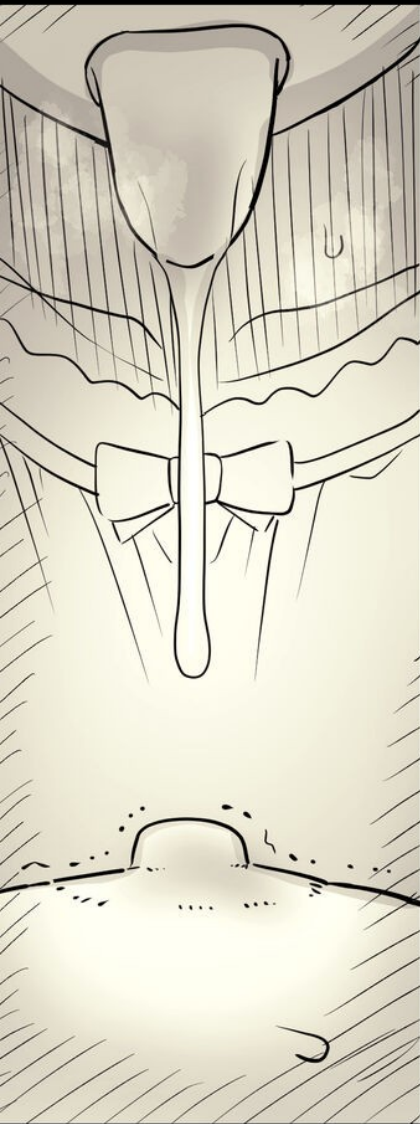


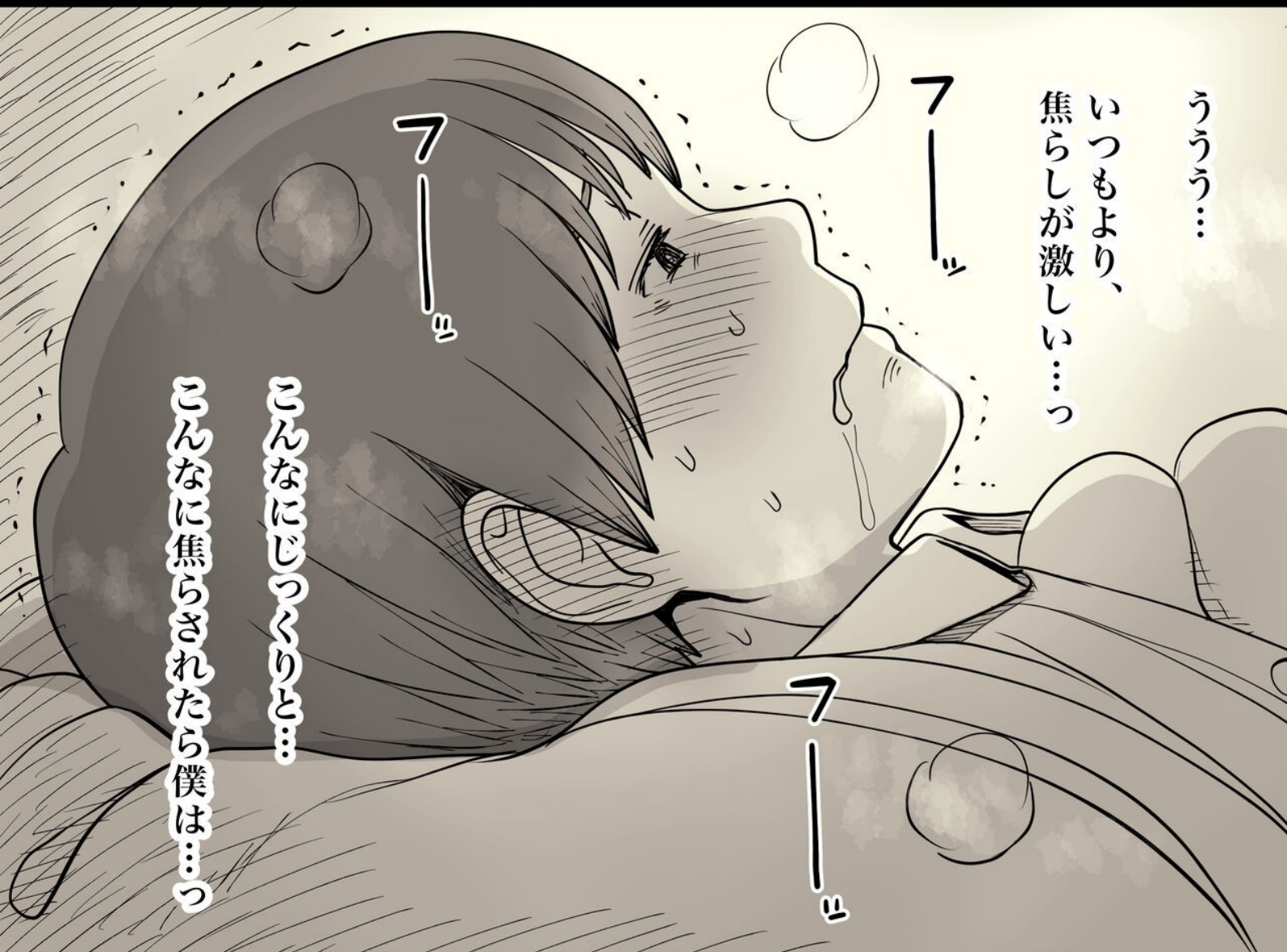
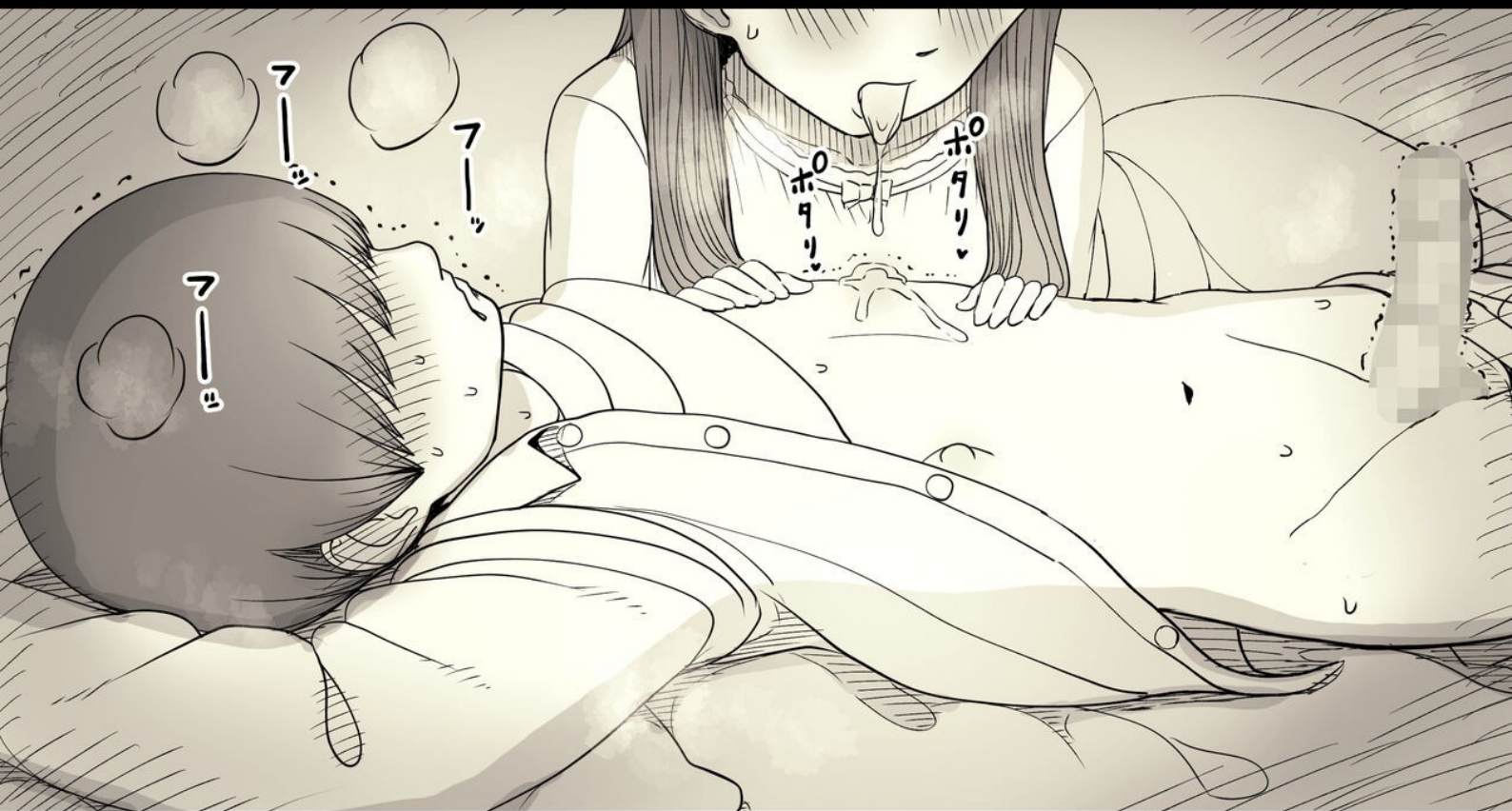
ふあい...

美味しい
ねす...

可愛い...♡

ふふ...
こんなすつかり
素直になつて...





僕の反応を見て楽しみながら、
彼女はとでも嬉しそうに「体液責め」をし続けてきました。

ふふふ…♡

私の唾液で
焦らされるの、
好きなのね…♡

こんなに気持ち
良さそうにして…♡

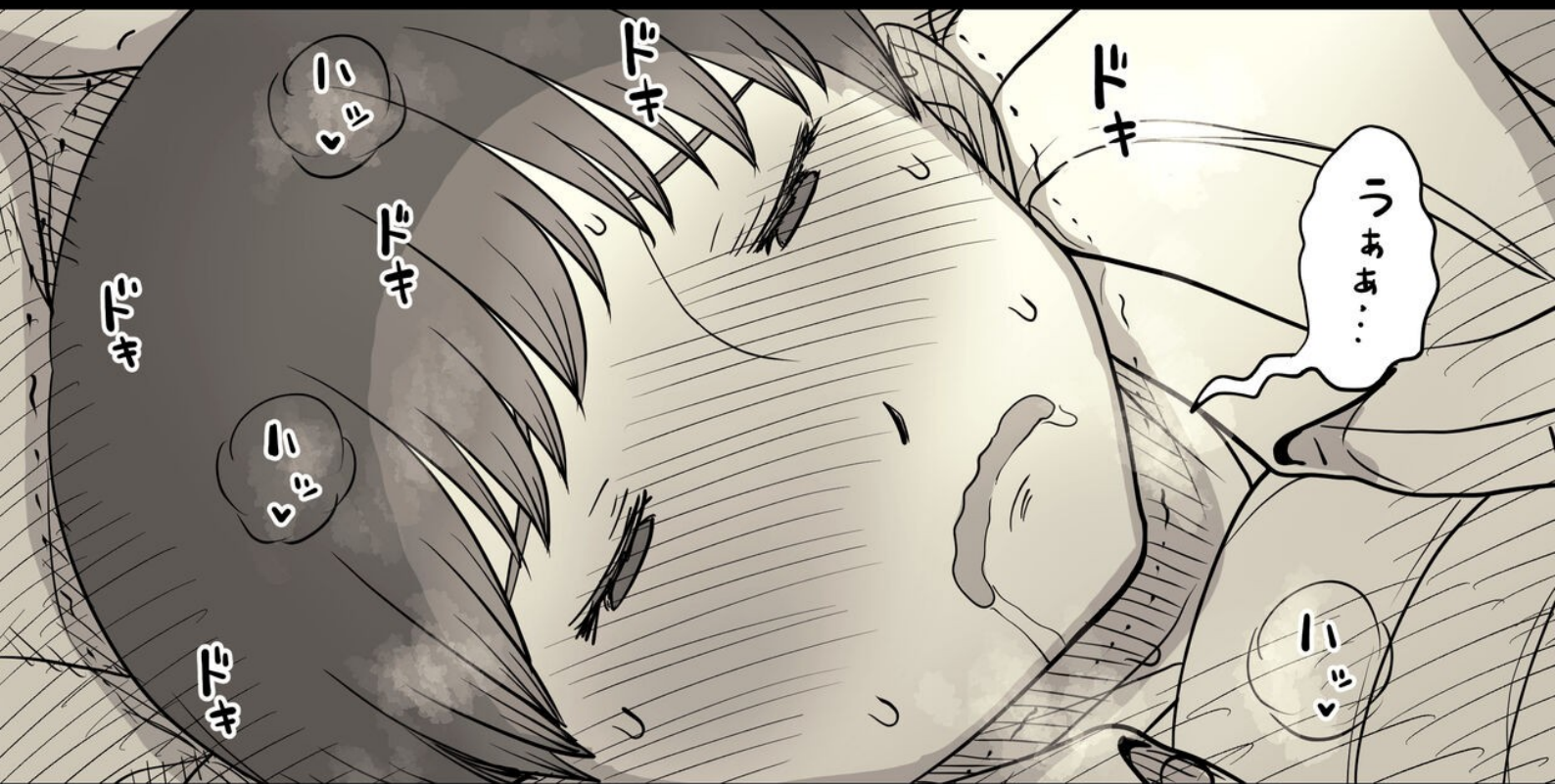


いつもみたいに、
乳首、

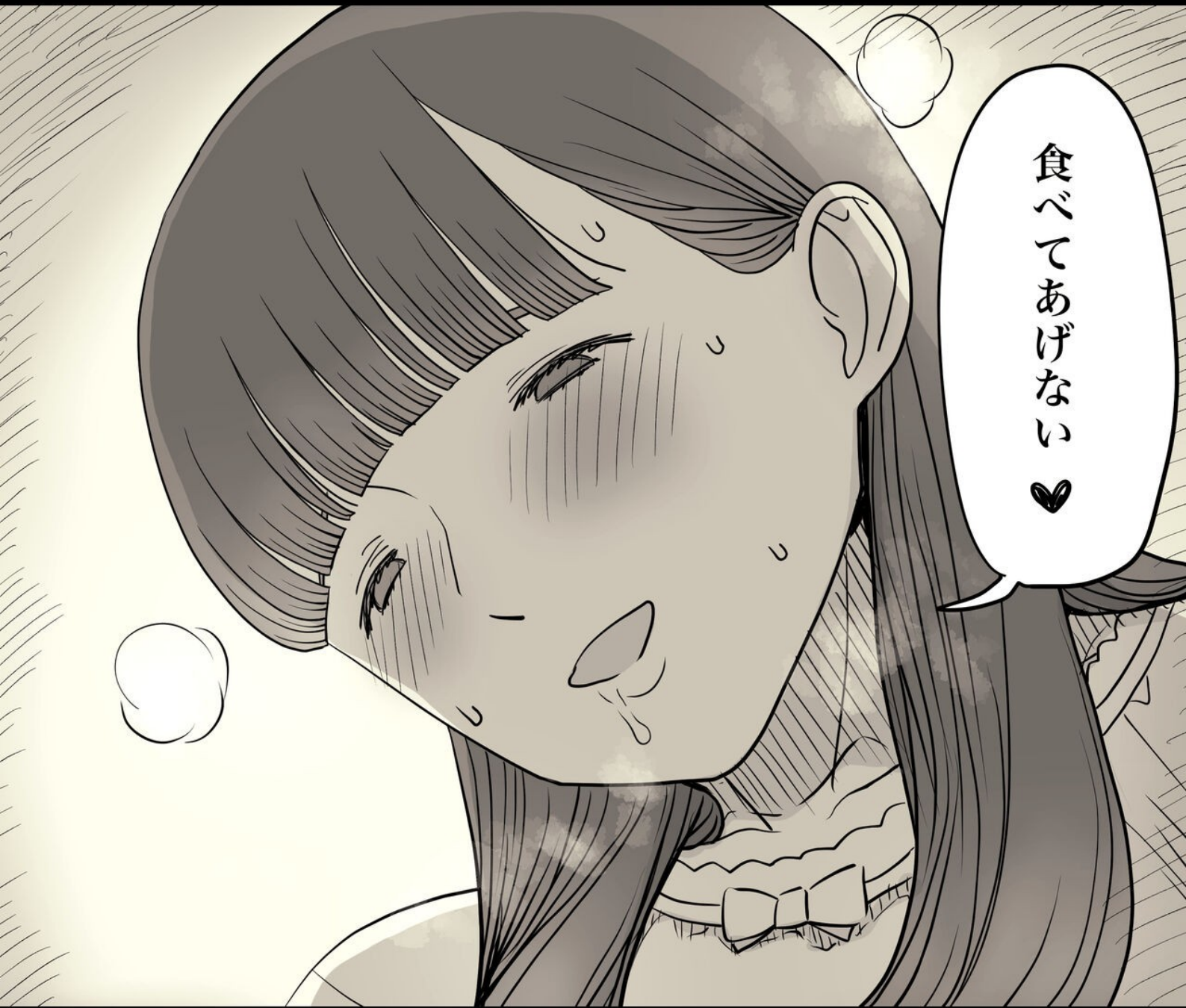
食べて欲しい
ですよね？



乳首、
触って欲しい
ですよね？

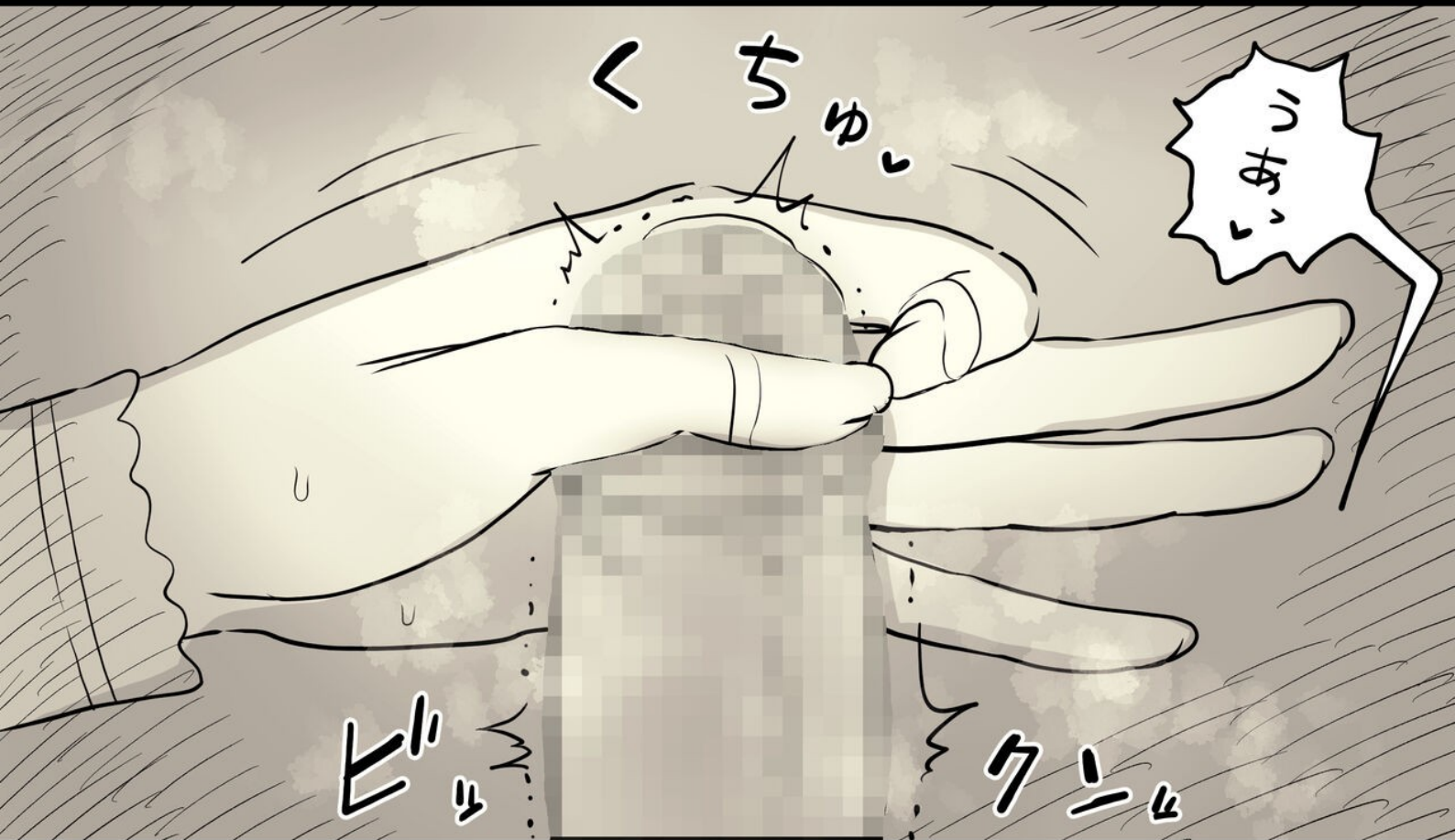
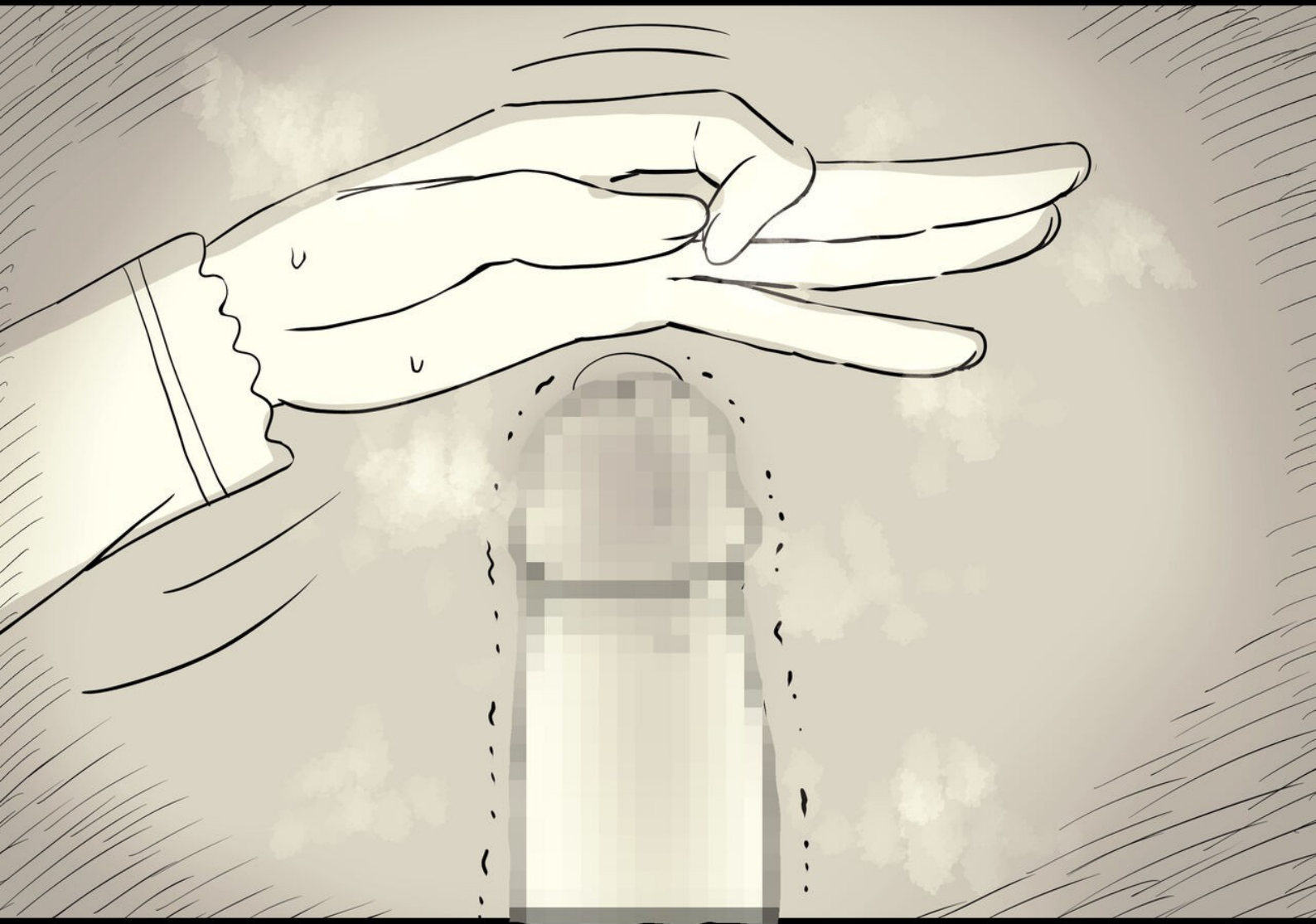


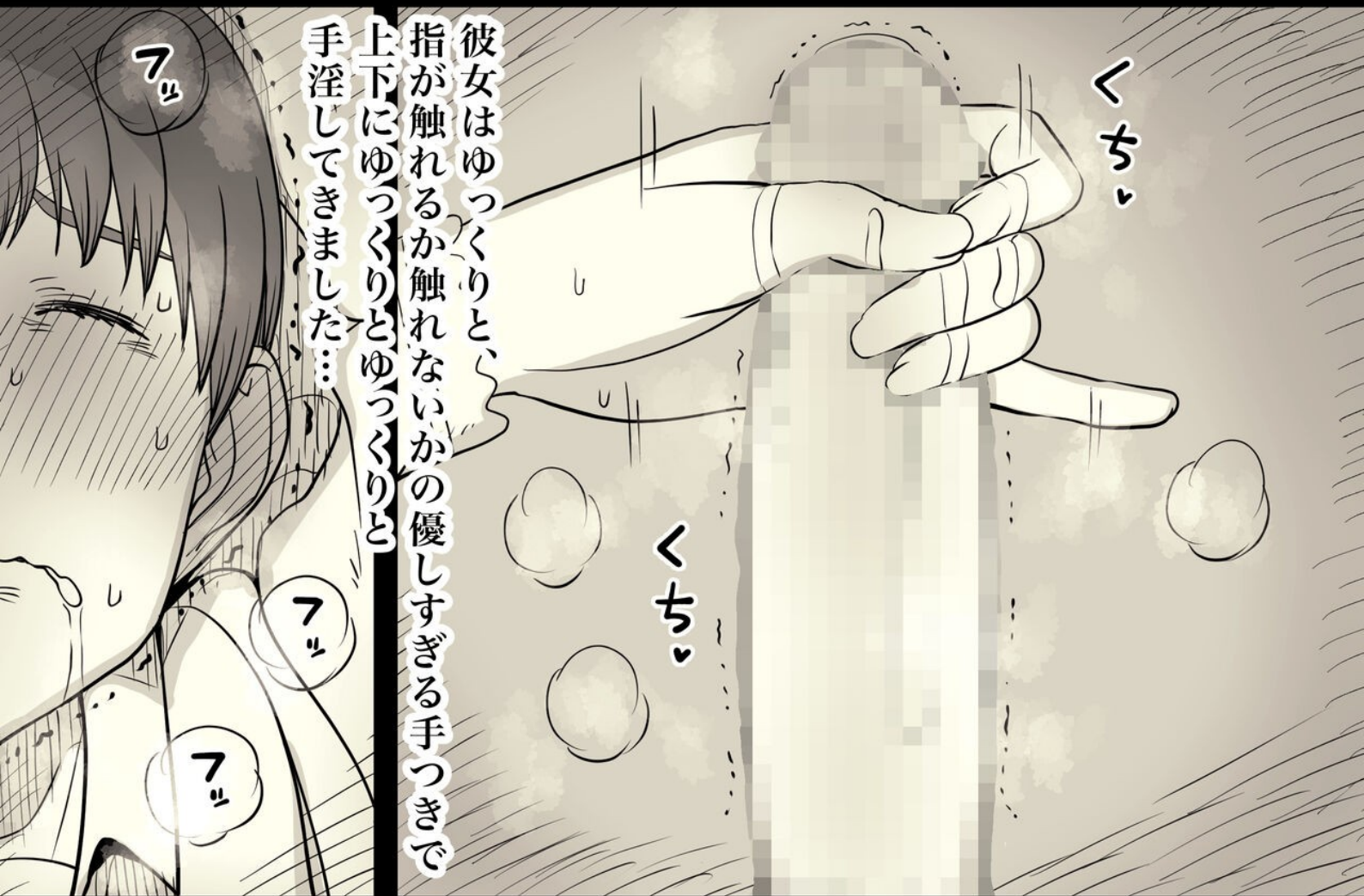
うっ...



食べてあげない♡







彼女はゆっくりと、指が触れるか触れないかの優しすぎる手つきで上下にゆっくりとゆっくりと手淫してきました…

フッ

フッ

フッ

くちゅ

くちゅ



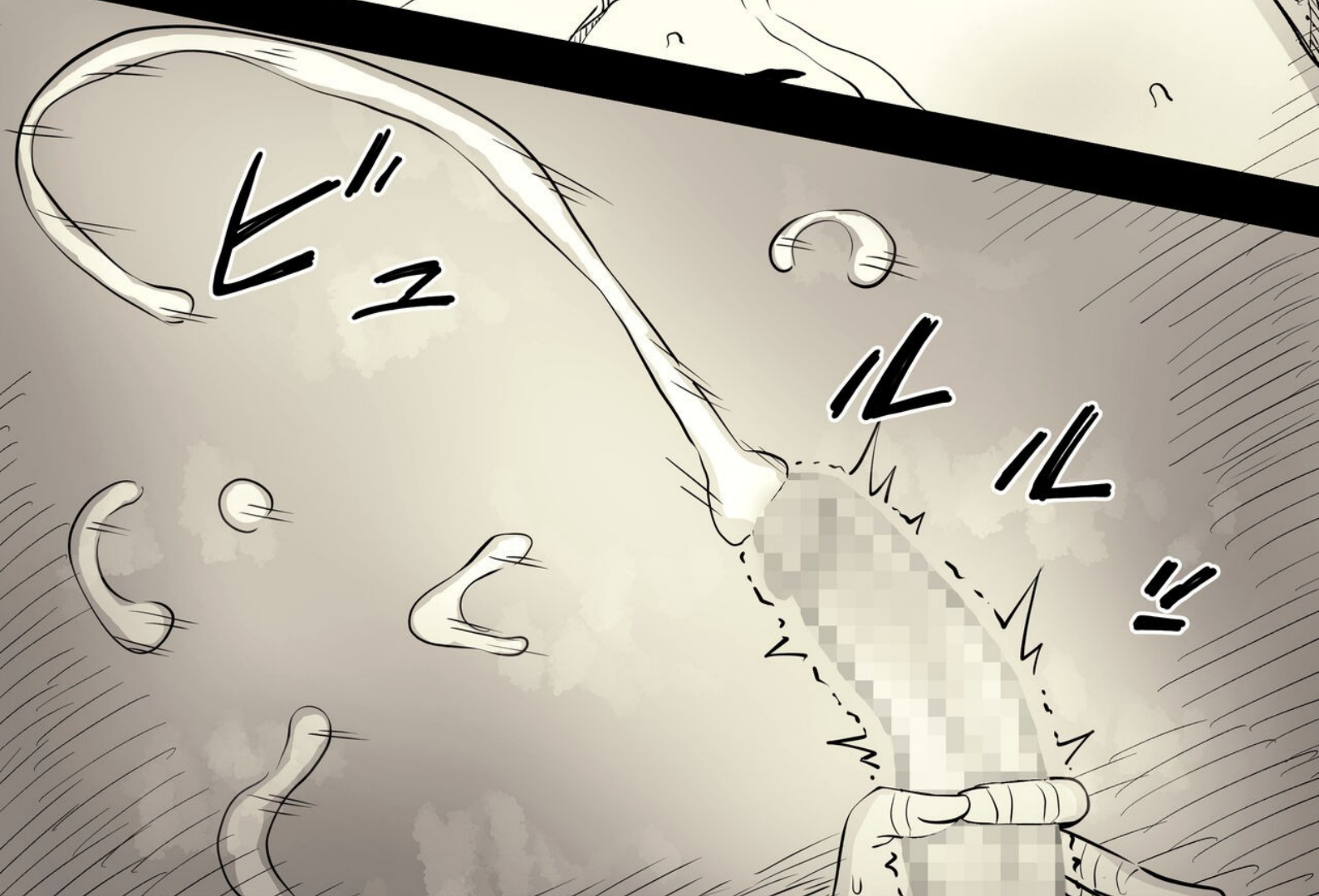
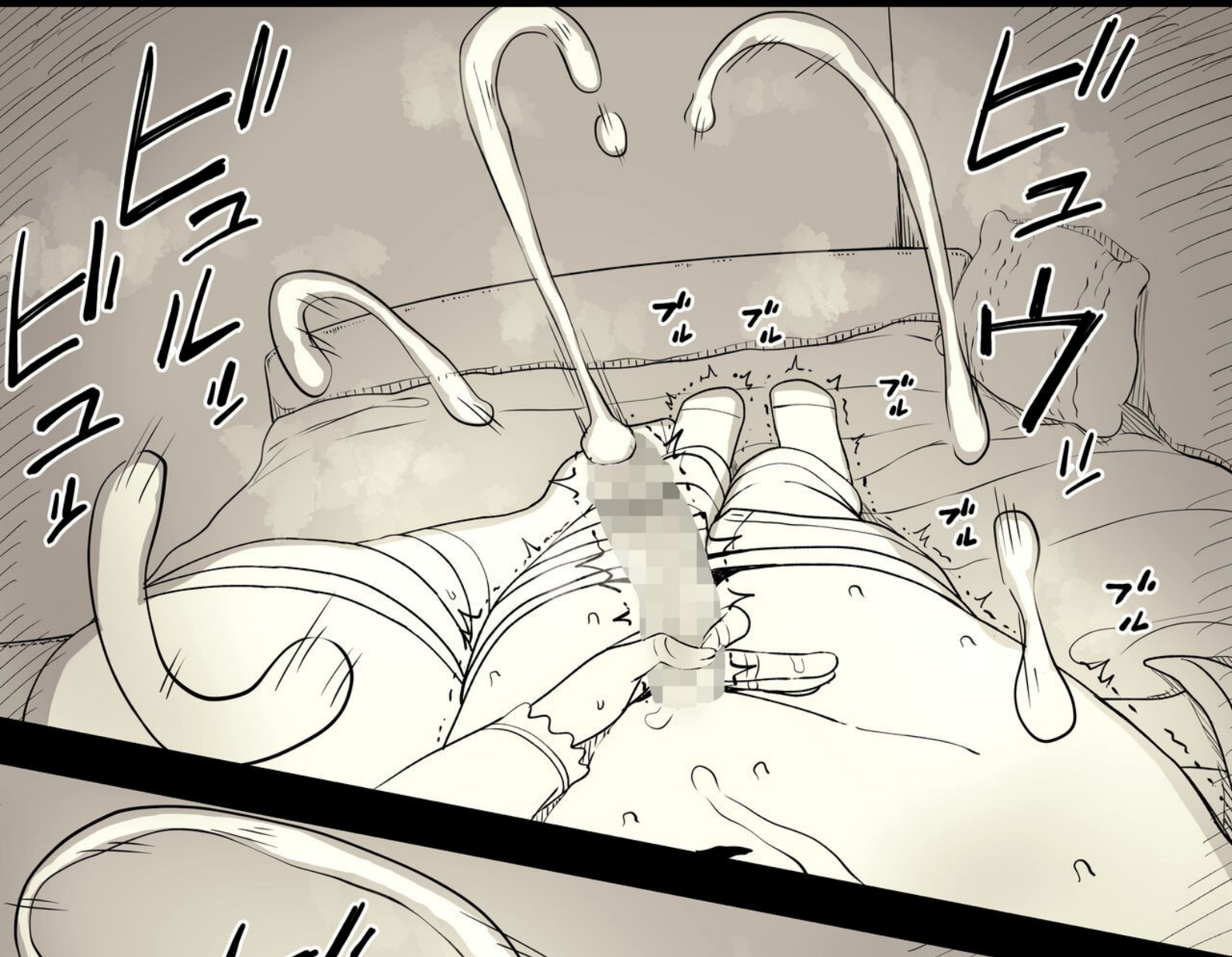
その蠱惑的な手つきの刺激に耐えきれず、僕は…

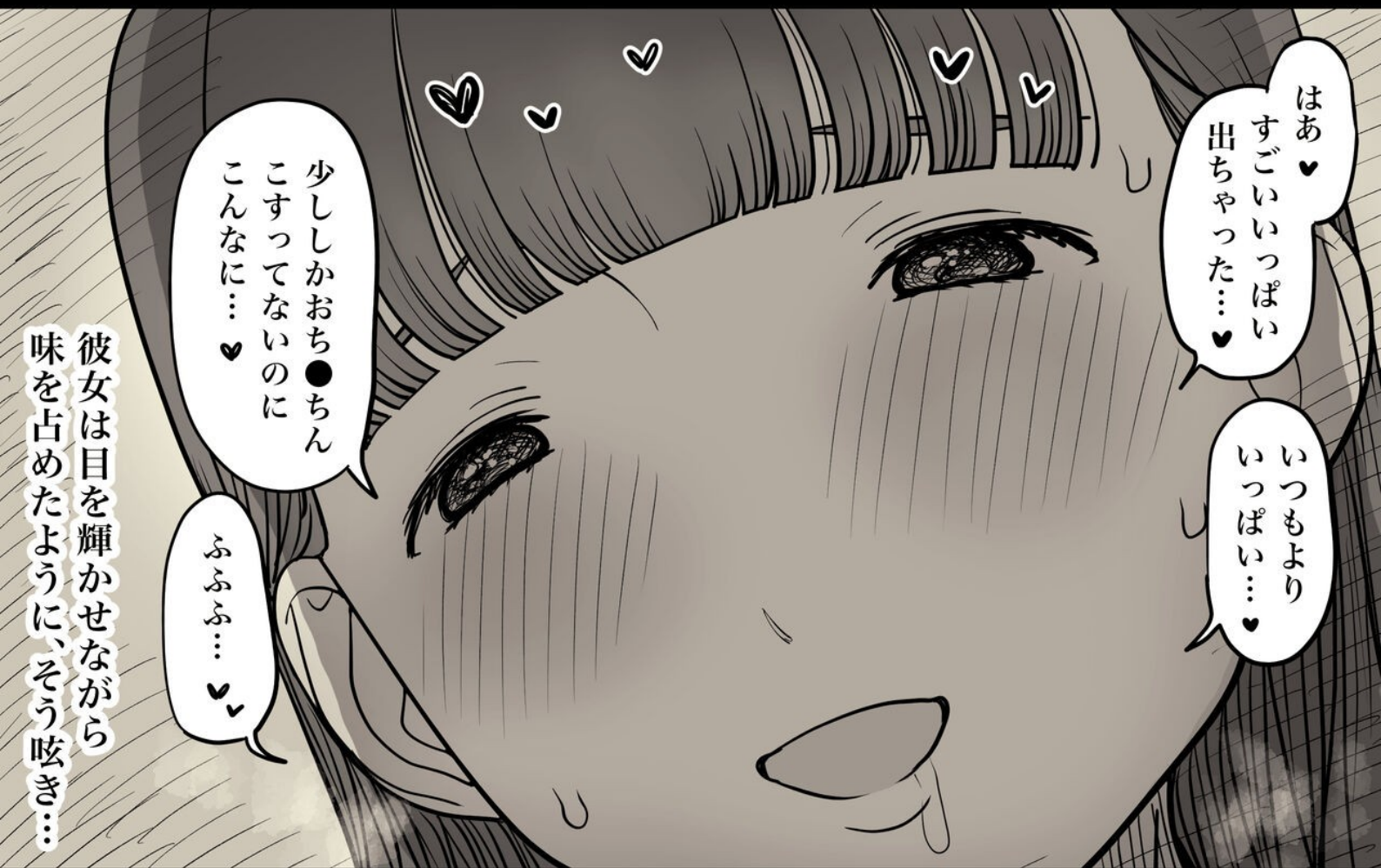
ピク
ピク
ピク
ピク

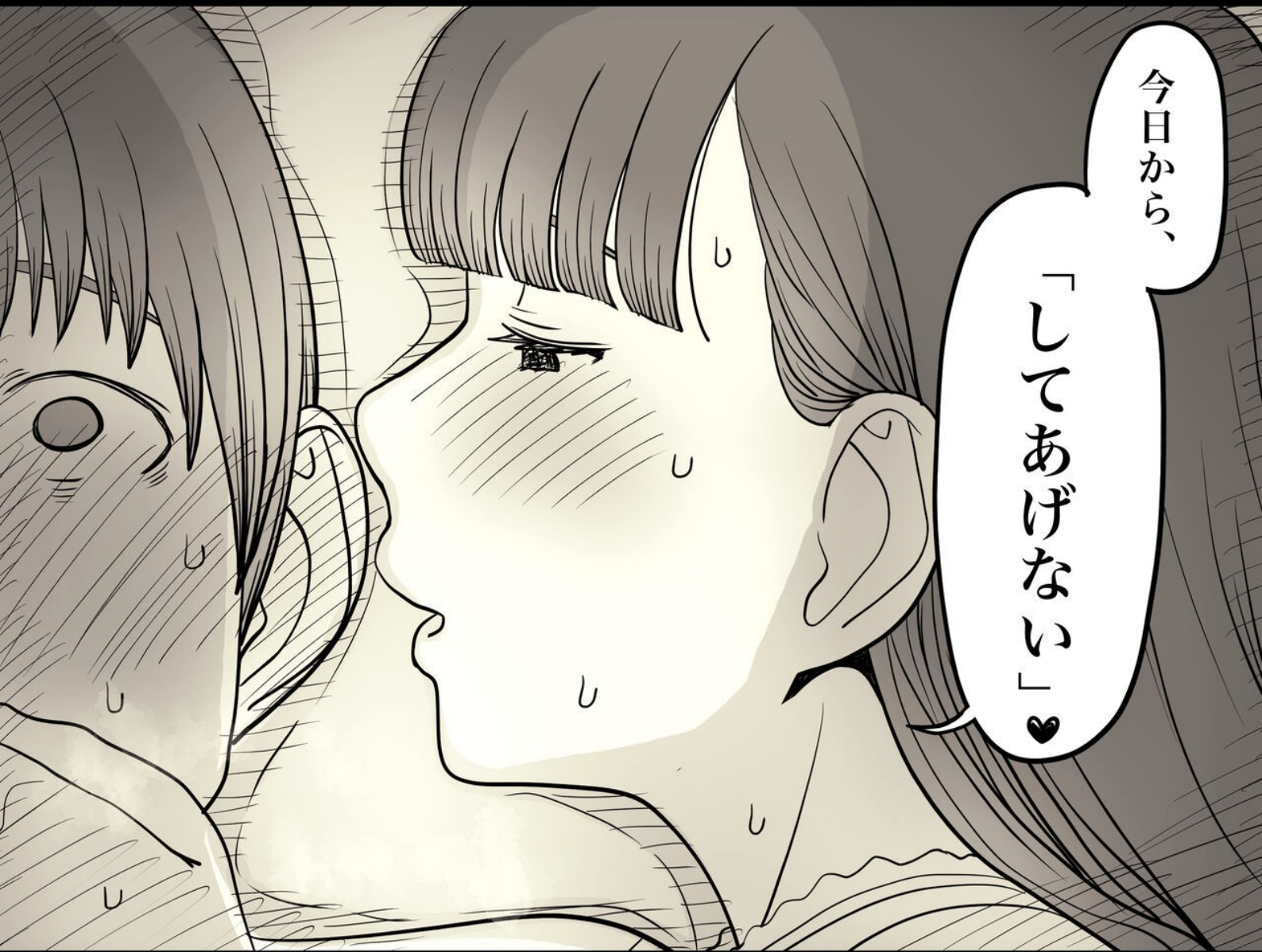
くちゅりゅ

フフフフ…









今日から、

「してあげない」♡



今まで先輩と
一緒にしてきた
色んなこと、
全部、

「してあげない」♡

彼女は、僕にそう囁くと、
そのまま僕の横に寝そべり自慰をして、
一人で達し…！

ああ先輩っ
可愛いっ♡

♡可愛いっ♡
好きっ♡

クチ♡
クチ♡クチ♡
クチ♡

はぁっ

はぁっ

はぁっ

フッ

フッ

フッ

フッ

フッ

はぁっ

はぁっ

はぁっ

ビクッ
クチ♡
クチ♡

ビクッ
クチ♡
クチ♡

ビクッ
クチ♡
クチ♡

ビクッ
クチ♡
クチ♡

クチ♡
クチ♡

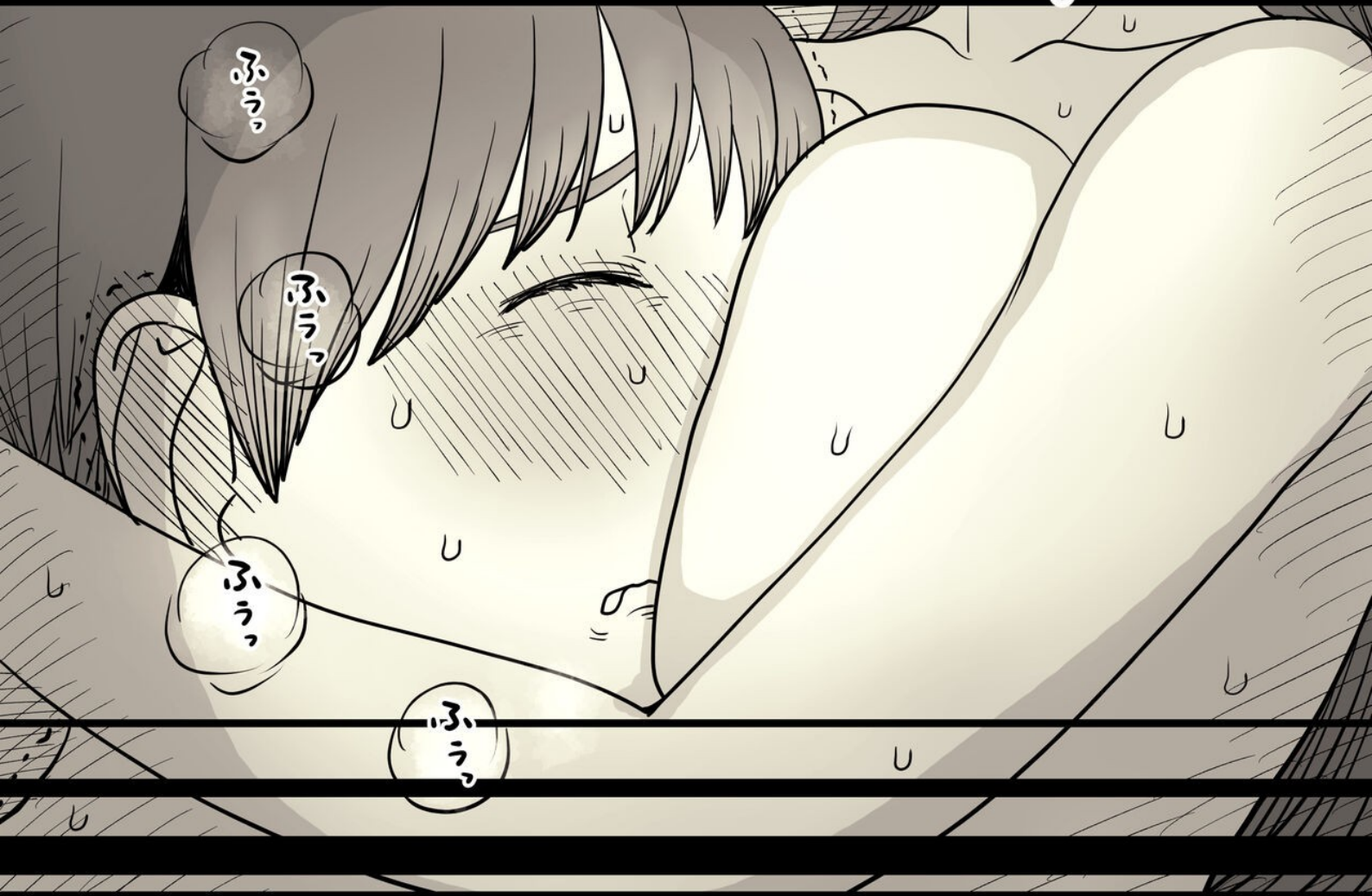
クチ♡
クチ♡

クチ♡
クチ♡

クチ♡
クチ♡



そして満足そうに微笑みながら、
僕を優しく胸に抱き、寝てしまいました。。。



僕は今までにない興奮と飢えを感じながら、
そんな彼女の穏やかな寝顔を見ながら、
朝まで眠れずにいて…

そして、翌朝、そのまま帰されました…

何という「おあずけ」でしょう…



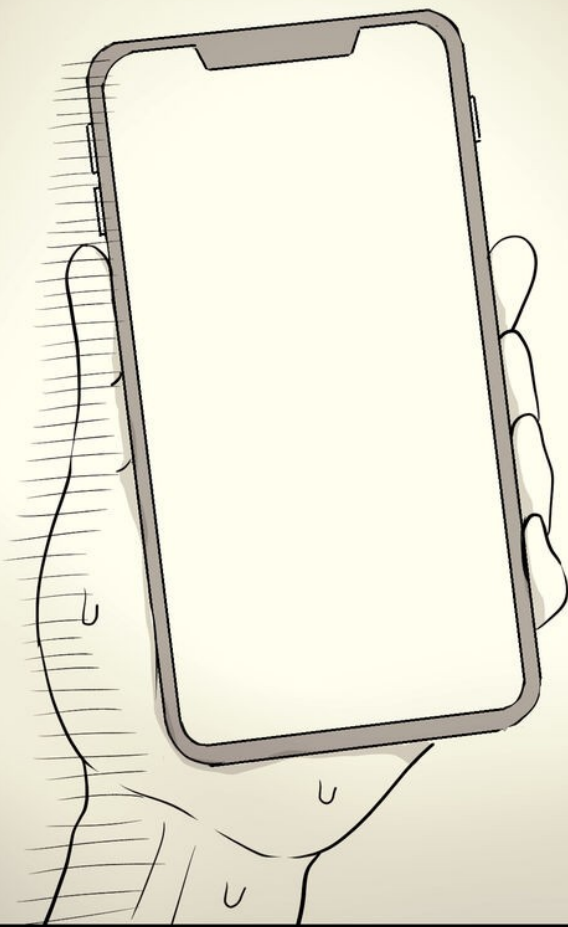
先輩…

また…
一週間後に…

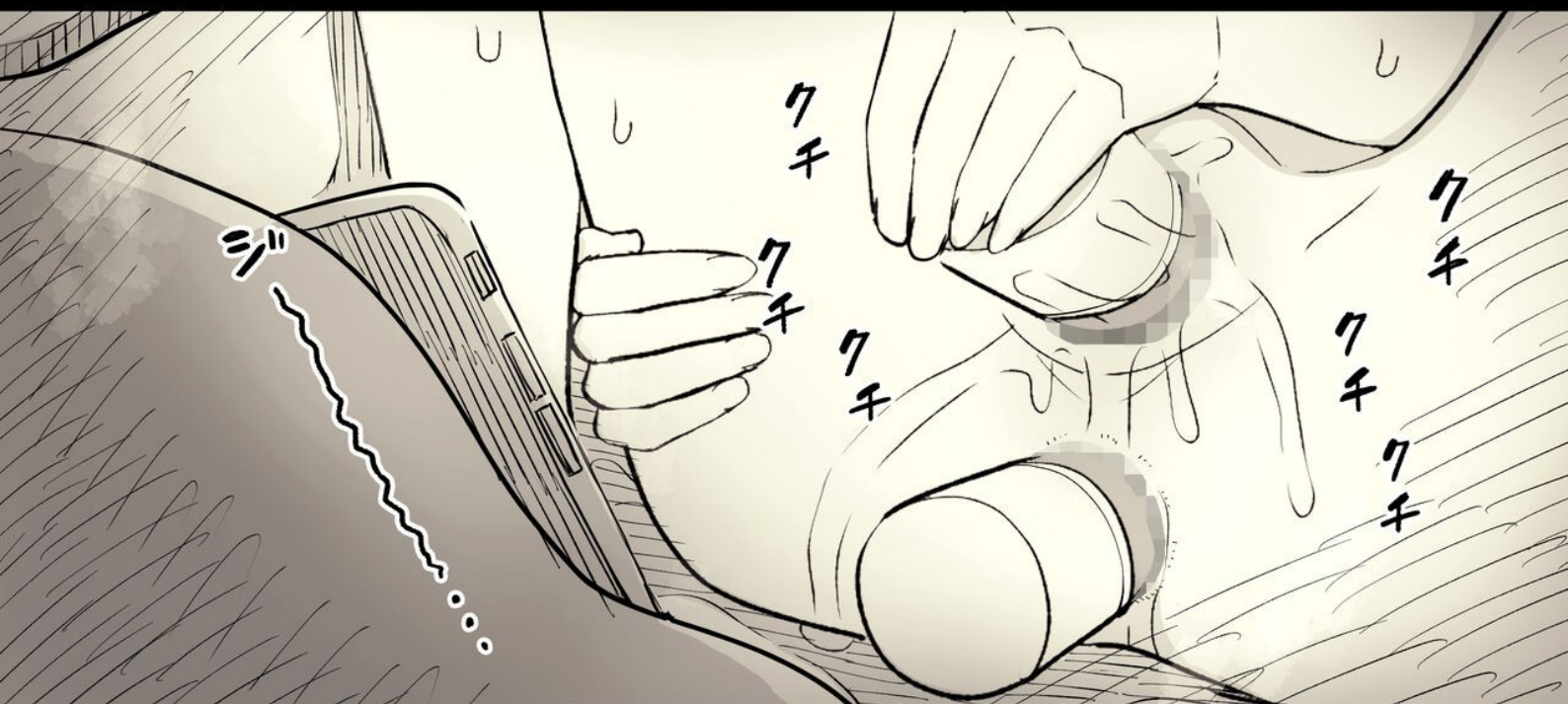
平日の夜は、
毎晩いつもお互い自慰しながら
通話するというプレイをしていたのだけど、

彼女は自分の自慰は見せつつも、
僕の自慰は禁止だと言ってきました…。

「我慢したら、した分だけ、
気持ち良くなれますからね。」



「私の自慰だけ見て、
気持ちいいっばい高めておいてください。」



このようなおあずけプレイが
一週間も続くなんて…

僕は何度も負けそうになりながらも
彼女の言い付けを守り、
毎晩悶え苦しんで週末を待ち続けていました……

一週間が経ち、
また彼女の部屋「愛の巣」で
彼女に食べられる日がやってきました…。



今日も手を拘束され、彼女は、僕の上に膝立ちし、
自慰し続け、溢れ出る愛液をポタポタと
おち●ちんに垂らされ続けました…。

クチ

クチ

クチ

クチ

ホタリ♡

ホタリ♡

僕の体には一切触れてくれず…

もう何十分？

いや、何時間？

こうされているだろう…。

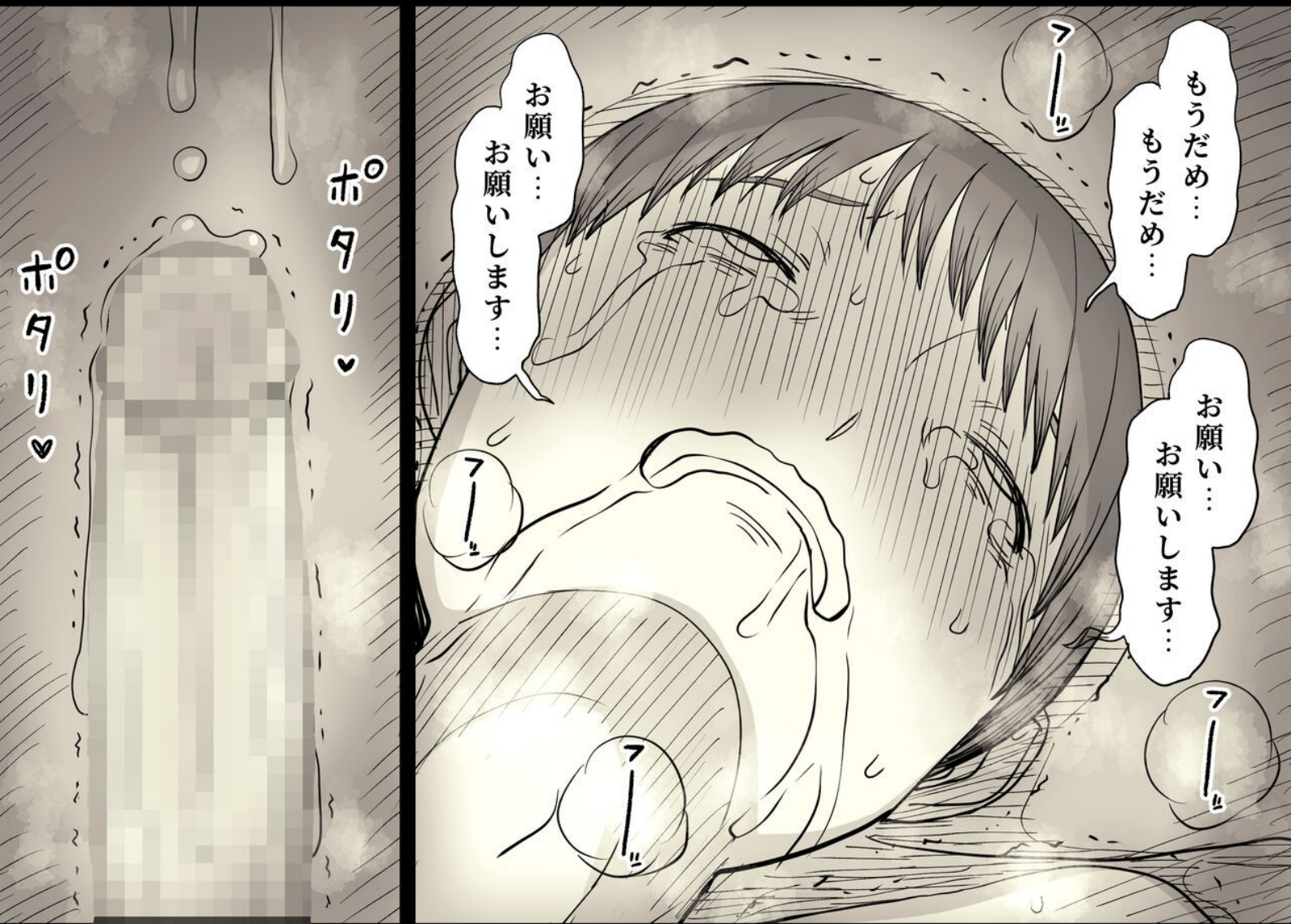
ホタリ♡

ホタリ♡

一週間も我慢をしたのに、
今日もまた、彼女の体液責めで焦らされ続け…
こんなにも…
こんな風に変態的なおあずけをされ続けて…

僕は身体はもう、
完全におかしくなっていました…。





お願い…
お願いします…

もうだめ…
もうだめ…

お願い…
お願いします…

ホタリ♡

ホタリ♡



ふふ…

語彙力が…
無くなってますよお…

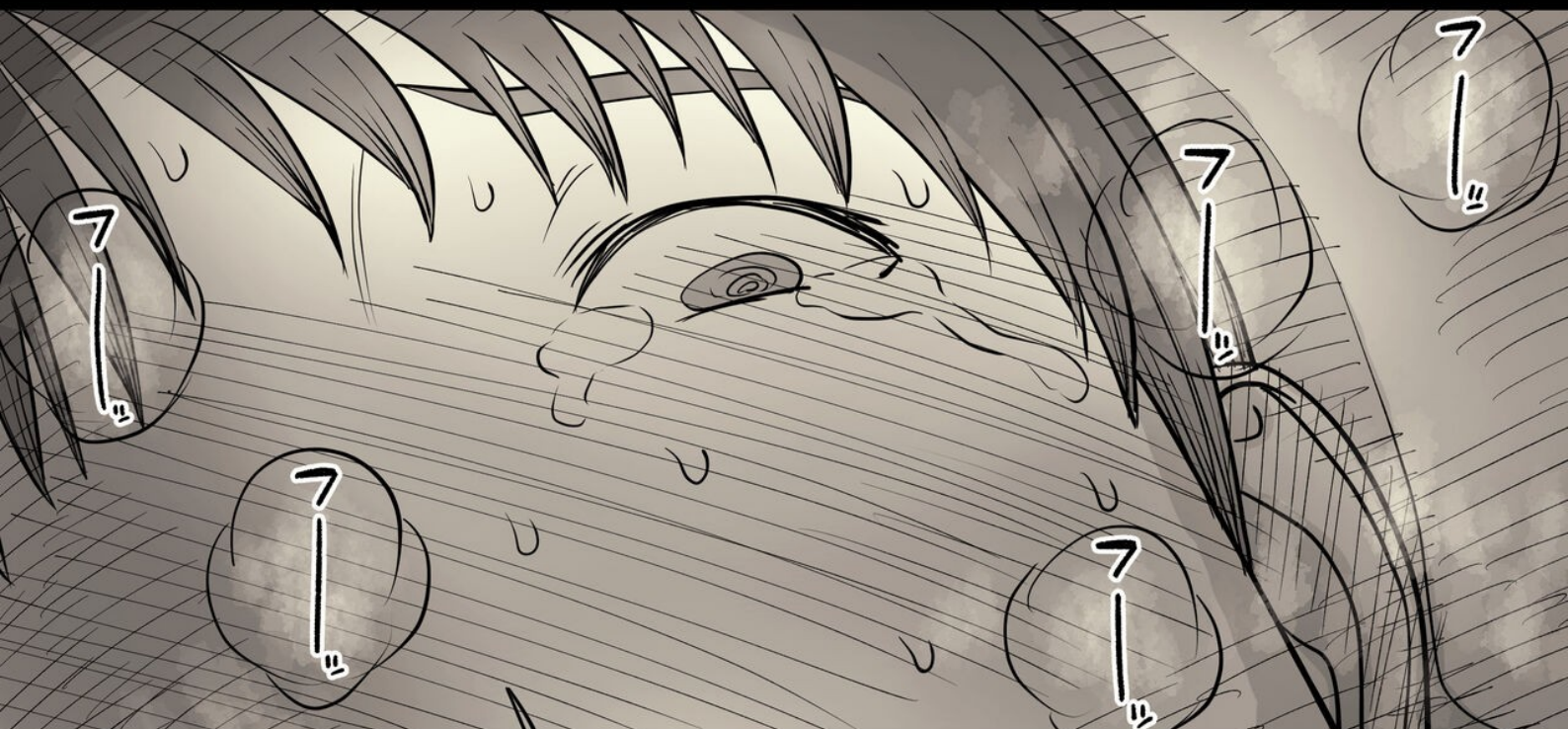
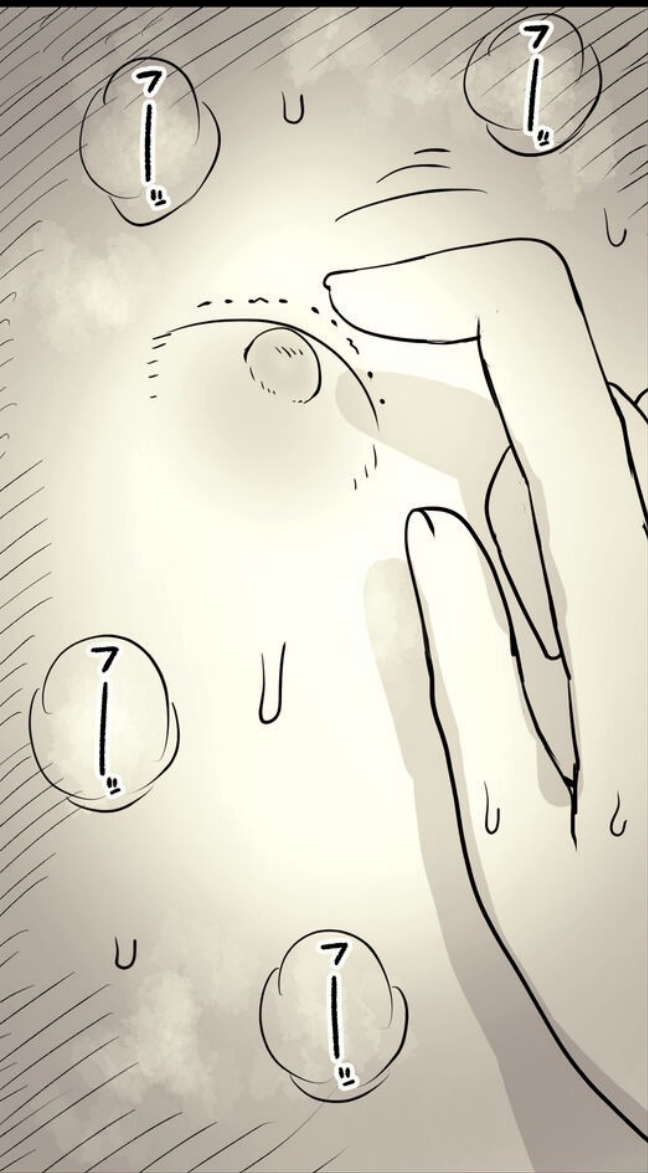
先輩♡

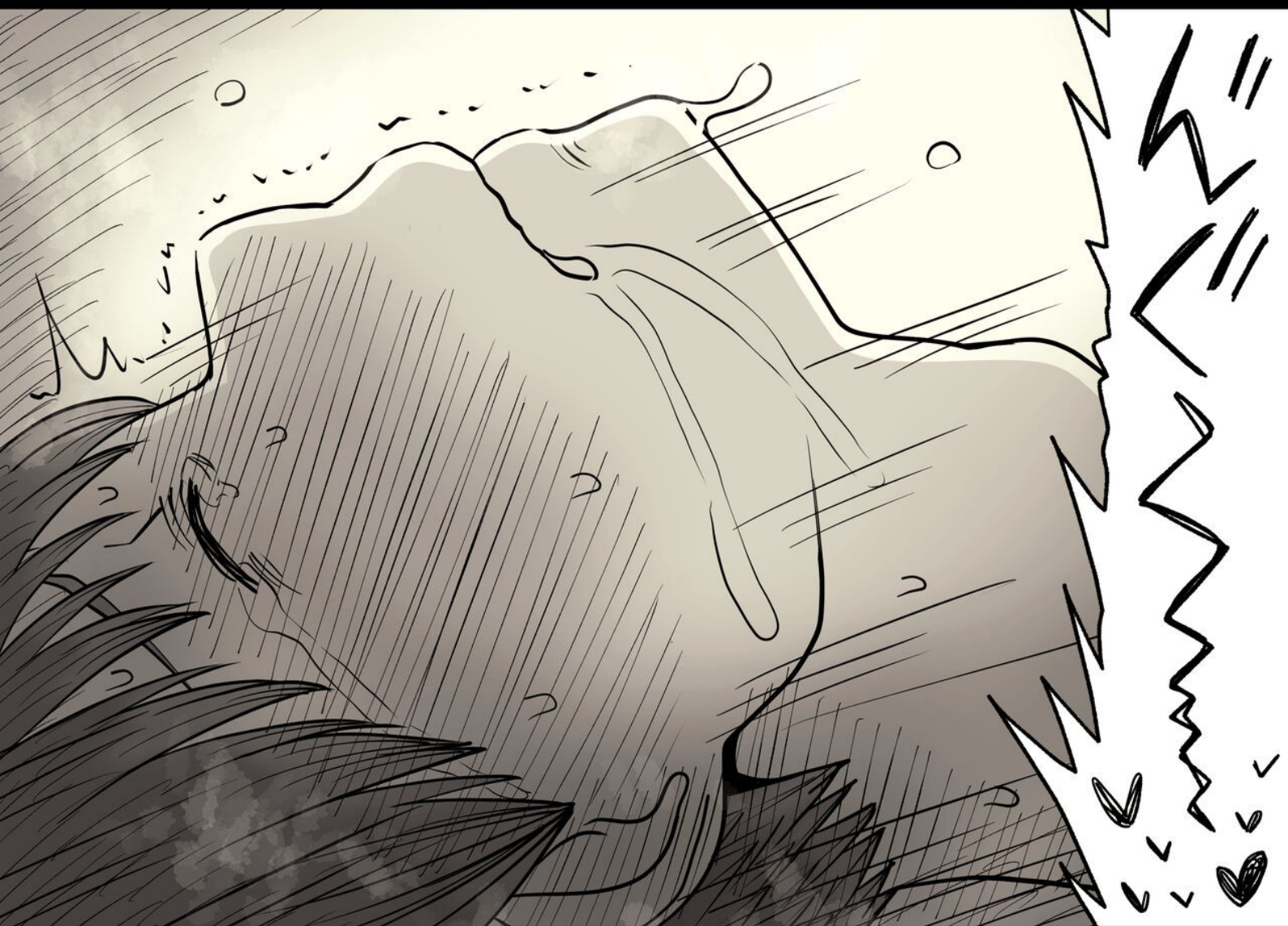
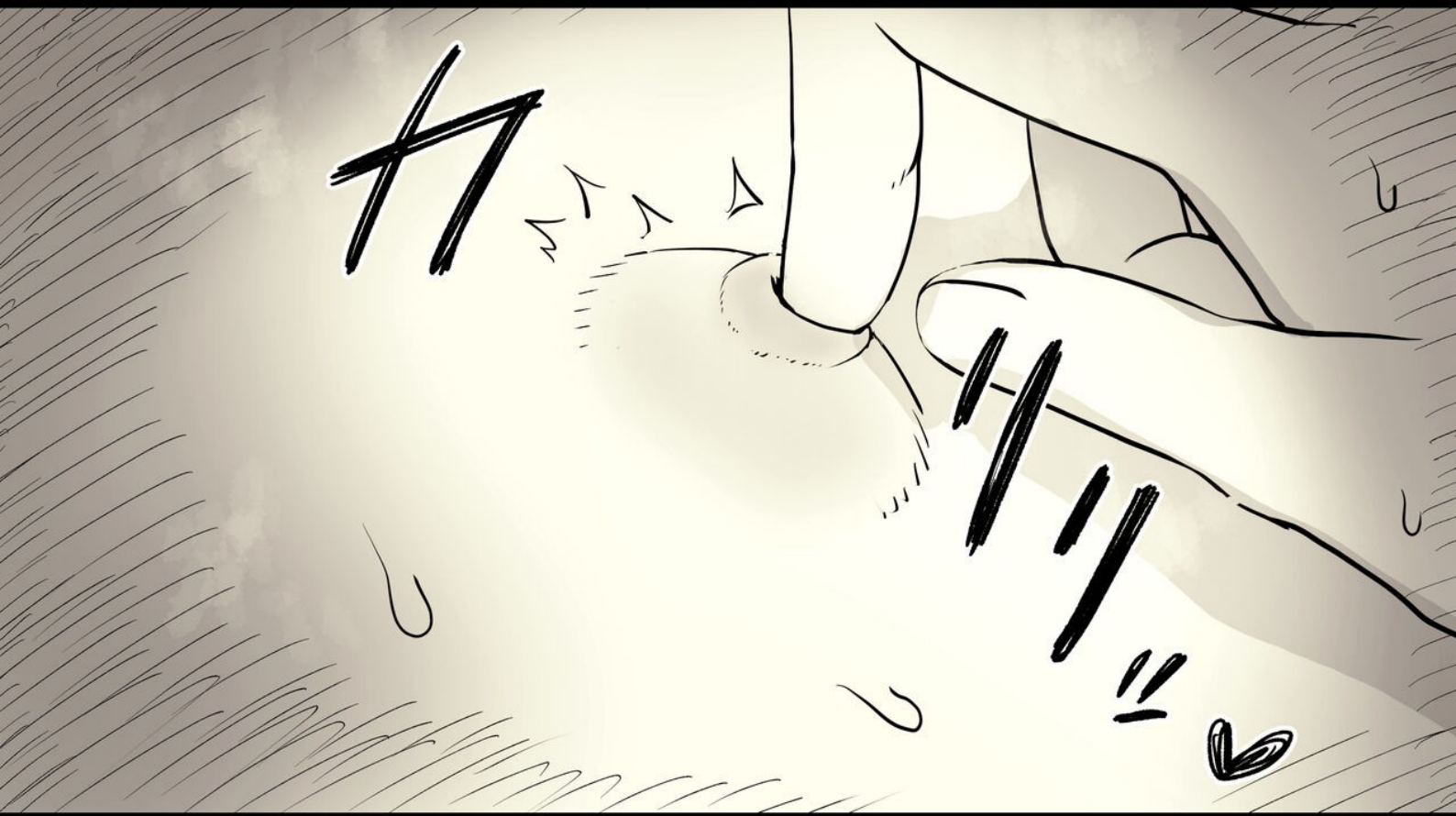
じゃあ…

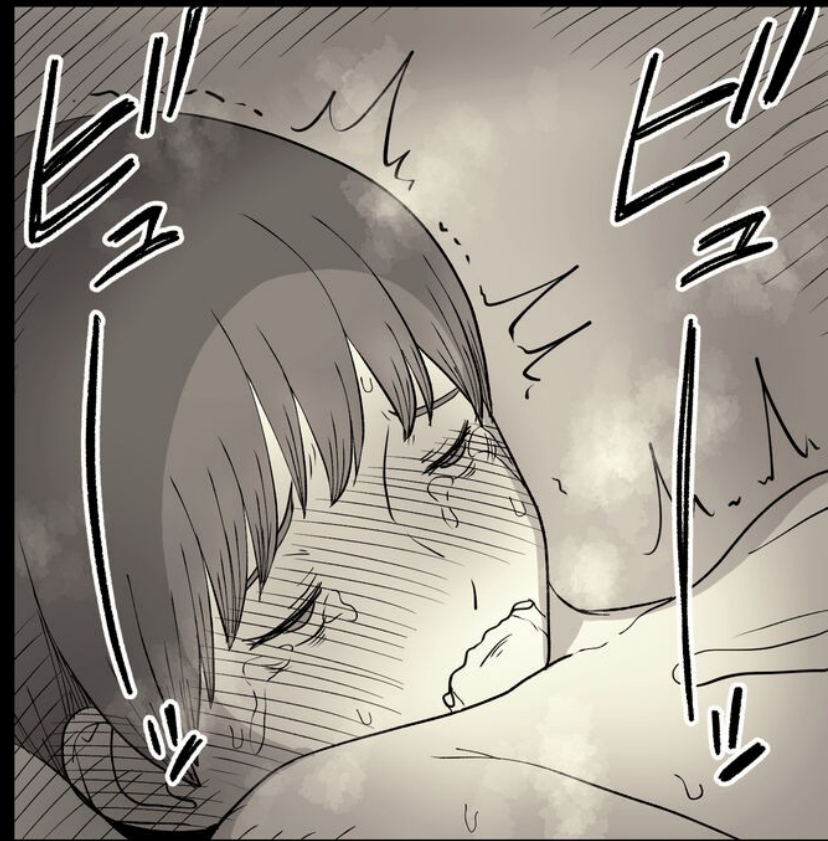
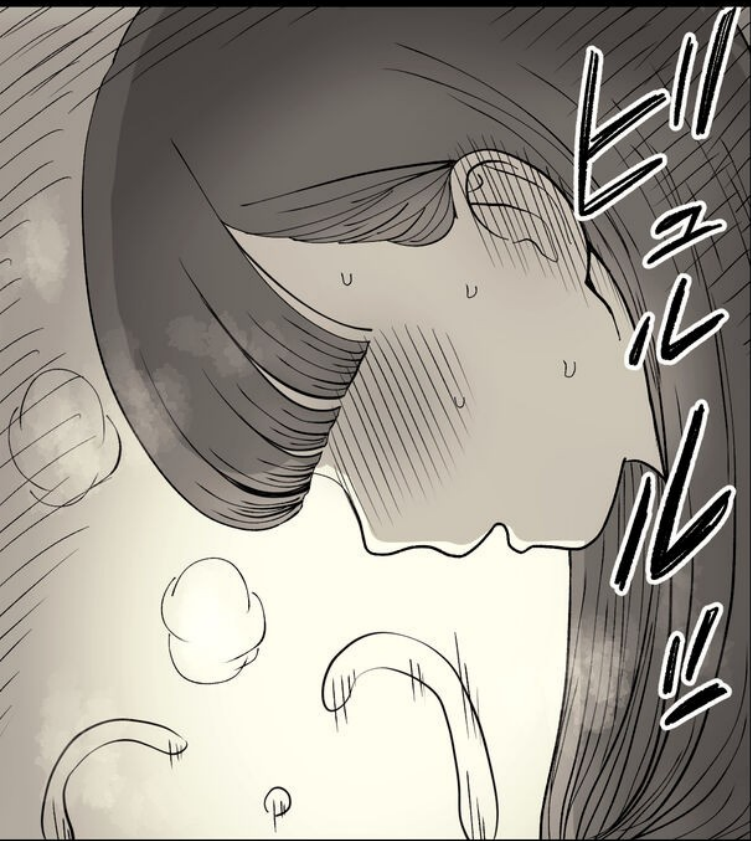
乳首だけ…

乳首だけ…

触ってあげますね♡









うわぁ... 6

フ

ン



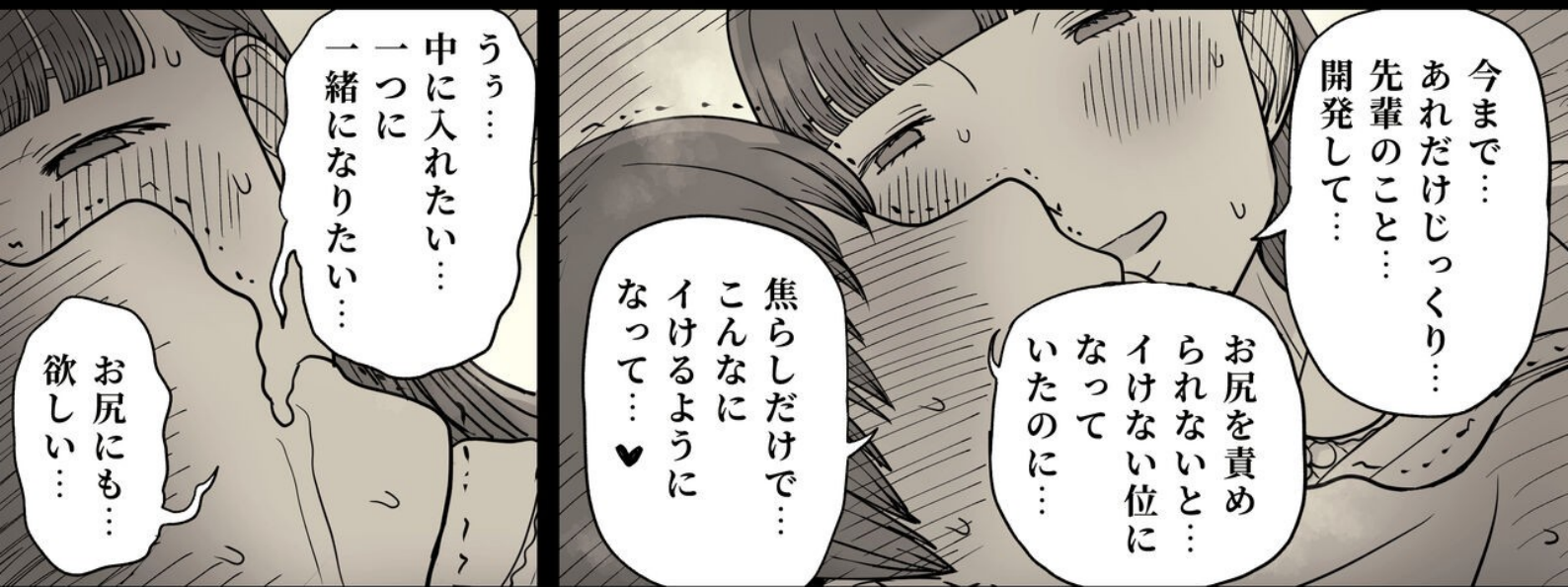
先輩…

すごい…♡

先輩…
焦らされる
のも…

すごい…
大好き
なんです…♡

うう…



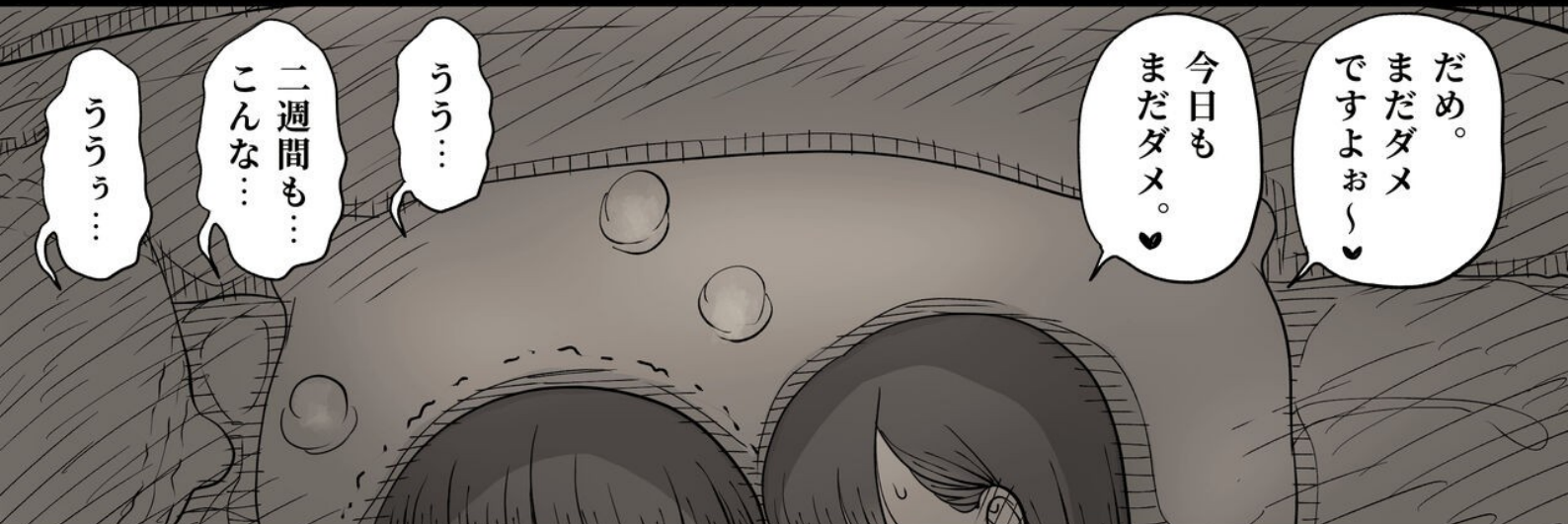
今まで…
あれだけじつくり…
先輩のこと…
開発して…

お尻を責め
られないと…
イけない位に
なって
いたのに…

焦らしだけで…
こんな
イけるように
なって…♡

うう…
中に入りたい…
一つに
一緒になりたい…

お尻にも…
欲しい…



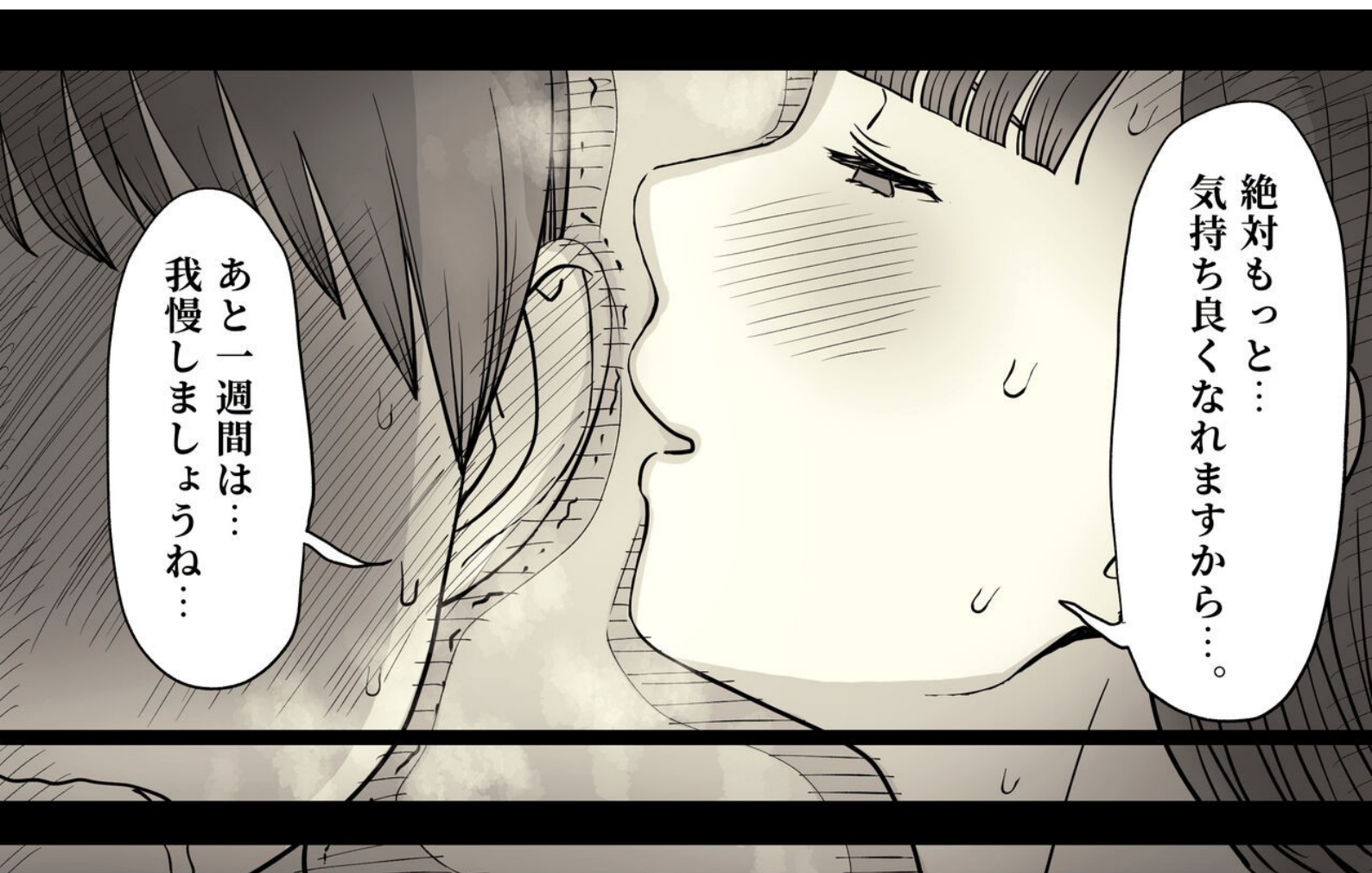
だめ。
まだダメ
ですよ…♡

今日も
まだダメ。♡

うう…

二週間も…
こんな…

ううう…



絶対もっと…
気持ち良くなれますから…。

あと一週間は…
我慢しましょうね…

三週間ぶりのセックス、
期待しててください♡

散々、僕の身も心も可愛がり、虜にしきっていた後に、この仕打ち…

僕は、頭がおかしくなりそうなほど、
彼女からの様々な行為を心身が求めてしまい、苦しくて苦しくて…

でも、このおあずけすら、
彼女からの、今まで以上の愛し方なのだ…

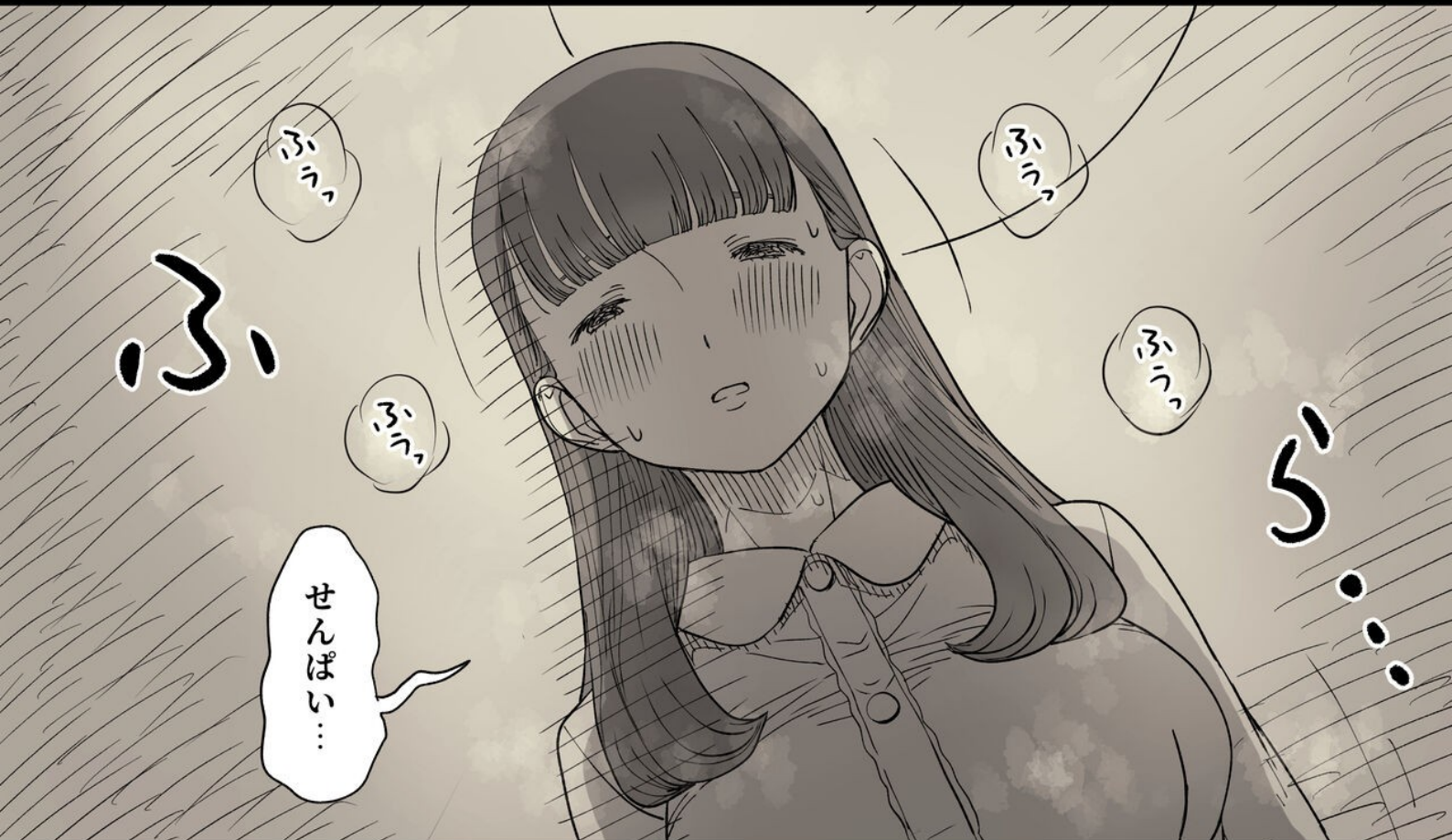
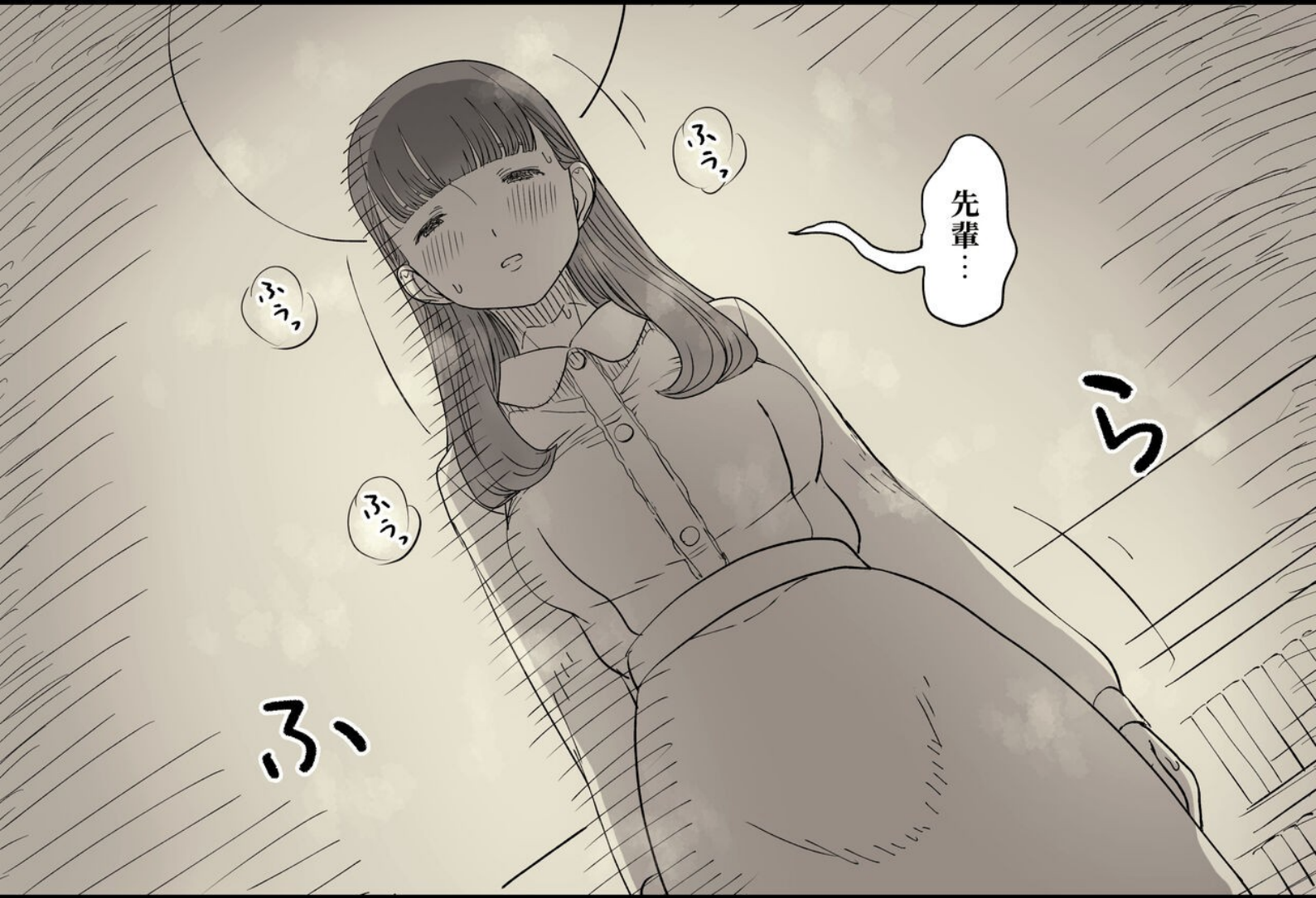
煮えたぎるような興奮に包まれながら過ごしていました…

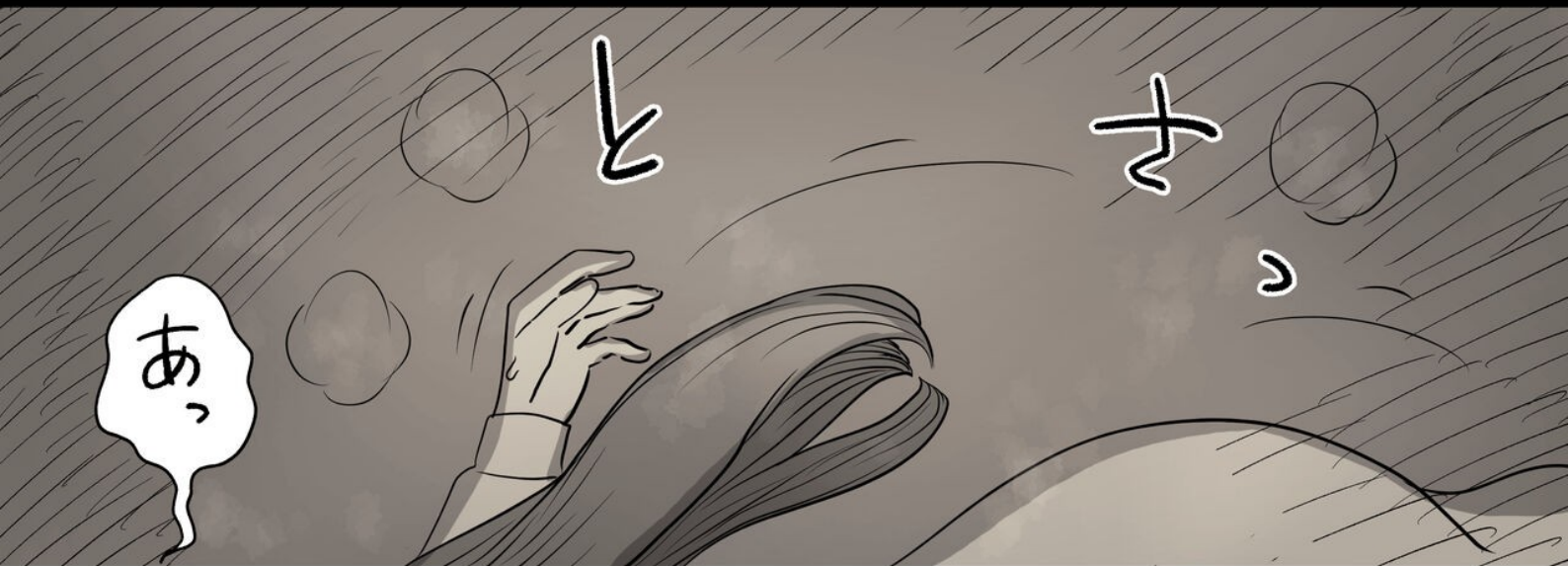
そして三週間、

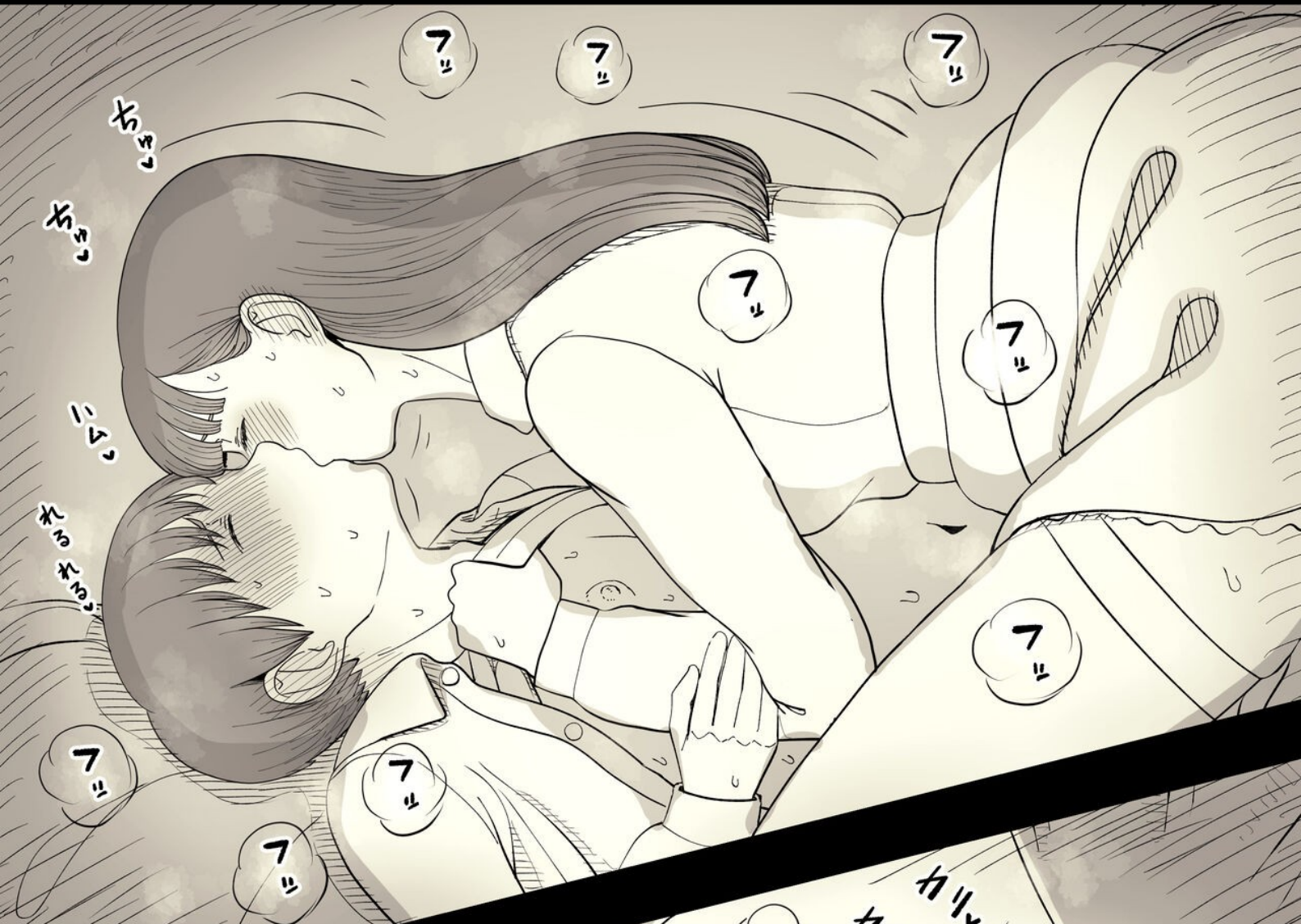
僕は彼女におあずけされ、焦らされに焦らされ続けたのち、

ついに、解放の日がやってきました…。











ふっ

んあっ

んんん

ちゅっ

ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

ちゅっ
ちゅっ

たっ
たっ
たっ
たっ

たっ
たっ

たっ
たっ

たっ
たっ

たっ
たっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

かっ
かっ
かっ

かっ
かっ
かっ

かっ
かっ
かっ

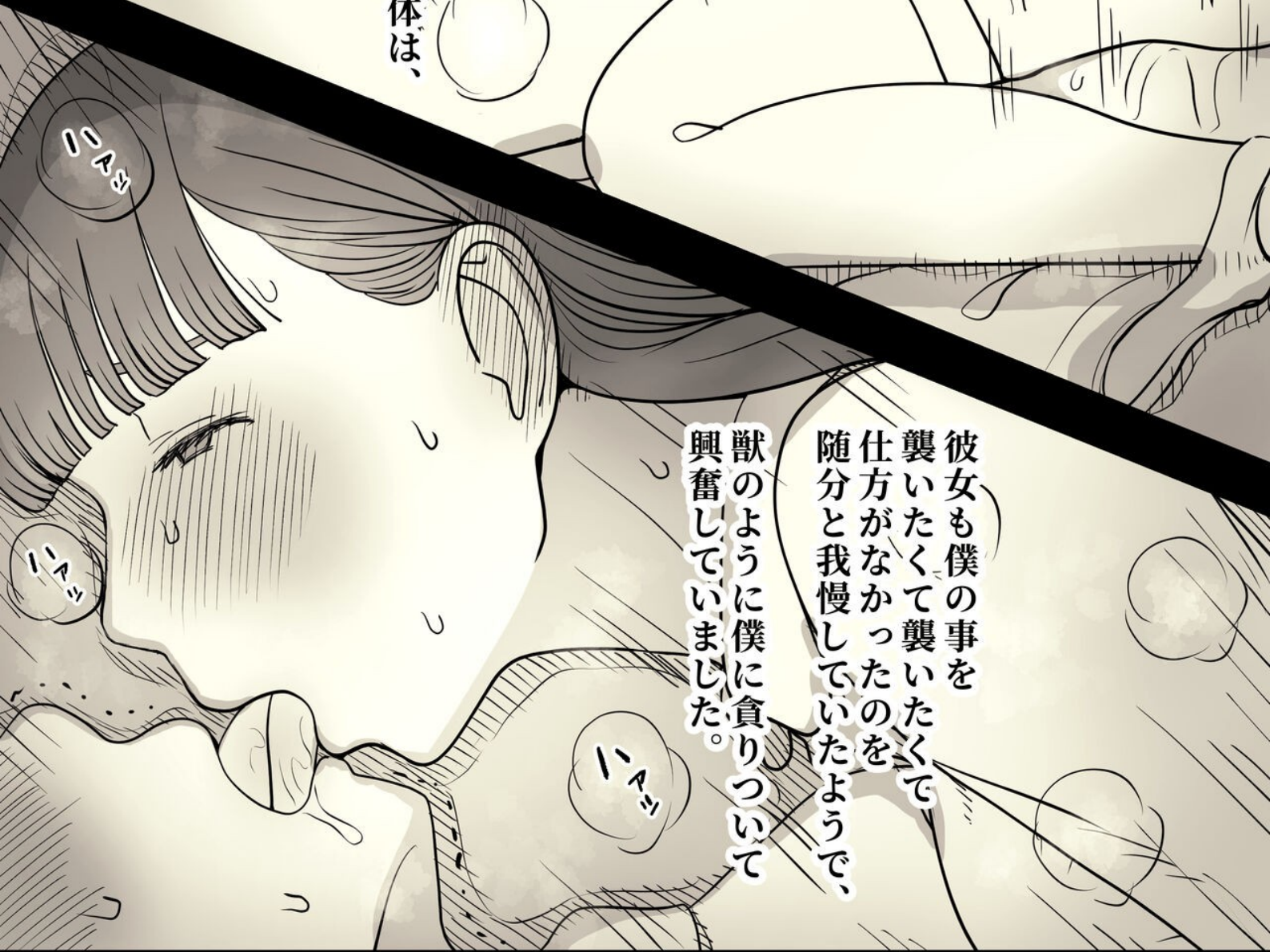
かっ
かっ
かっ

かっ
かっ
かっ

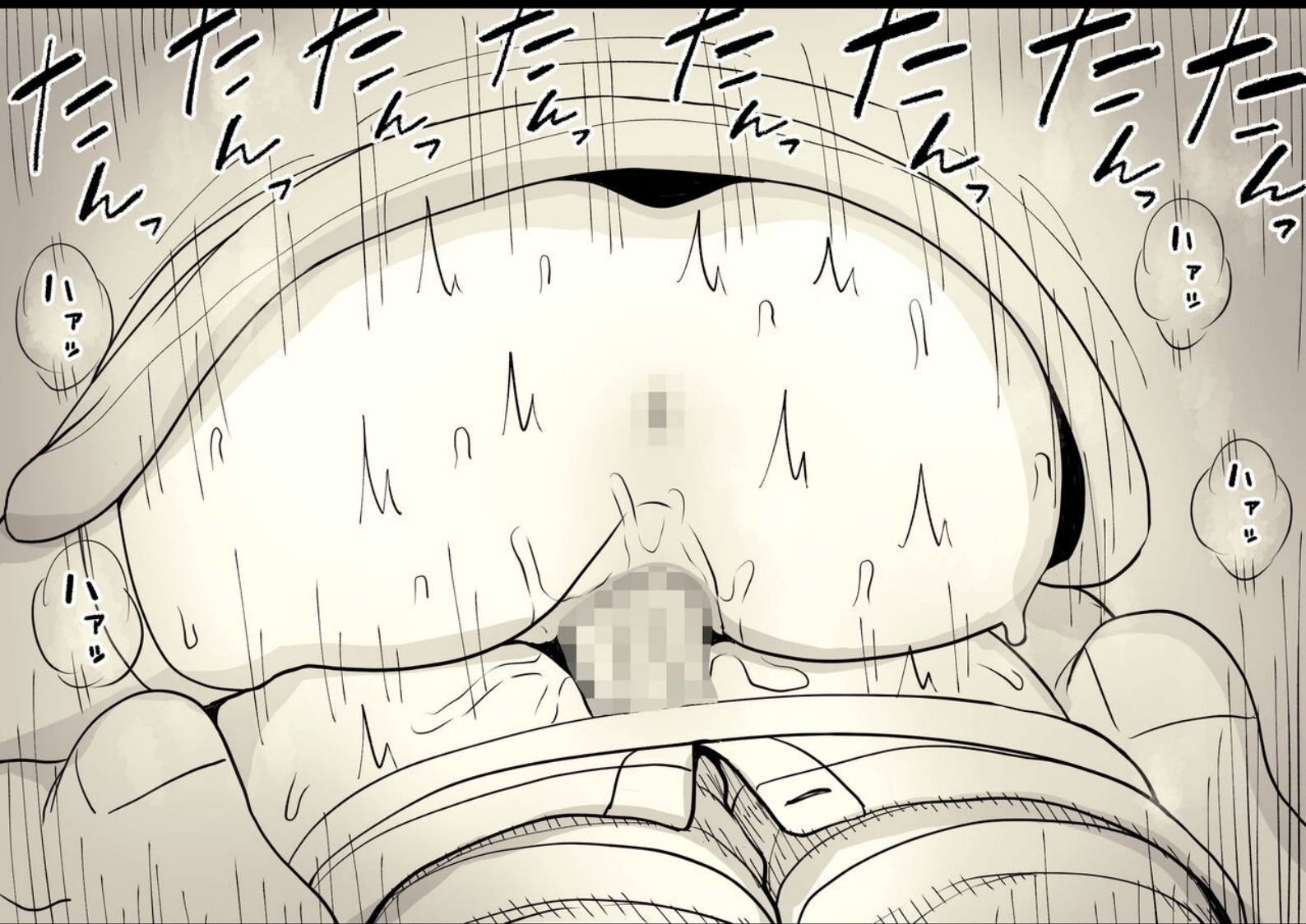
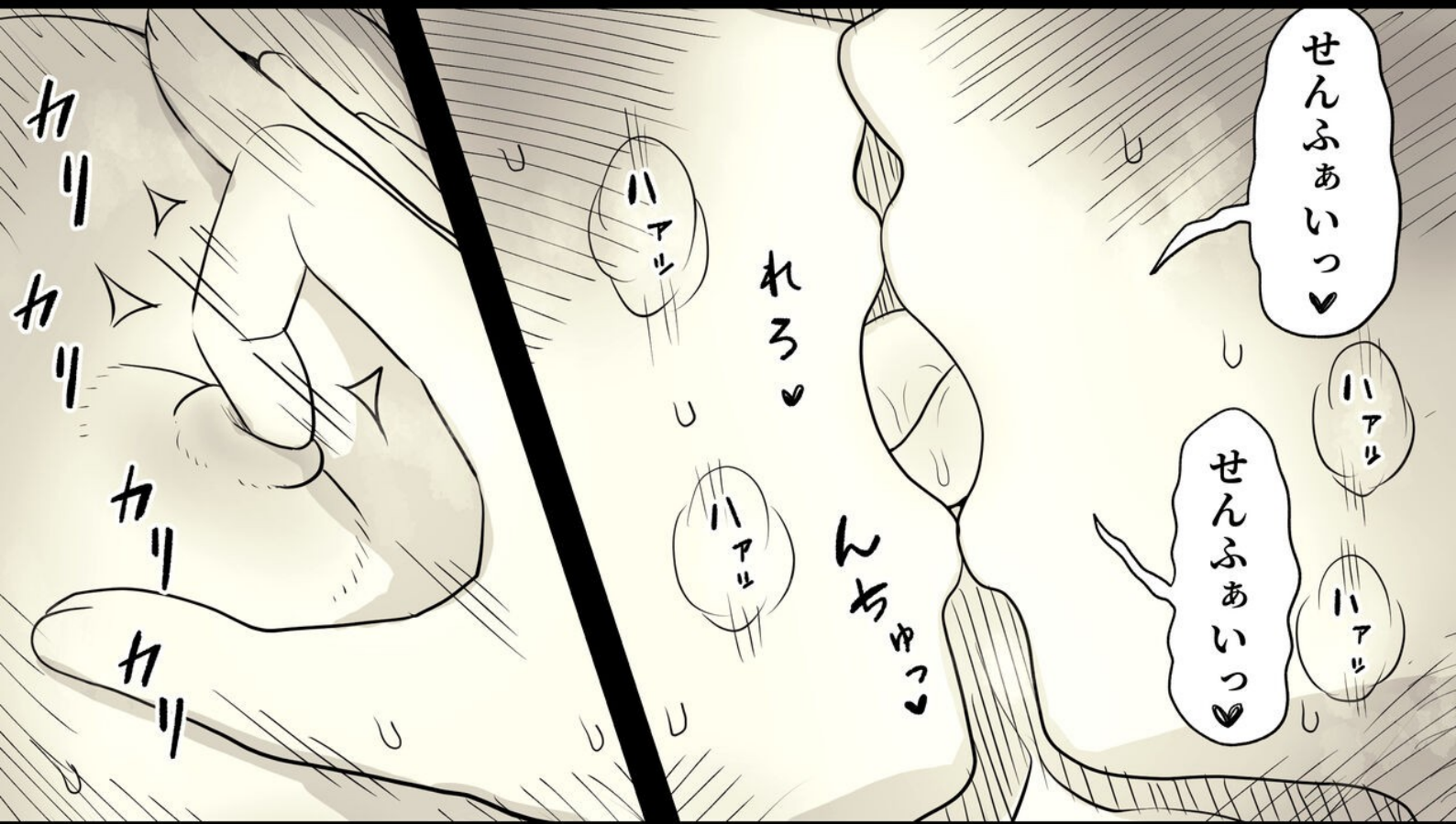
かっ
かっ
かっ



敏感になりすぎた僕の体は、
彼女の責めの全てに
過剰に反応し
暴走してしまいました。



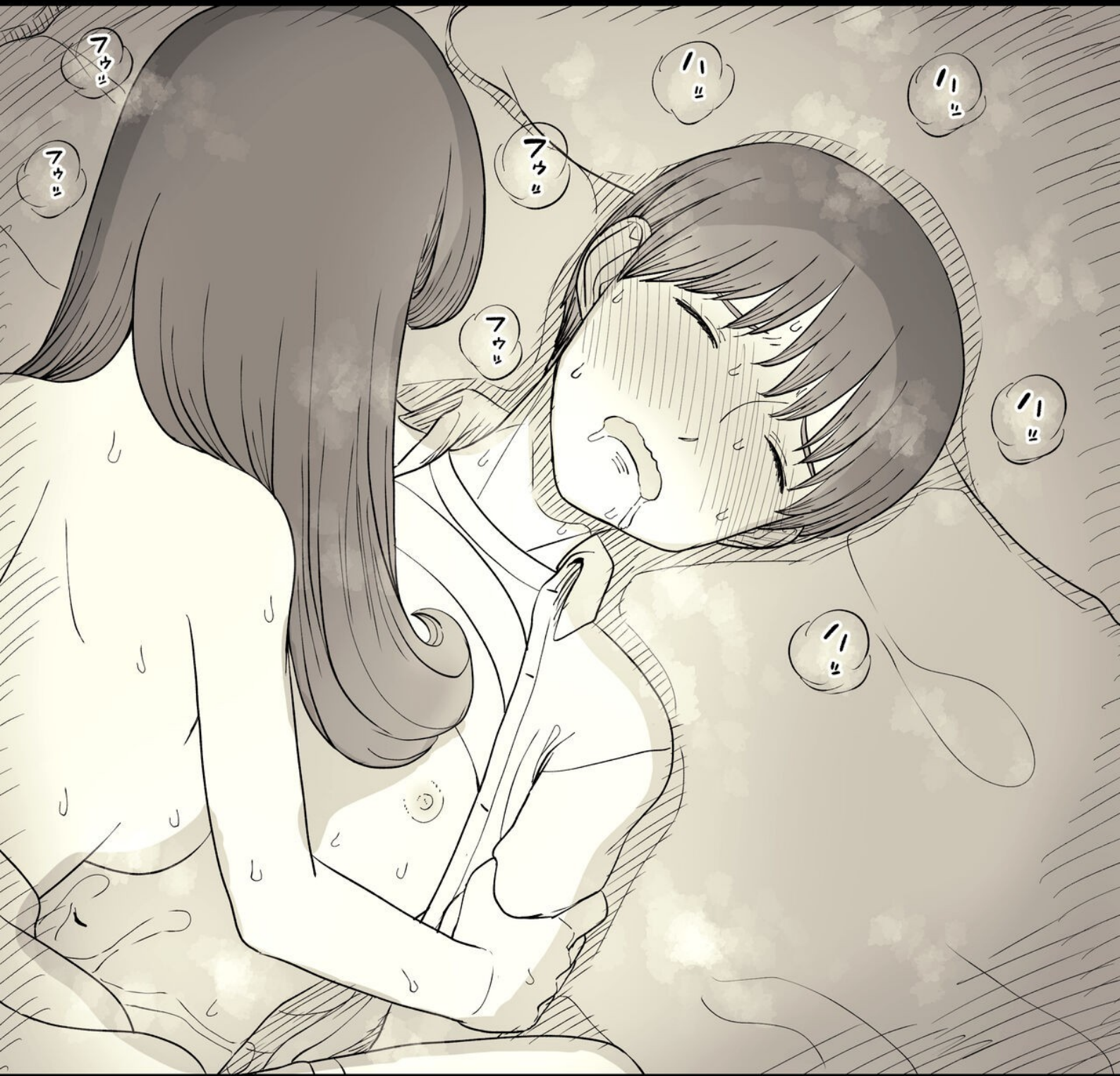
彼女も僕の事を
襲いたくて襲いたくて
仕方がなかったのを
随分と我慢していたようで、
獣のように僕に貪りついて
興奮してしまいました。



貪り食べられながら僕は、
何度も何度も彼女の中に射精してしまいました。

彼女も自ら僕の性器を膣の奥まで貪り
子宮に叩き付けながら、
何度も何度もイッているようでした。





まだ、
まだ足りない
でしょう？

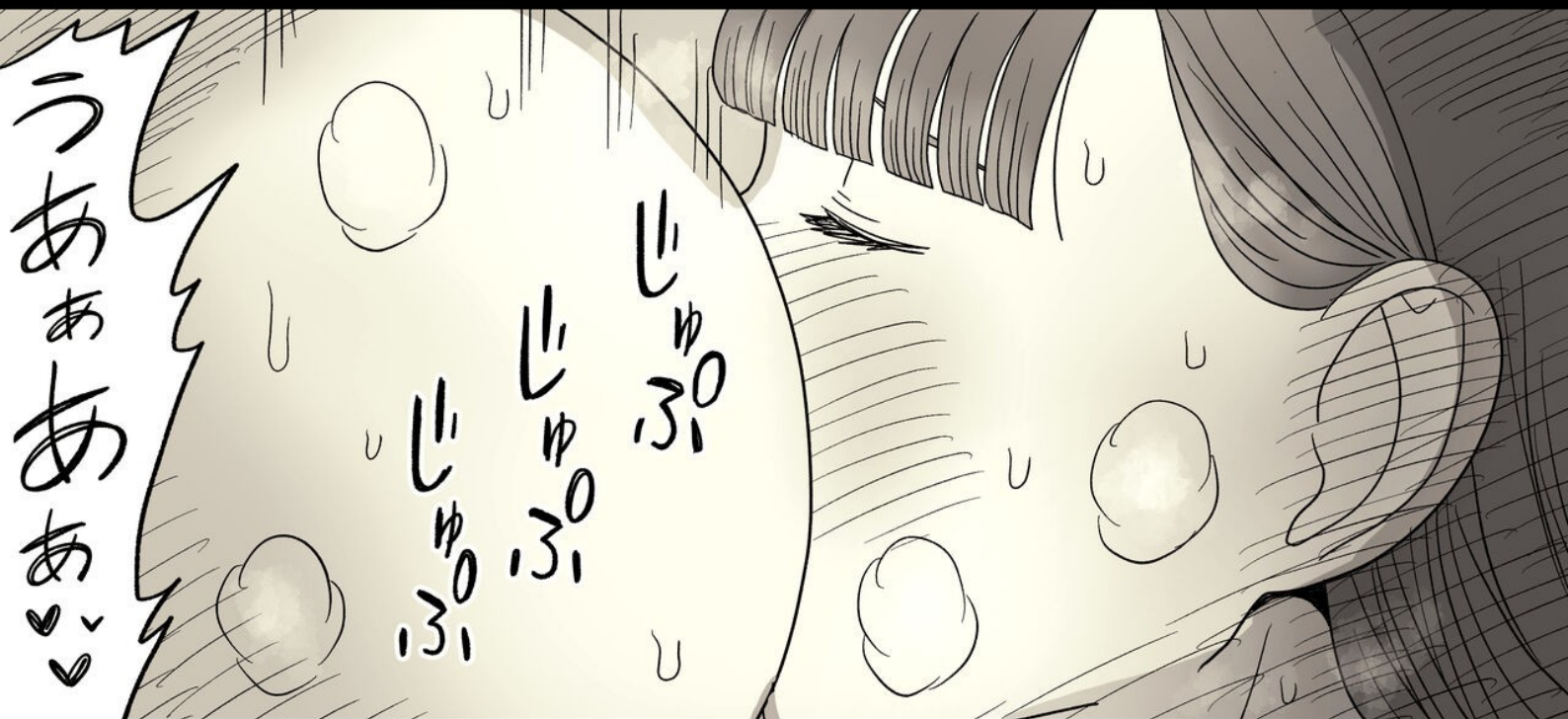
先輩 ♡

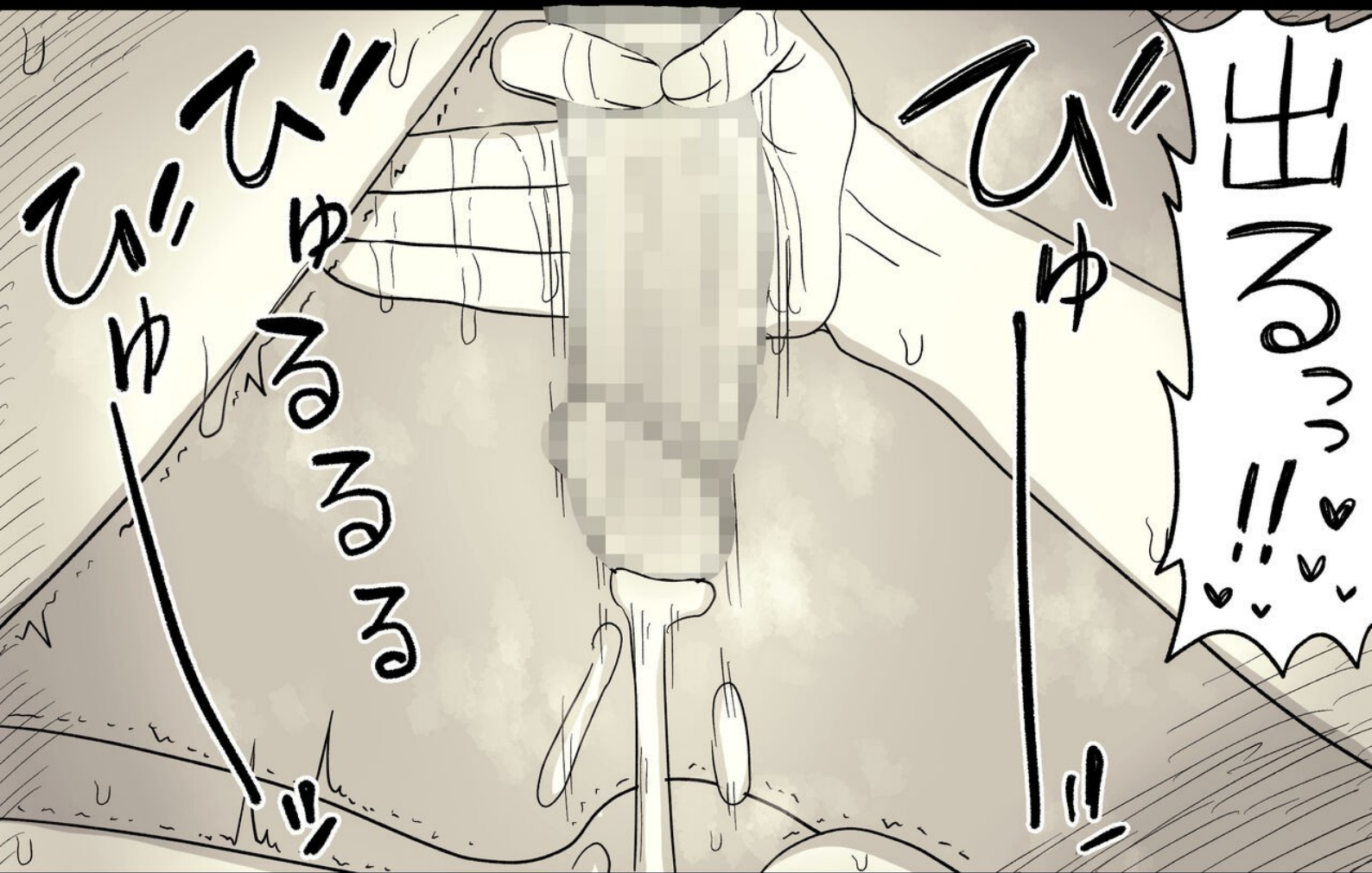
私、
知ってるの。

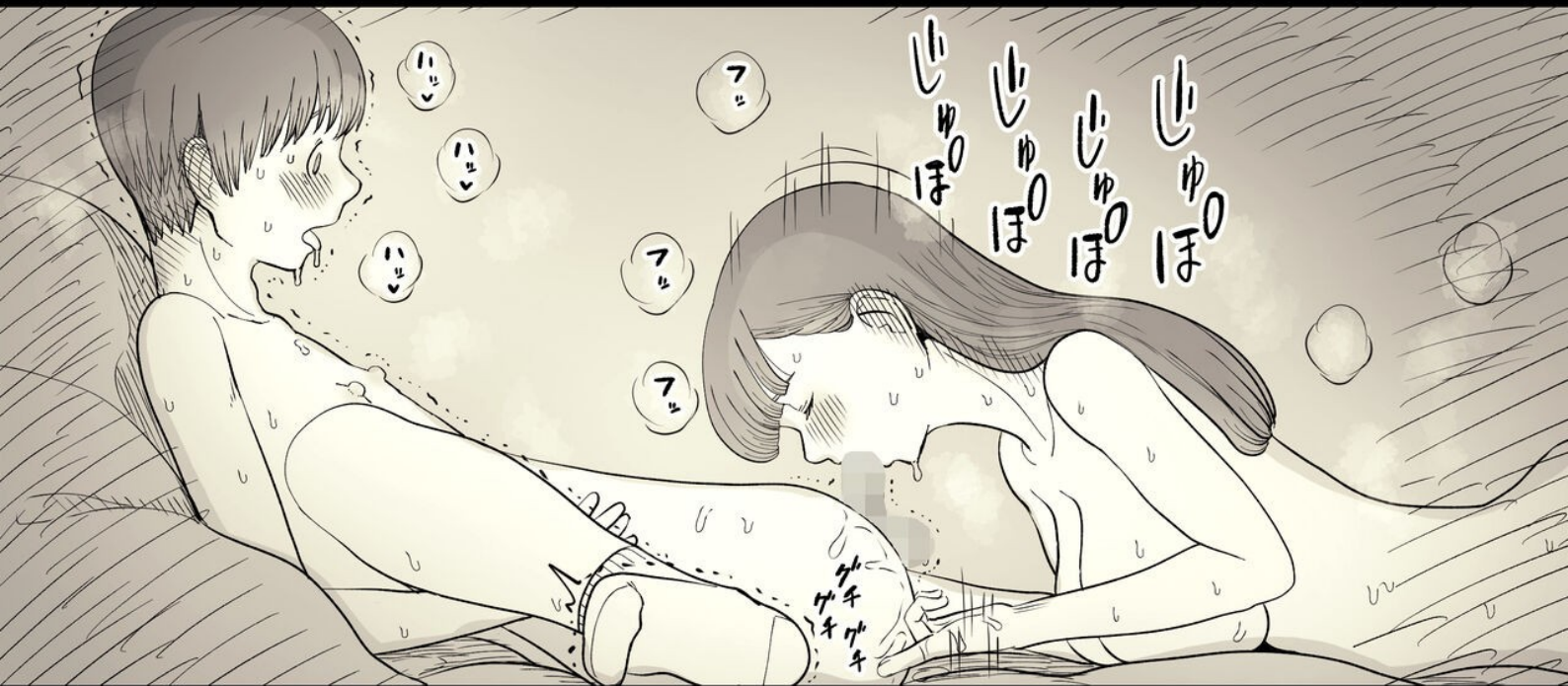
解ってるの。 ♡

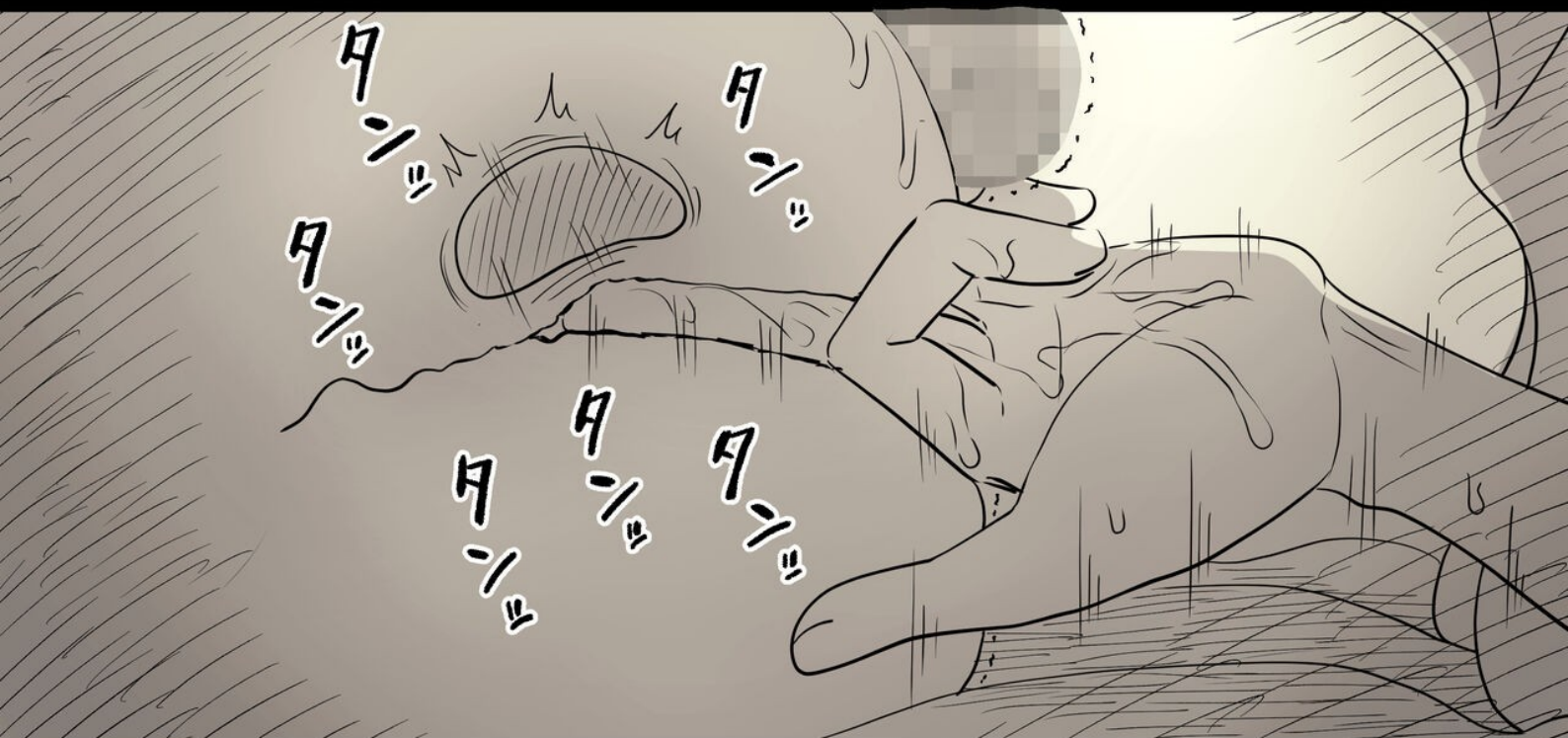
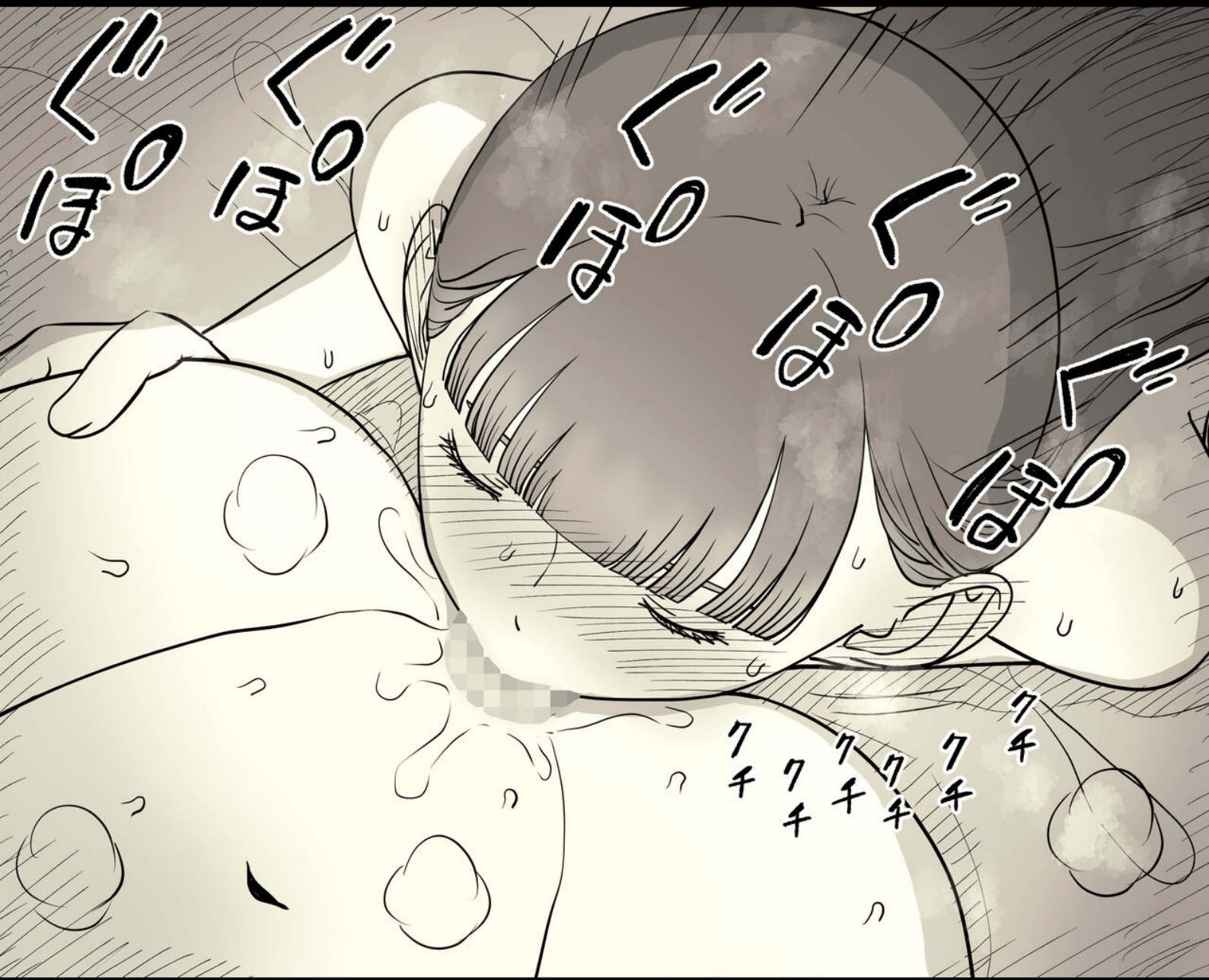
ねえ、先輩、
もっと
して欲しい事、

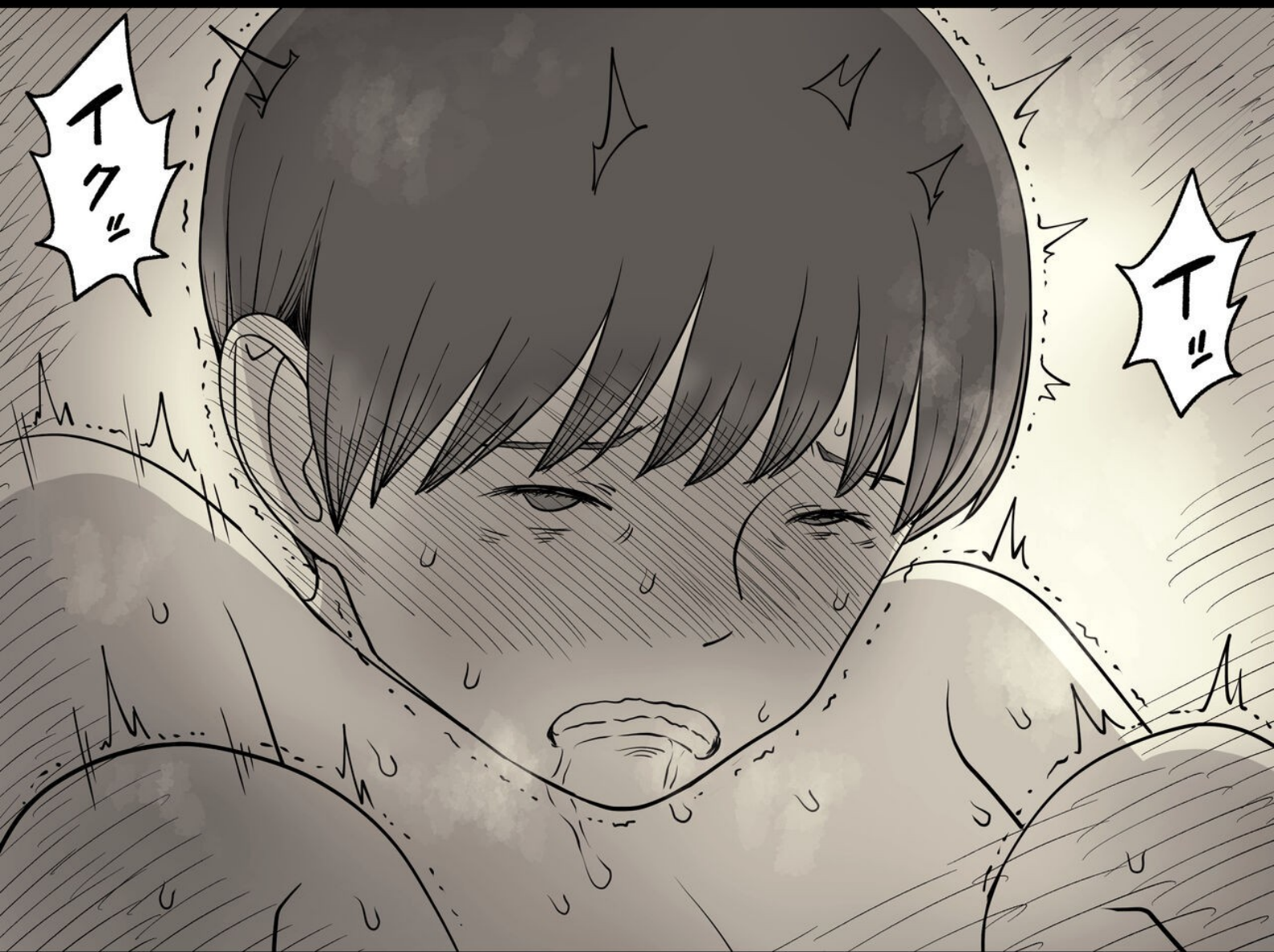
いっぱい
あるでしょう？

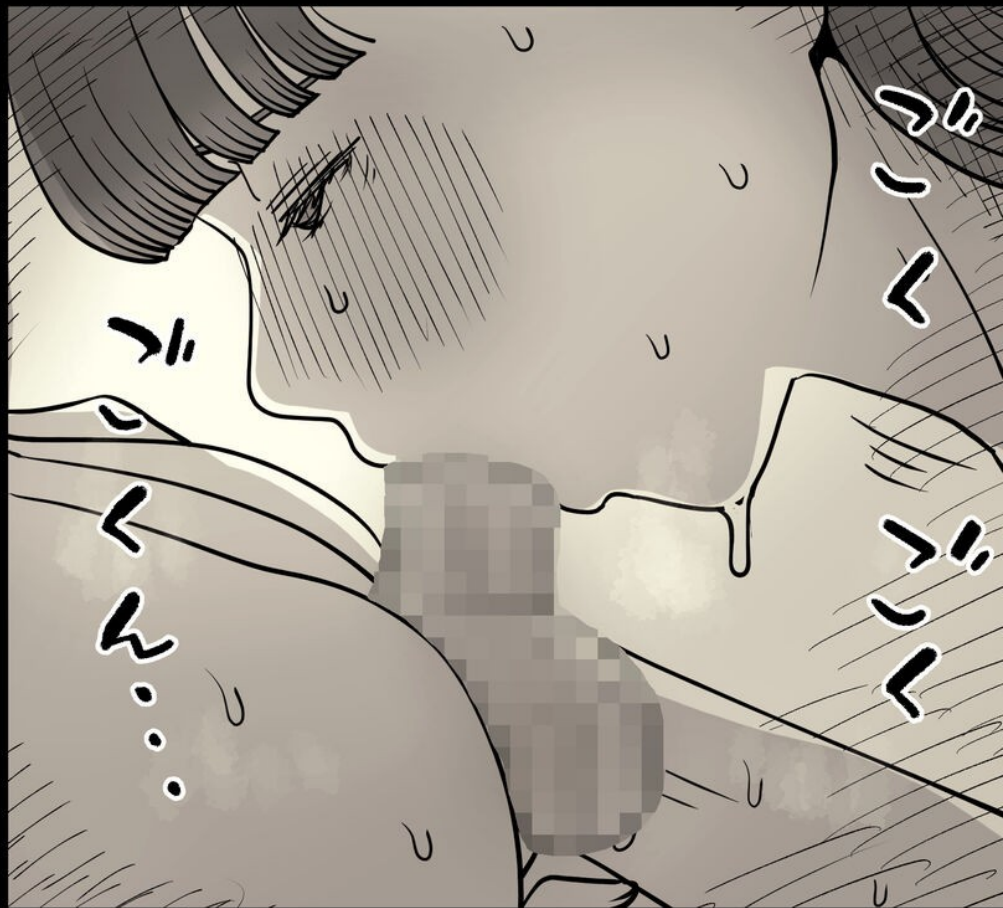
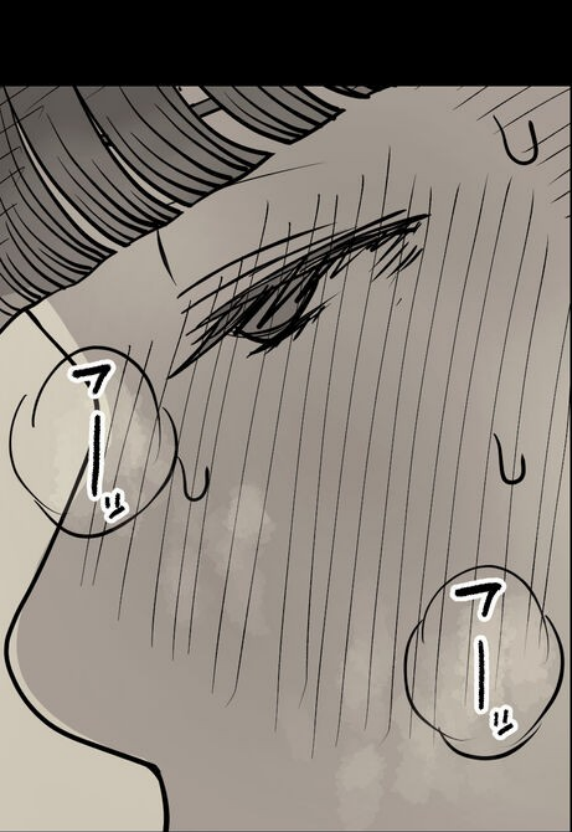
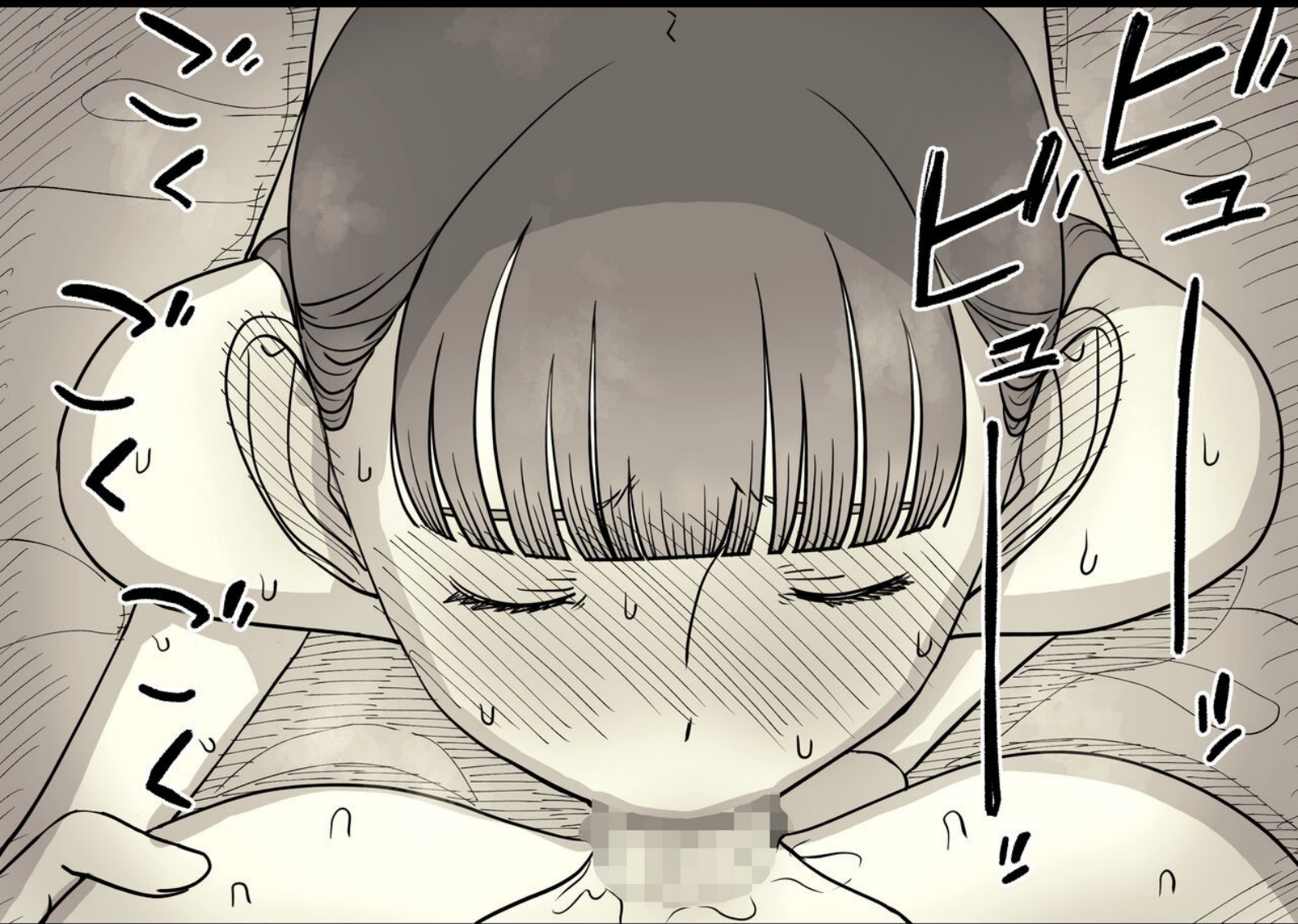


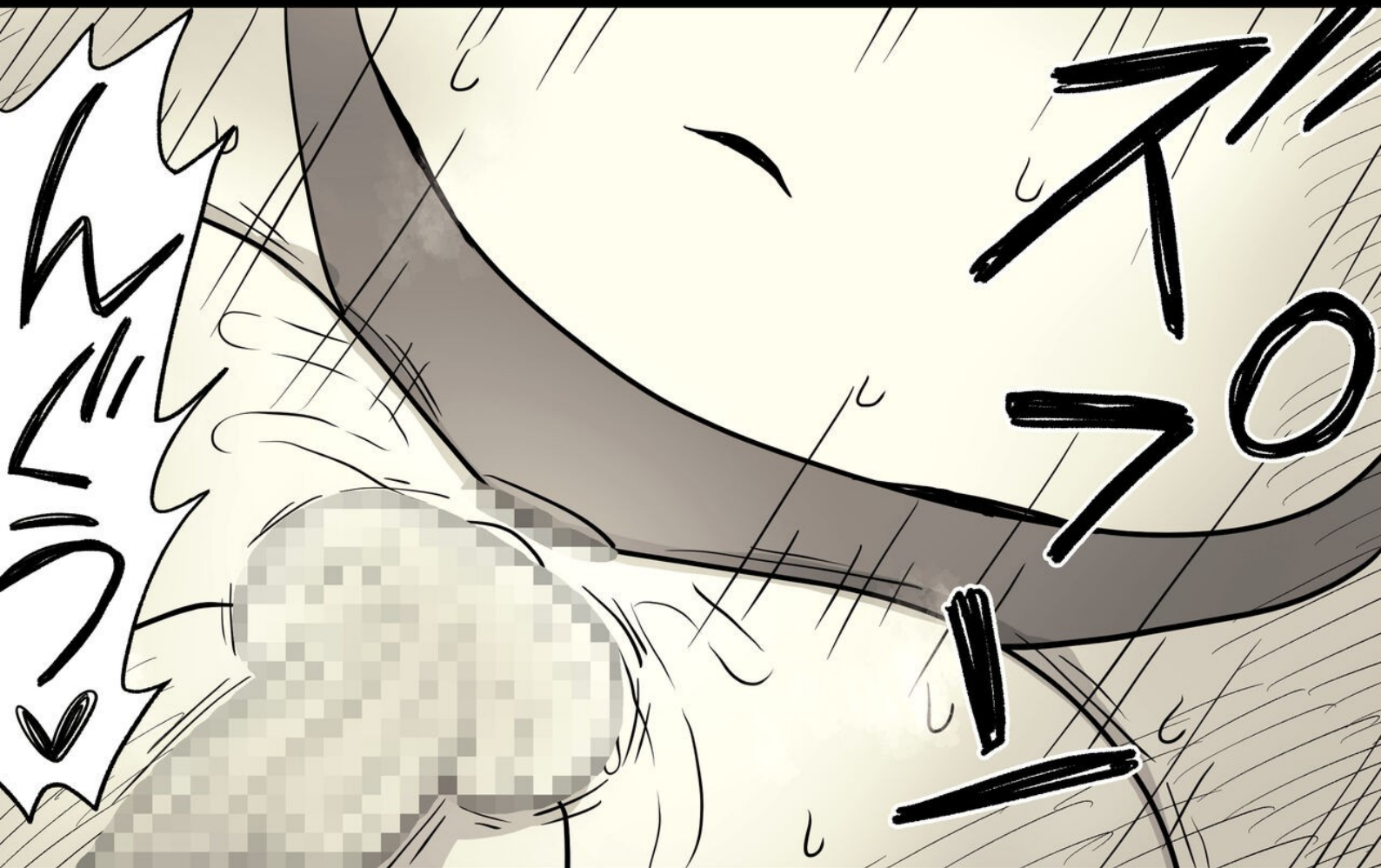
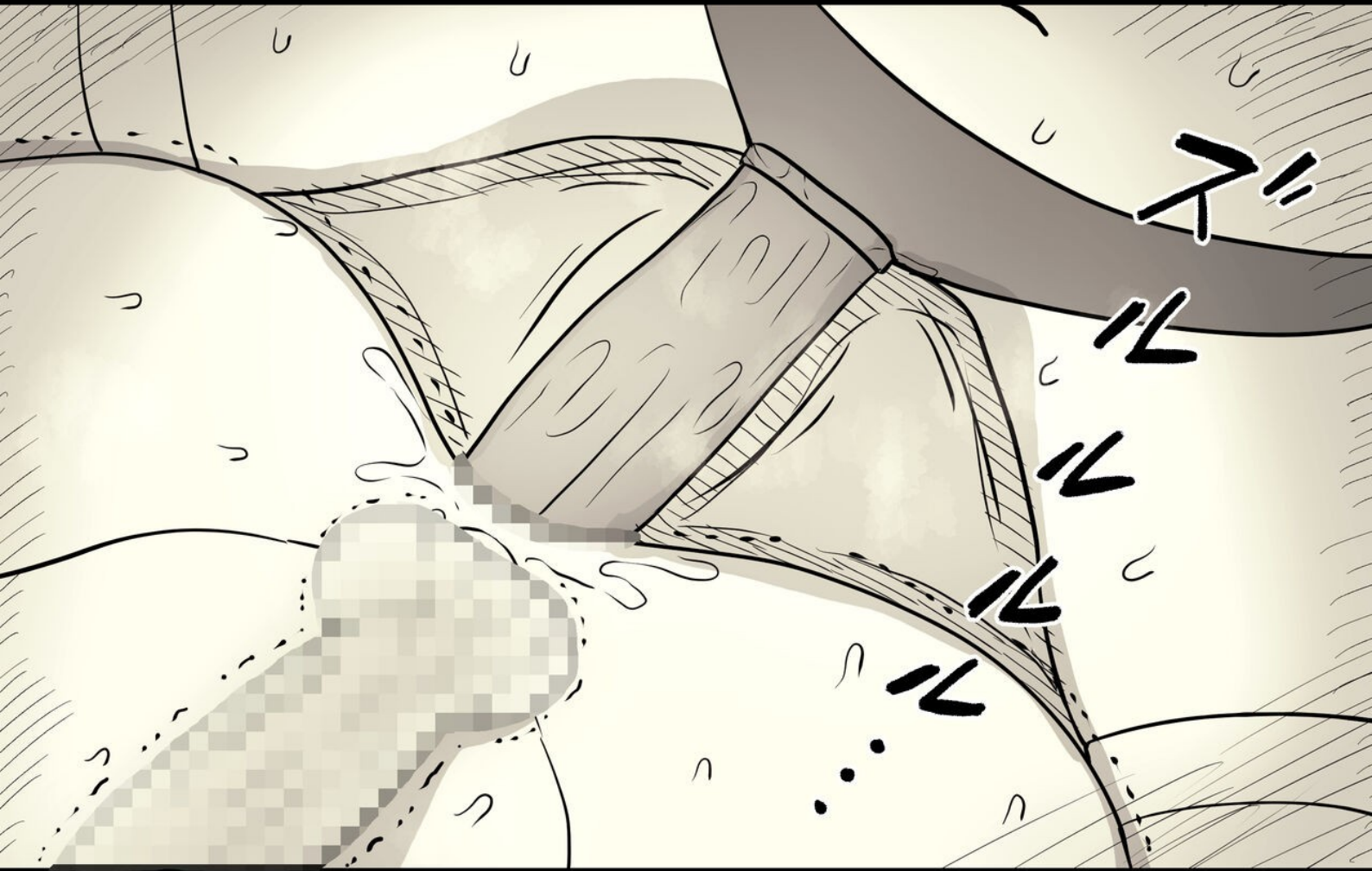


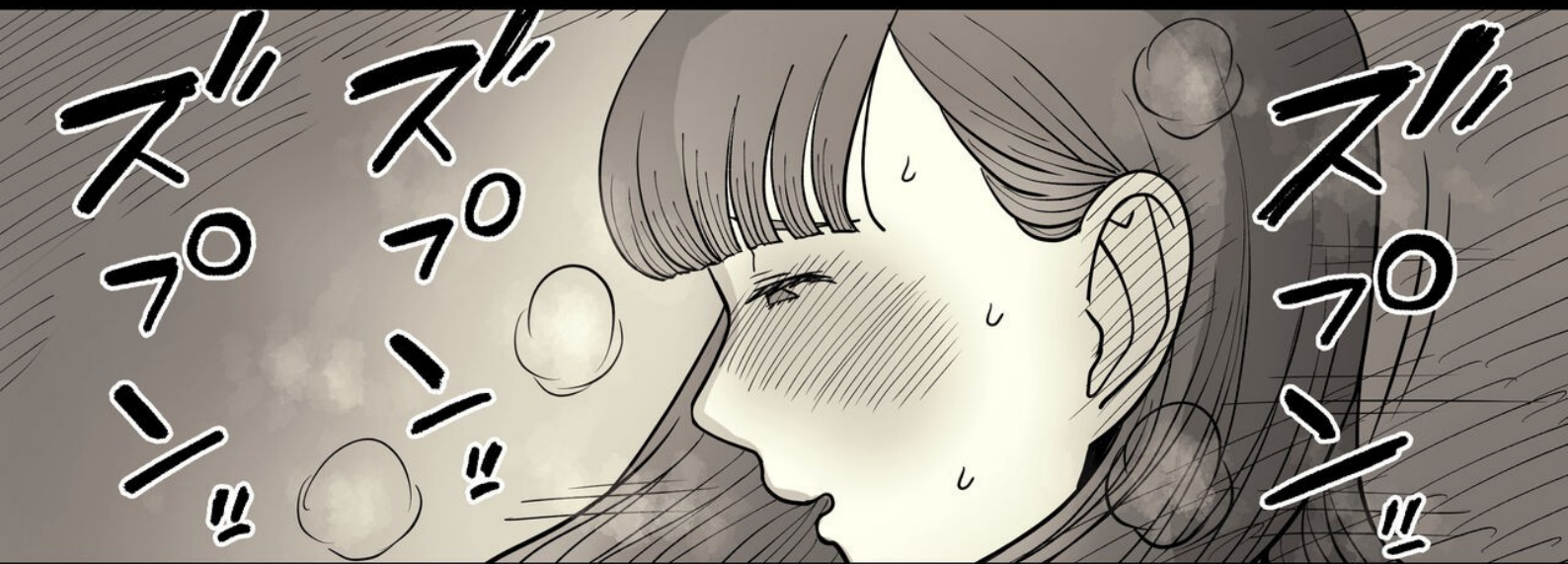
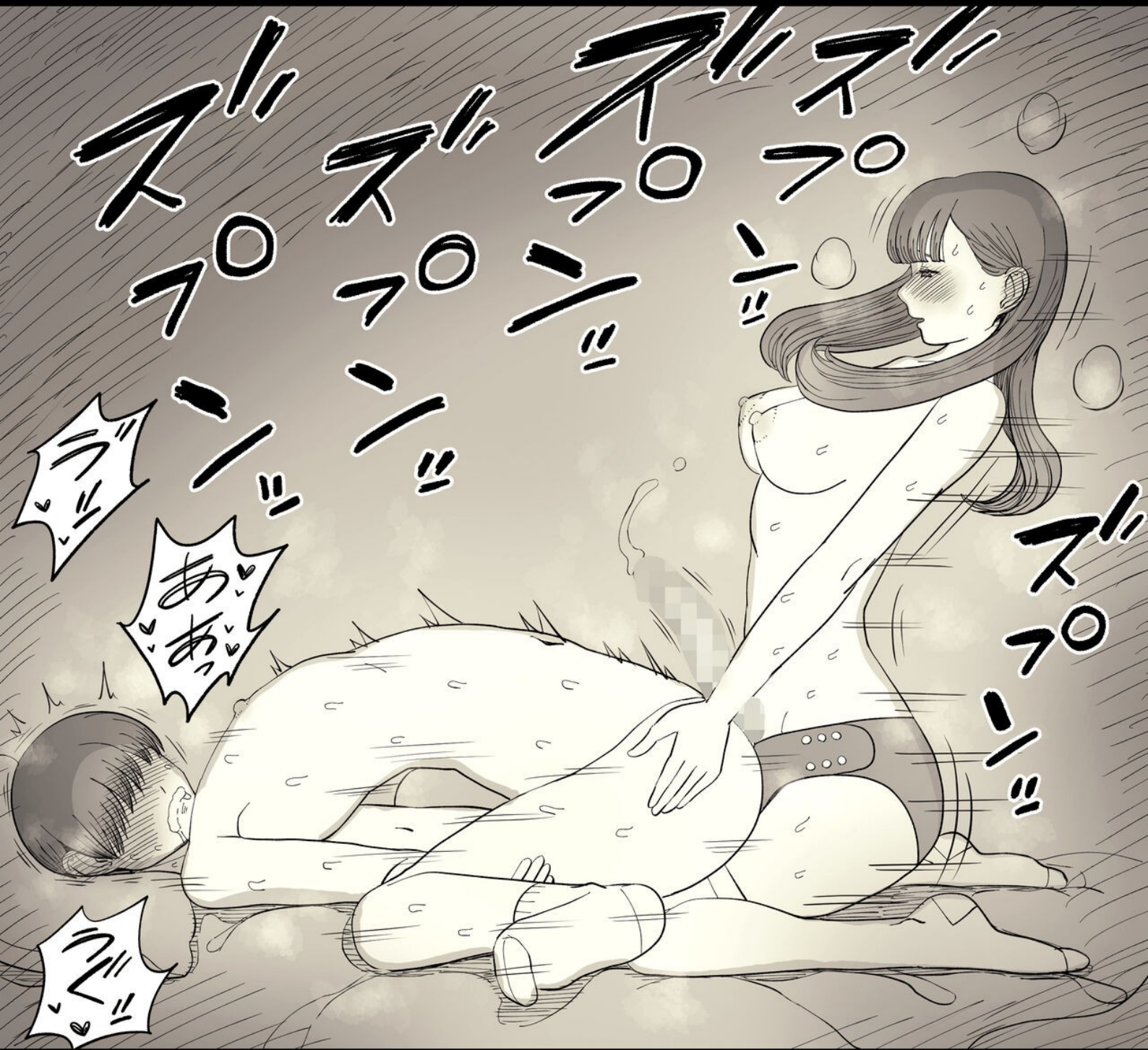














一晩中彼女に貪られ、明け方になる頃、

僕はまた、
彼女の着ていた服を着せられ、女装させながら…

可愛い…

可愛い…

可愛い…

フッ

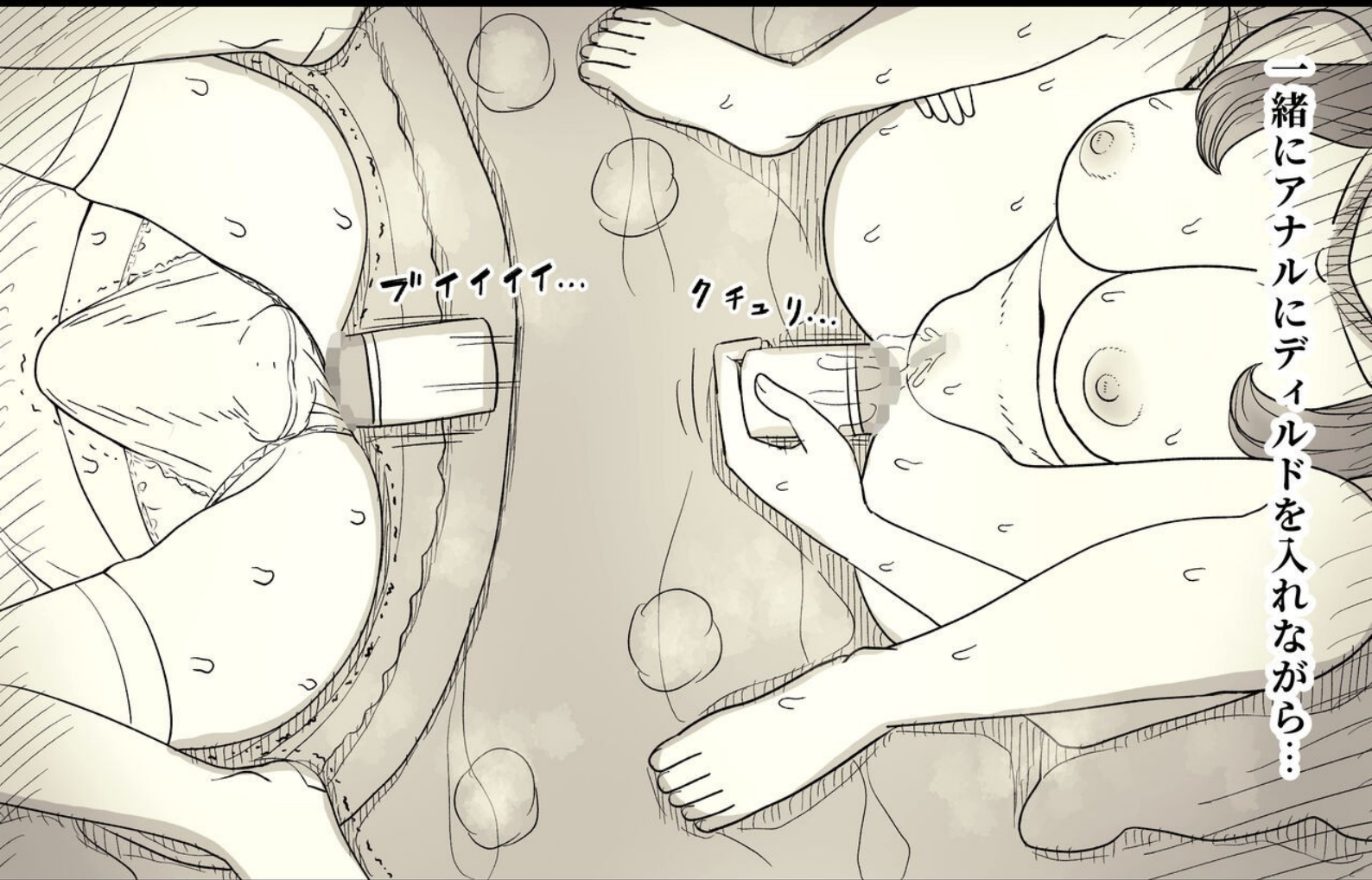
フッ

フッ

フッ

フッ





一緒にアナルにデイルドを入れながら…

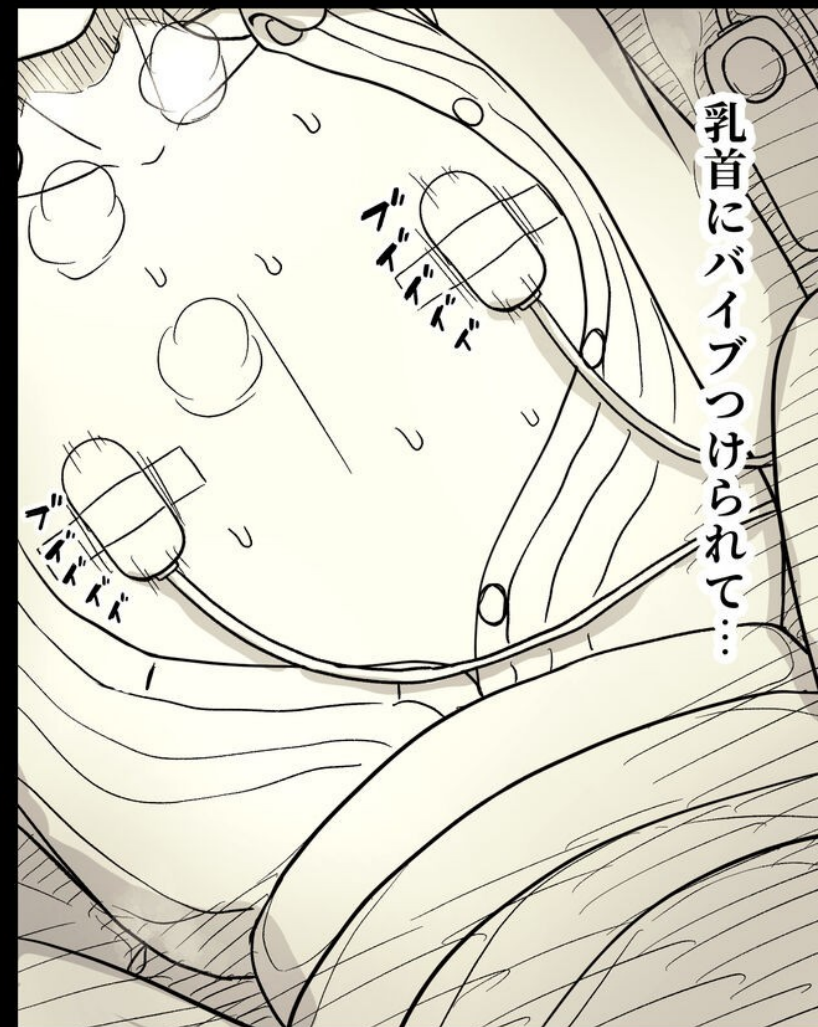
ブイイイ…

クチュリ…



拘束されて…

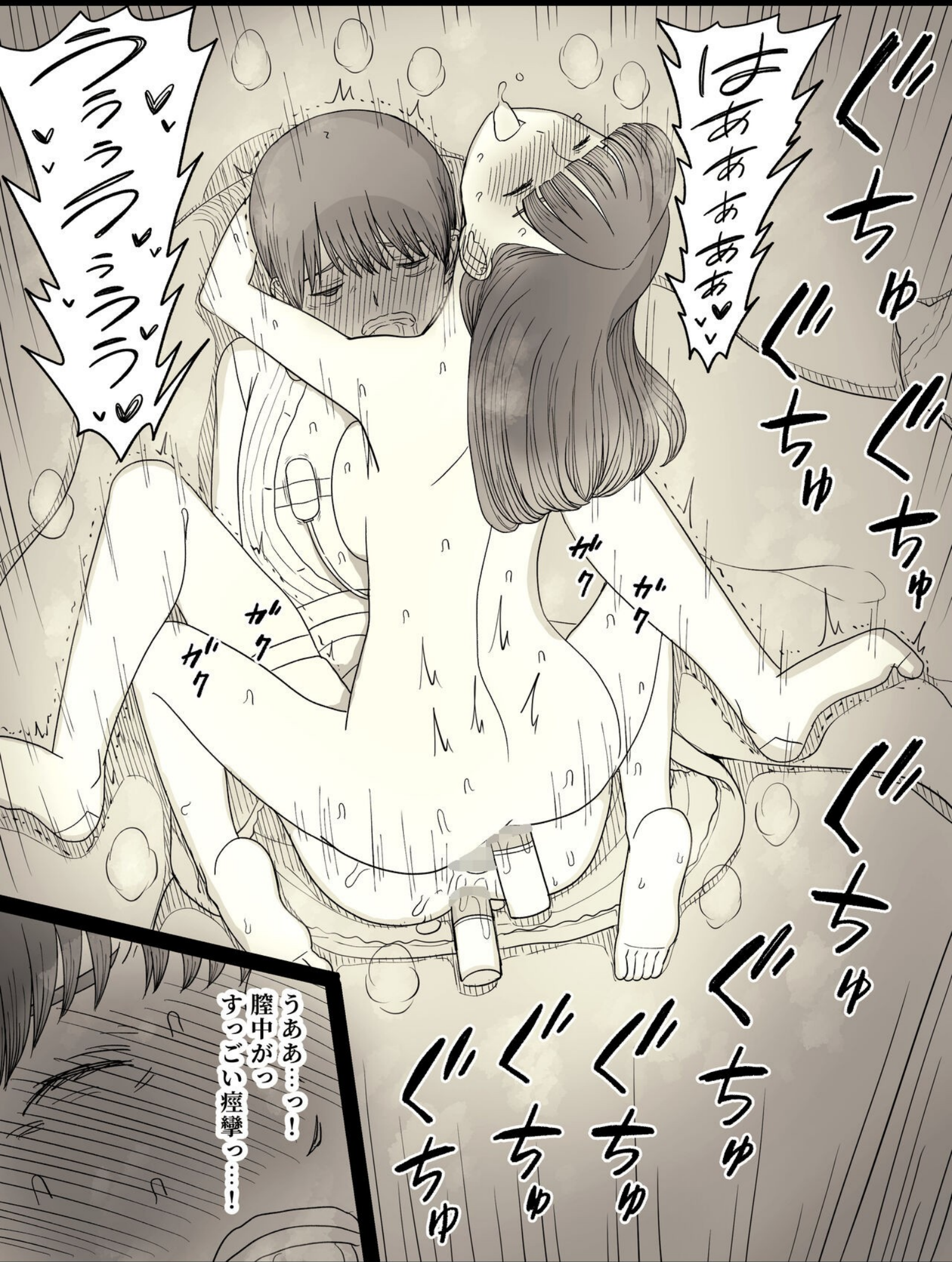
ギチ…



乳首にバイブつけられて…

ブイイイイ

ブイイイイ



はっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ

はあ はあ はあ はあ はあ はあ はあ はあ はあ はあ

か かく

か かく

か かく

か かく

ぐ ちゅ

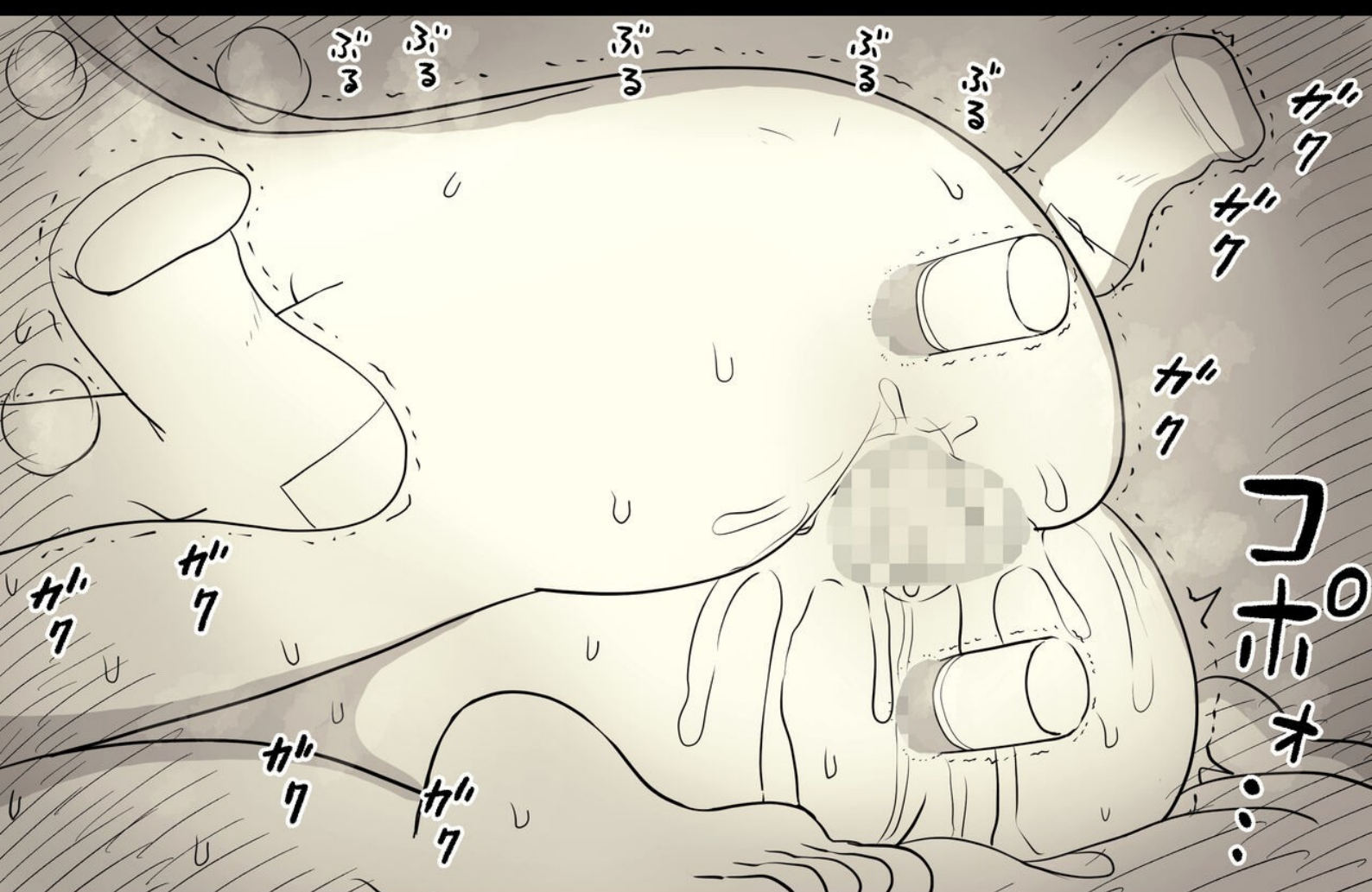
ぐ ちゅ

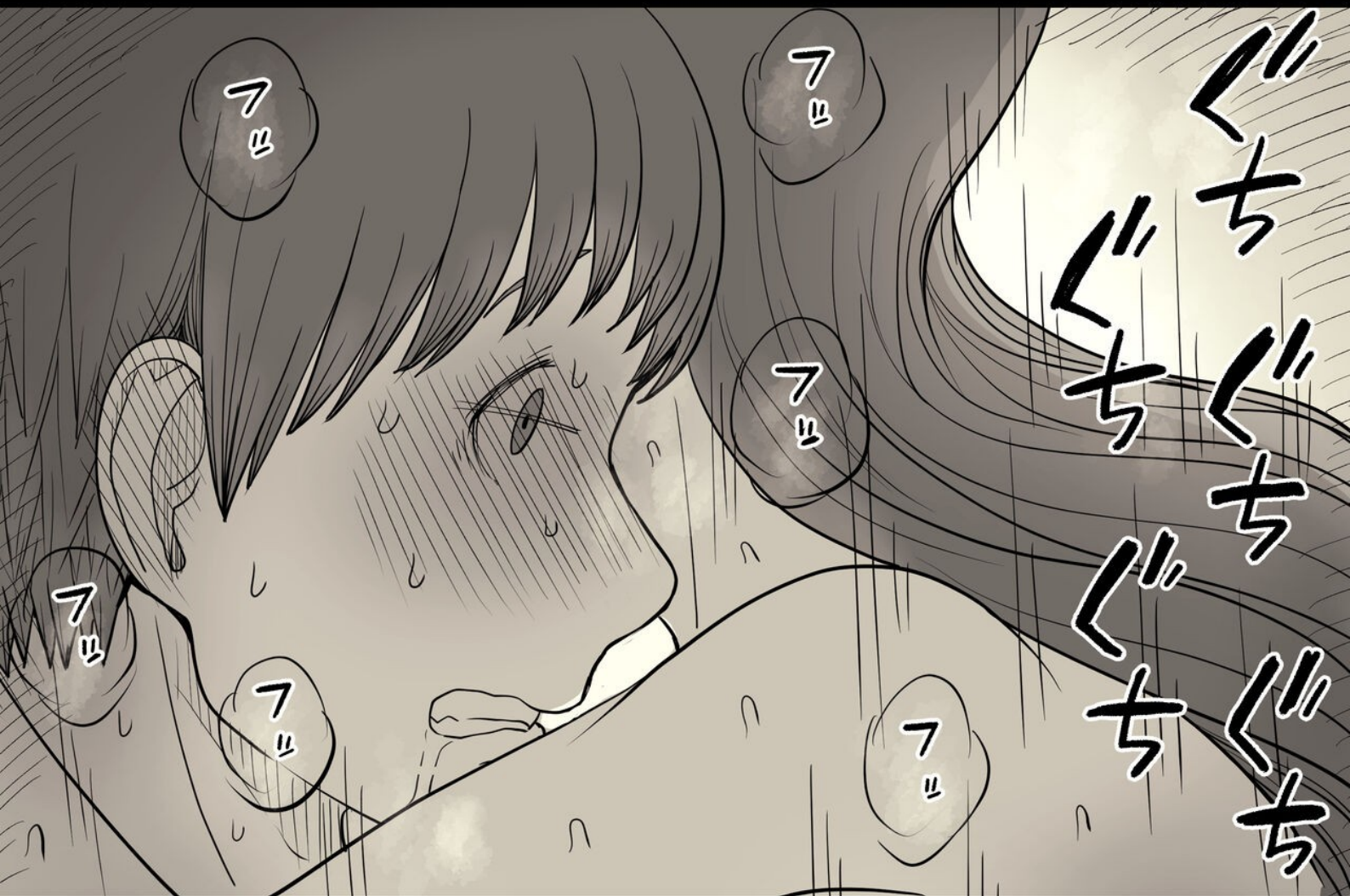
ぐ ちゅ

ぐ ちゅ

ぐ ちゅ

うああ...!!
膣中がっ
すっごい痙攣っ...!!





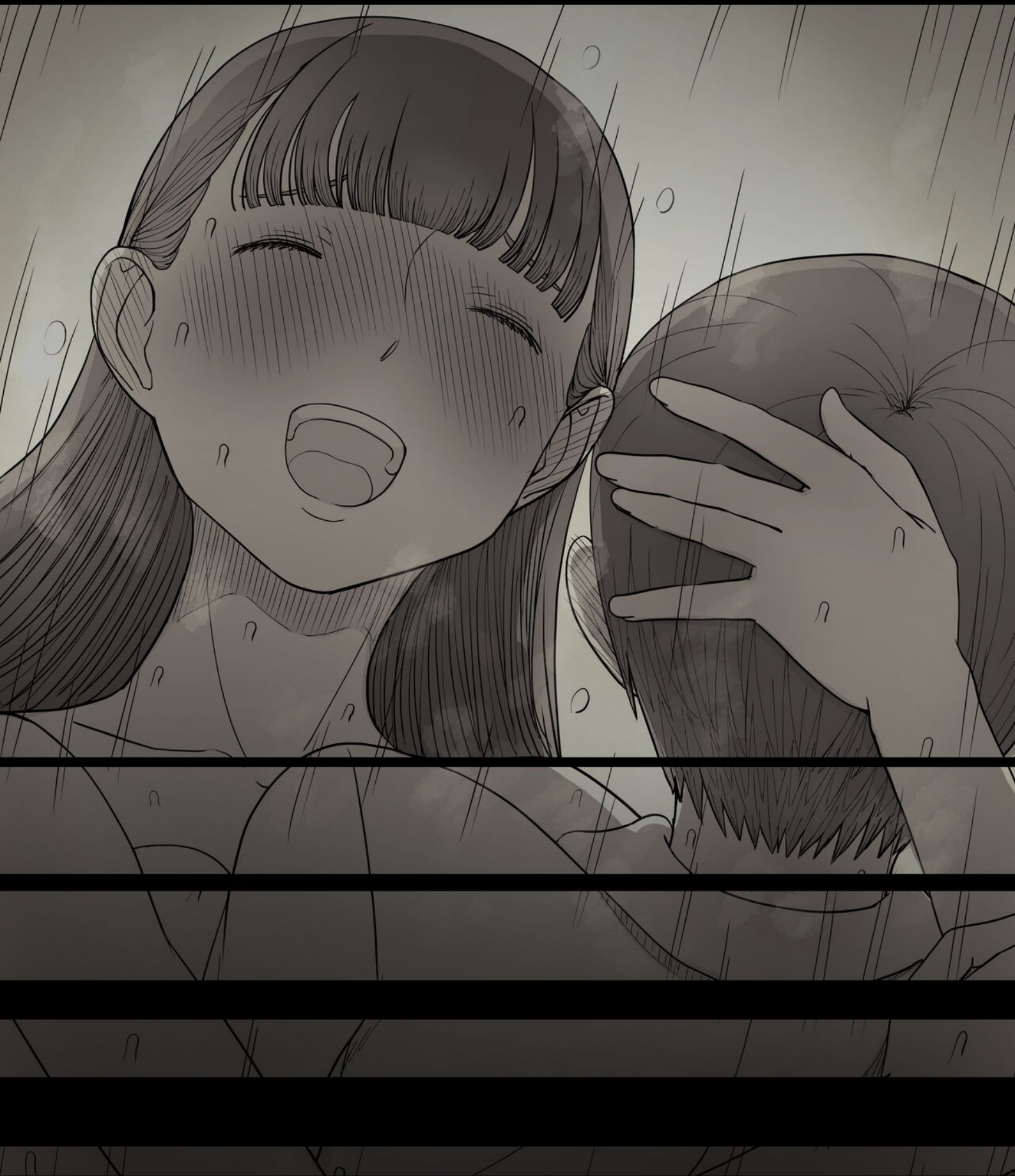


ああっ
先輩可愛いっ!

可愛いっ!
好きっ!

好きっ!

好きっ!





何週間もおあずけされ：焦らされ続けた後の：

こんなにも濃密で激しいセックスの絶頂を知ってしまった僕達：

こんな魅惑的な交わりを知ってしまった僕達は：

この先どんな風になっていくのだろうか：

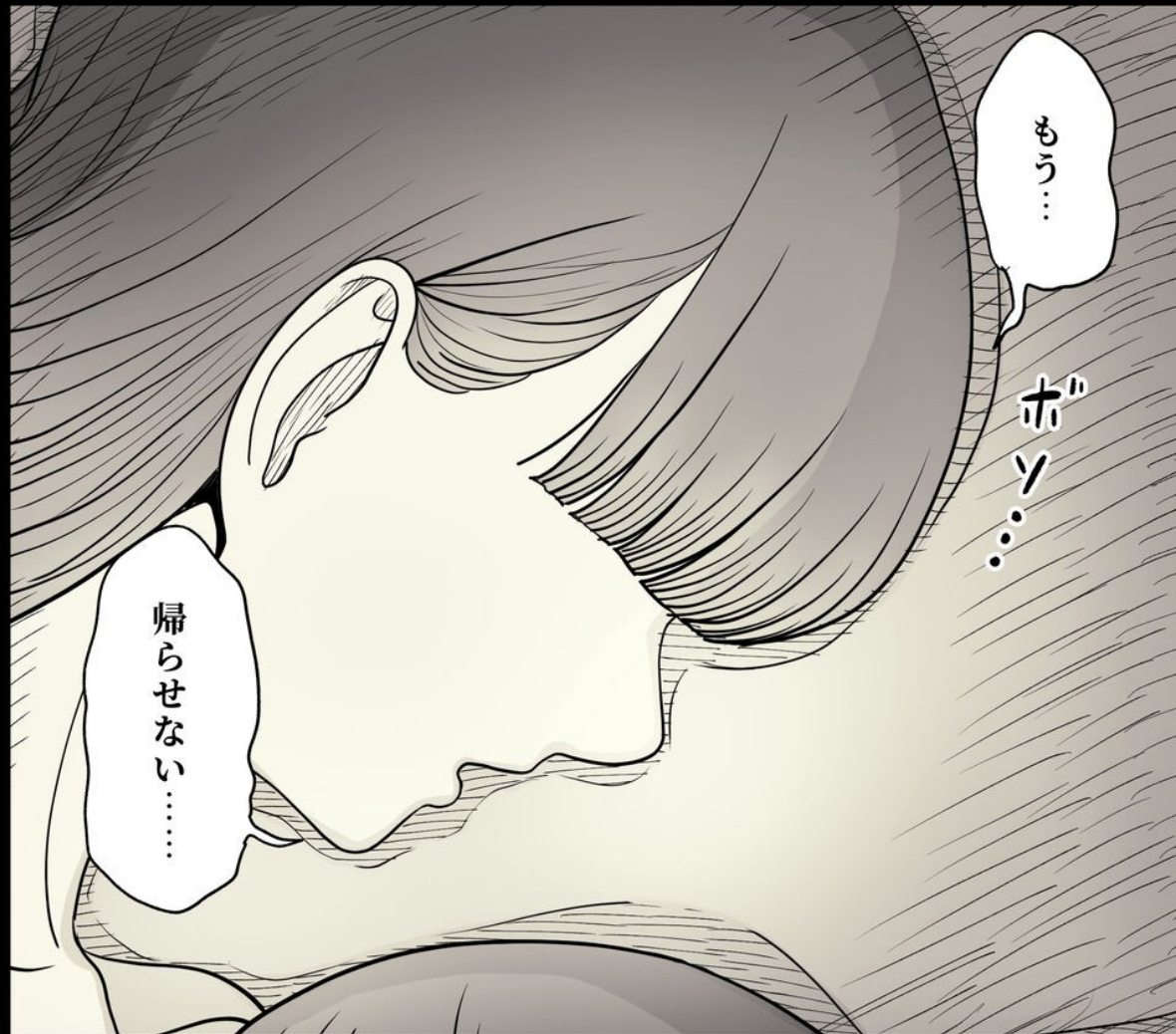
そんな事をぼんやりと思いながら、

今日もまた、彼女に身を綺麗にされ…胸に抱かれ…





え………？



帰らせない……

もう……

ホソ……



もっと一緒に
いたい……

ずっとずっと
一緒に……



先輩……

私……

もう……

限界
なんです……

今日から一緒に…

ここで…
暮らしましょう…。

おわり

文学女子に食べられる 4

サークル： ひまわりのたね
作： 種乃なかみ

2022/08/29